特定非営利活動法人
ぷれいす東京

2016年度
年間活動報告書

目次

1. ご挨拶

予防指針の改定の年に …… 2

2. 部門報告

事務・総務 …… 3

ホットライン …… 11

Sexual Health Project …… 19

Gay Friends for AIDS …… 24

ネスト …… 29

バディ …… 43

HIV陽性者と周囲の人/確認検査待ちの人への相談サービス …… 47

研究・研修 …… 59

予防指針の改定の年に

特定非営利活動法人ぷれいす東京　代表　生島 嗣

昨年は、認定NPOのサポーター募集に、多くの方々が手をあげてくださいました。このことは、本当にありがたく、活動を続けていく上での励みになりました。しかし、私たちの事前の調査が不十分であったため、2017年度に認定NPOの申請をすると却下される可能性が高いことがわかり、申請を１年、先延ばしすることにしました。皆様への協力依頼にあたり、私たちの準備や見積りが甘かったことを深くお詫び申し上げます。今後も、毎年100人以上のサポーターが必要です。どうぞ、引き続きご支援をよろしくお願いします。

さて最近、報道で北海道大学大学院医学研究科の西浦博教授による研究成果が紹介されていました。日本の感染者の捕捉率は約8割で、5人のうちの4人は、自分の感染に気づいており、1人は自分の感染を知らずにいる、という推計です。

自分のHIV感染を知った直後に、ぷれいす東京の相談サービスに繋がった人たちから聞こえてくる感想は、「やはり」という声と、「なぜ自分が」という声です。これまで、検査が怖くて、避けていたという人は、一定の割合で存在します。もし陽性だった場合、その先の具体的な生活イメージが見えないことの恐れから、検査を受けられずにいたのです。古いネガティブなイメージや、当事者の姿の見えなさから、未だに情報をアップデートできていない人達はまだまだ存在するのです。

男性とセックスをする男性（MSM）を対象にしたいくつかの調査の結果、過去に一度もHIV検査を受けたことがない人たちの理由は、「怖いから」、「可能性がないから」、「検査機会がなかったから」の3つでした。

「根拠はないけれども、自分は感染していないはず。大丈夫なはず」と問題を棚上げしていたり、そうせざるを得なかったという声は、過去の自分の姿を振り返る表現として、多くの陽性者から聞こえてきます。

陽性者向けの相談の中でも、定期的にHIV検査を受け、早めに感染に気づく人がいる一方で、結果を知る怖さから、一度も検査を受けず、症状が出て入院し、初めて感染を知る人に時々お会いします。検査を避けてきた人たちの中にあるスティグマは、自分の感染の事実を受け入れることにも、少し時間を要するなど、陽性判明後にも負の影響を与えています。

ぷれいす東京は、HIV検査を受ける前の感染不安者や情報を求める人のために、電話相談を設けています。時に、不安と向き合う作業は、一人ではなく、見守り役、ガイドがいる方がよりスムーズに行うことができます。私たちは、様々な形で、自分のHIVをめぐる現実と向き合おうとする人たちで、相談を必要とする人たちを応援しています。

さらに、HIVはとても身近であるというリアリティ、治療技術が進歩したことにより、恐れずに早めに感染を知る事で長くうまく付き合える様になったことなどを、陽性者の声を活かして情報発信をしています。当事者参加型の手法を活かして、多くの人の「HIVのリアリティ」や「HIVの身近さ」のスイッチを入れる活動を、今後も地道に続けていきたいと考えています。

1. 2016年度のハイライト

●「ぷれいす東京NEWS」の配信開始と「ぴぃちゃんカード」の作成

佐藤 郁夫

「ぷれいす東京 Newsletter」は、1997 年 11 月から 2016 年 5 月までの 20 年間に 89 号を紙版で発行してきた。その時代に重要と思えることを様々な方々に書き下ろしてもらい、巻頭を飾った。活動の足跡や関係している人たちの声、HIV 陽性者の姿を反映してきた。しかし時代は流れ、インターネットやメール、SNS が主流となった。スタッフ会議で検討を重ね、メール配信による「ぷれいす東京 NEWS」として新たな一歩を踏む出すことになった。準備が大きく遅れたが、11 月号から発行を開始した。ぷれいす東京 Web サイトからメールアドレスだけで配信登録が可能なので、ぜひご購読願いたい。（PDF 版も Web サイトで閲覧可能）

「ぷれいす東京のゆるキャラみたいなのが欲しいね」というスタッフの声を聞いたデザイナーの新藤岳史さんが、スラスラと描いてくれ、ぴぃちゃんが誕生。そのぴぃちゃんと「ぷれいす東京 NEWS」やぷれいす東京の相談の情報をまとめた「ぴぃちゃんカード」がトントン拍子に出来上がった。Web サイトの「プリントセンター」より送付の申し込みができるので、ご利用いただきたい。

●HIV陽性者による電話相談の開始と「判定保留／確認検査結果待ちの人へ」のページ開設

牧原 信也

今年度の 6 月から、ポジティブラインで陽性の相談員による時間帯を新たに設けた。これは他の陽性者と電話で話してみたいけどプライバシーが不安、地方在住でなかなか他の陽性者と話せる機会がない、といった声に答える形で開始したものである。毎週木曜日 15:00 ～ 18:00 に、2 名の相談員が交替で担当している。この 2 名は、既に他の電話相談で対応経験があり、昨年度からの研修を経た上で実際の業務にあたっている。

また、ぷれいす東京の Web サイトに「判定保留 / 確認検査 結果待ちの人」に向けたページを作成し、5 月より情報発信を開始した。いろいろな検査方法が広まるなかで、即日 / 迅速検査や郵送検査を受けて、「判定保留 / 確認検査待ち」の結果を受け取る方が増えてきている、しかし、結果を受け取るまでの間、どこに相談していいのかわからず、一人で不安に過ごした経験を相談の中で聞くことがあり、よりわかりやすい形で相談窓口や検査の情報提供ができることを目指し作成した。

内容としては、「誰にも話せないどうしよう」「これからどうなるの」「結果が出るまでの過ごし方のコツ」などの不安や疑問に対し、検査の情報提供や、他の相談の窓口などの紹介をしているので、ぜひ一度ご覧いただきたい。

●広がる企業とのコラボ

生島 嗣

ザ・ボディショップニッポン基金からの助成を受けて、HIV/ エイズに触れる機会が少ない人たちに 3 回の学習会 / 交流会を地域に開かれている形で開催し、性の健康・エイズについて情報を増やし、語れる場を提供した。3 回合計で 79 人の参加を得た。

第1回　4月29日（金・祝）
「子どもやパートナーと性の健康について話してみる？」
第2回　5月5日（木・祝）
「話しにくい何かを抱える気持ちをシェアする会」
第3回　5月22日（日）
「HIV陽性者と話そう！～Living Togetherを体験するワークショップ～」

この試行的なイベントで新たな人たちとの出会いもあったが、広報など私たちの課題にも気づくことができた。開催を後押ししてくださったボディショップの皆様に深く御礼申し上げる。

またヴィーブヘルスケア株式会社からの寄付により、TOKYO AIDS WEEKS のゲイ男性コーラスの第 2 回を開催することができた。観客は 200 人を超えた。さらに、翌年の TOKYO AIDS WEEKS の準備作業も始めることができている。

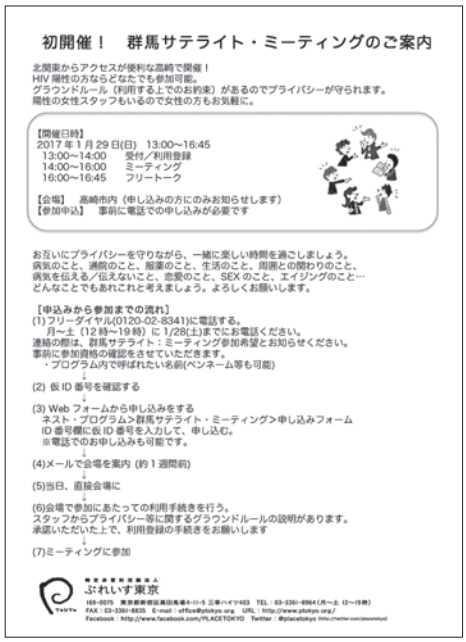
また、ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会からの助成で、「Living Together」というコンセプトを社会で共有するためのプログラムの周知 Web ページ及び冊子制作を実施中である。この「Living Together」のコンセプトを紹介すると同時に、リアリティを共有するための身近な方法などを理解しやすいかたちでまとめ、ぷれいす東京の Web サイトにアップする予定である。

ぷれいす東京ではこれまでに、HIV 陽性者、パートナー、家族などの手記を掲載して、HIV のリアリティを感じて生きる人たちの声に触れてもらうための材料を収集してきた。今回はそれをどう活用してもらうかに焦点をあて、具体的な方法も例示する予定である。

●群馬サテライト・ミーティングの立ち上げ

佐藤 郁夫

ネスト・プログラムの一つとして、群馬でのサテライト・ミーティングを 2017 年 1 月 29 日（日）に開催した。ネスト・プログラムのボランティアスタッフの「ぜひ地元での開催をしたい」という声が基になり、半年間の準備期間を経て、開催にたどり着いた。地方都市ではまだまだ病気のことをオープンに話せる機会は少ないので、必要なプログラムだと考える一方で、プライバシーをどう守るかが最重要課題であった。そこでグラウンド・ルールの承諾を含めた通常と同様の利用登録を導入した。そのため、登録が済めば、他のネスト・プログラムにも参加できる利点ができた。全員が安心して参加できる環境ができ、ネスト・プログラムとしてきちんと位置付けることができた。今後も継続して開催していく予定である。



初開催！　群馬サテライト・ミーティングのご案内

北関東からアクセスが便利な高崎で開催！
HIV 陽性の方ならどなたでも参加可能。
グラウンドルール（利用する上でのお約束）があるのでプライバシーが守られます。
陽性の女性スタッフもいるので女性の方もお気軽に。

【開催日時】
2017 年 1 月 29 日(日)　13:00〜16:45
13:00〜14:00　受付／利用登録
14:00〜16:00　ミーティング
16:00〜16:45　フリートーク

【会場】　高崎市内（申し込みの方にのみお知らせします）
【参加申込】　事前に電話での申し込みが必要です

お互いにプライバシーを守りながら、一緒に楽しい時間を過ごしましょう。
病気のこと、通院のこと、服薬のこと、生活のこと、周囲との関わりのこと、
病気を伝える／伝えないこと、恋愛のこと、SEX のこと、エイジングのこと…
どんなことでもあれこれと考えましょう。よろしくお願いします。

【申込みから参加までの流れ】
(1) フリーダイヤル(0120-02-8341)に電話する。
　月〜土（12 時〜19 時）に 1/28(土)までにお電話ください。
連絡の際は、群馬サテライト：ミーティング参加希望とお知らせください。
事前に参加資格の確認をさせていただきます。
　・プログラム内で呼ばれたい名前(ペンネーム等も可能)
(2) 仮 ID 番号を確認する
(3) Web フォームから申し込みをする
　ネスト・プログラム>群馬サテライト・ミーティング>申し込みフォーム
　ID 番号欄に仮 ID 番号を入力して、申し込む。
　※電話でのお申し込みも可能です。
(4)メールで会場を案内 (約 1 週間前)
(5)当日、直接会場に
(6)会場で参加にあたっての利用手続きを行う。
スタッフからプライバシー等に関するグラウンドルールの説明があります。
承認いただいた上で、利用登録の手続きをお願いします
(7)ミーティングに参加

ぷれいす東京

2. 外部委員会への参加

生島や池上らが、国や自治体などをはじめとする外部機関に HIV/ エイズ関係の委員として参加しています。

東京都内の医療機関などでは、行政や民間団体などと垣根を越えて連携しつつ、HIV にどう向きあっていくのかを協議する場が設けられています。ぷれいす東京は、会議の場への参加のみにとどまらず、会議をきっかけとして保健所や医療機関からくる問い合わせや相談に対して積極的に協力を行っています。

・厚生労働省エイズ動向委員会 委員
・厚生労働省エイズ対策研究事前評価委員会 委員
・東京都エイズ専門家会議 委員
・独立行政法人国際協力機構（JICA）エイズ対策支援委員会 委員
・日本エイズ学会 監事
・日本性教育協会運営委員会 副委員長
・公益財団法人エイズ予防財団「同性愛者等に対する HIV/ エイズ予防啓発事業」連絡協議会 委員
・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構「雇用管理サポート事業」協力専門家
・財団法人友愛福祉財団 理事
・新宿区 HIV/AIDS 関係機関ネットワーク連絡会 委員
・東京都「若者の自立等支援連絡会儀」委員
・葛飾区エイズ連絡会議 委員
・特定非営利活動法人エイズ & ソサエティ研究会議 副代表

3. ぷれいす東京事務所のご案内

○事務所開所時間：月〜土/12:00 〜 19:00
○事務所所在地：〒169-0075
　東京都新宿区高田馬場4-11-5 三幸ハイツ 403
○電話：03-3361-8964
○FAX：03-3361-8835
○E-mail：office@ptokyo.org
○活動会員：218 名（うち議決権をもつ会員：53 名）
○賛助会員：個人58 名、団体5団体
○役員名簿：理事の任期は2年で、現在の理事は以下の8名です。
　・生島 嗣（代表を兼任）
　・牧原 信也（運営委員長を兼任）
　・池上 千寿子
　・樽井 正義
　・根岸 昌功
　・兵藤 智佳
　・山下 敏雅
　・佐藤 郁夫
○監事：常住 豊
○事務所スタッフ：フルタイム2名、パートタイム6名
○定例会議：事務局会議（毎月2回）、運営委員会（毎月1回）理事会（随時）

●業務受託事業

厚生労働省

・「HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業（ピア・カウンセリング等による支援事業）」

東京都

・東京都夜間休日エイズ電話相談
・東京都HIV検査情報 Webの制作（http://pc.tokyo-kensa.jp/）

・東京都によるゲイ雑誌・Web への広告制作

企業からの事業受託／後援事業

・鳥居薬品株式会社の後援で、冊子「Living with HIV ～身近な人から HIV 陽性と伝えられたあなたへ～」を無償で配布。また、冊子の手記とその活用方法などを紹介する Web サイトを開設。

●協働プロジェクト

・HIV 陽性者参加支援スカラシップ
・TOKYO AIDS WEEKS 2016

●活動助成をいただいた団体

公益財団法人東京都福祉保健財団 、社会福祉法人新宿区社会福祉協議会（備品整備・施設整備補助金）

ぷれいす東京では、事務局や各事業の運営を維持拡充するために、各種団体に事業助成などの申請を行っています。

●寄付をいただいた団体

ヴィーブヘルスケア株式会社、MSD株式会社、オフィス Two I、ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会、聖公会東京教区、中外製薬株式会社、DMカンパニー、la liberte（50音順、敬称略）

～以下は、募金箱によるご寄付～

News Café（敬称略）、ぷれいすトーク会場募金箱、ぷれいす東京・多目的室募金箱

多くの個人の方からもご寄付をいただきました。お名前の掲載は控えさせていただきますが、心よりお礼申し上げます。

4. ぷれいす東京事務所の日常活動

ぷれいす東京の事務所は、月～土の 12 時～ 19 時にオープンしています。フルタイム・スタッフ 2 人、パートタイム・スタッフ 6 人に加え 1 人が部門コーディネーターとして活動しています。それ以外に、人員の少なさを事務所ボランティアの方々がカバーしてくれています。

○部門コーディネーター

〔ホットライン部門〕	佐藤
〔Sexual Health Project〕	生島
〔Gay Friends for AIDS 部門〕	sakura
〔ネスト部門〕	佐藤、加藤、原田
〔バディ部門〕	牧原
〔HIV 陽性者と周囲の人 / 確認検査待ちの人への相談サービス部門〕	生島、牧原
厚生労働省受託事業	佐藤
〔研究・研修部門〕	生島
〔事務・総務部門 経理担当〕	伊澤

●新人スタッフ合同研修の実施

牧原 信也

「新人ボランティアスタッフ 合同研修会」を今年度も行いました。今回で 15 年目を迎えましたが、今年も多くの参加があり、盛況のうちに終えることができました。まだまだ色々な方が活動に関心をもち、ぷれいすの活動を支えていただけていることをうれしく思います。新しいスタッフの加入は、他のスタッフにとっても刺激があり、よりぷれいす東京の活動を活発にしてくれています。今回も講義形式とワークショップ形式を織り交ぜた、ぷれいす東京のオリジナルプログラムで 3 日間開催しました。

▼合同研修オリエンテーション

9 月 3 日（土）14:00 ～ 16:00
於：新宿 NPO 協働推進センター　参加者合計 26 名（個別も含む）

▼新人スタッフ合同研修

9 月 18 日（日）、22 日（木・祝）、25 日（日）10:00 ～ 17:00
於：新宿 NPO 協働推進センター　参加者 18 名
講義は、1 日 3 ～ 4 コマを 3 日間開催。1 コマは 50 分～ 90 分、休憩 10 分。プログラムの内容は以下のとおり。

○ 9 月 18 日（日）

1. 社会的な背景	池上 千寿子
2. 医学的基礎知識① HIVの基礎知識と検査法	福原 寿弥
3. 手記を読むワークショップ	スタッフ
4. 陽性者の社会生活	生島 嗣

○ 9 月 22 日（木・祝）

1. セクシュアリティの多様性について	大槻 知子
2. 医学的基礎知識② 性感染症の基礎知識	福原 寿弥
3. セイファーセックス・リスクアセスメント	スタッフ
4. エゴグラムと交流分析	野坂 祐子

○ 9 月 25 日（日）

1. 制度や社会サービス	牧原 信也
2. ネスト・プログラムの取り組み	加藤 力也 / 佐藤 郁夫
3. 相手のある保健行動～コンドーム使用と使用依頼～	スタッフ
4. 3 日間の振返り / 今後の活動について	

●ボランティア交流会の開催

「新人ボランティアスタッフ 合同研修会」を経由して、ぷれいす東京のさまざまな部門で多くのボランティアが活動しています。普段、部門をまたがって交流をもつことはなかなかできませんが、昨年からすべてのボランティアを対象に、交流会を開催しています。

Sexual Health Projectで活動するスタッフ数名が中心となり、企画・運営を行いました。ゲームなどのお楽しみ企画もあり、集まった22名（運営スタッフを含む）はとても楽しい時間を過ごしました。今後も継続して行く予定です。

●Webサイトの運営

ぷれいす東京のWebサイトは、2015年7月31日に、HIV陽性者とそのパートナーや家族、ともだちのためのサイト「web NEST」と統合してリニューアルし、スマートフォン対応をしました。Gay Friends for AIDS（Gフレ）部門のサイトの他、厚生労働科学研究班の「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」および「Love Life & Sexual Health（LASH）」、「Living with HIV　～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～」など、情報豊富な各サイトも運営しています。またジャンププラスとの共同プロジェクト「とも・ナビweb」、長期療養シリーズのウェブサイト「HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代」も運営しています。

○WebサイトURL

・ぷれいす東京（PC版・スマホ版）
http://www.ptokyo.org/
・Gay Friends for AIDS　http://gf.ptokyo.org/
・地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト
http://www.chiiki-shien.jp/
・Love Life and Sexual Health（LASH）
http://lash.online/
・Living with HIV
～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～
http://lwh.ptokyo.org/
冊子無料配布プロジェクトを実施中
特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの共同プロジェクト
・HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代
http://chokiryoyo.ptokyo.org/
・とも・ナビweb　～HIVで通院されている皆さまへ～
http://www.janpplus.jp/tomonavi/

その他にも、
Facebook（http://www.facebook.com/PLACETOKYO）やTwitter（http://twitter.com/placetokyo）といったソーシャル・メディアも活用し、Web上で随時情報発信を行っています。

●冊子などの制作物

ぷれいす東京では、HIV陽性者のサポートや一般へ向けた予防啓発など、さまざまな活動の成果を冊子などの形にまとめています。これらの冊子は、陽性者や周囲の人などの当事者、ぷれいす東京にボランティアなど何らかの形で関わってくださっている方々、あるいは教育やセクシュアリティ、医療、福祉などの専門家をはじめ、広くさまざまな層へ向けて一部を除いて原則有償実費にて頒布しています。

以下の冊子をはじめとする制作物をご希望の方は、ぷれいす東京Webサイト「冊子・頒布物」のページから「印刷物等申込票」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール（office@ptokyo.org）かFAX（03-3361-8835）でご送付ください。各冊子類の内容も同サイトにて紹介していますので、ぜひご覧ください。

▼HIV陽性者の手記など「生の声」をまとめた冊子

【Living Togetherシリーズ】

・『Living with HIV　～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～』（後援：鳥居薬品株式会社）
HIV陽性者のパートナー、家族、友だち、職場の仲間など、身近な人からHIV陽性と伝えられた人とHIV陽性者による計24編の手記と、基礎知識やデータを取りまとめた短いコラムを掲載。通知を受けた人への支援ツールとしても

活用できる。2013年制作(A5サイズ　60ページ)。2014年第2刷、2015年第3刷。
鳥居薬品様のご協力により、無償配布を行っています。

・『Living Together“Our Stories”』
さまざまな立場の方から寄せられた19編の手記とチャーミングな写真が、HIV/AIDSとともに生きている人もそうでない人も「すでにみんな一緒に生きている」ことを実感させてくれる。「Sexual Healthコラム」も収載し、学校や家庭、職場で活用できる教材。 2005年制作(A5サイズ4色刷り36ページ)。

・『Living Together LETTERS』
HIV陽性者の手記を本人の手書き原稿のまま掲載し、おもにゲイ・バイセクシュアル男性向けに作成。　2004年制作(B5サイズ1色刷り20ページ)。

▼予防啓発活動を通じて生まれた冊子

【Sexual Healthシリーズ】

・『Sexual Health Book ②』
Sexual Health シリーズのニューフェイスSexual Health Book ②が誕生。感染予防、避妊、デートDVなど性の健康情報だけでなく、性の多様性とコミュニケーションのポイントについてもとりあげ、わかりやすく、しかも自分の事として気づくための工夫がなされている。学校、家庭、職場などで教材として活用できる冊子。　2014年制作(A6サイズ16ページ)。

・『Sexual Health ゲーム編』
授業やイベント、セミナー等で活用できる、「ゲームで遊びながら学ぶ性の健康」のノウハウが満載。2005年制作(A5サイズ2色刷り32ページ)。

▼HIV陽性者へのケア活動を通じて生まれた冊子(陽性者およびそのパートナー、家族には無償頒布)

・『Life & Medicine ～日常生活の中で 服薬を続けるヒント～』
(制作：ぷれいす東京、発行：ヤンセンファーマ株式会社)
生活者の視点からHIV陽性者の服薬を支援することを目的に作られたツール。陽性者20名に対するインタビューと、全国の陽性者151名から回答を得たアンケートで構成。2012年制作(A5サイズ4色刷り40ページ)。
PDF版は、ヤンセンファーマ株式会社のWebサイトでダウンロード・閲覧が可能。(http://www.janssen.com/japan/patient/hiv)

▼その他制作物(詳しくはお問い合わせください)

・日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ 報告書(第20～30回)
　ぷれいす東京とはばたき福祉事業団、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスが共同発行。
・ぷれいす東京年間活動報告書(2009～2015年度)
・Living Together Manual
・Hの強化書・実践編
・OUR DAYS
・OUR DAYS [Episode 2]
・たんぽぽ
　東京都発行の新陽性者向け冊子、ぷれいす東京が制作や改訂に協力。
・職場とHIV/エイズハンドブック　―HIV陽性者とともに働くみなさまへ―
　ぷれいす東京のスタッフが編集協力した、東京都発行の冊子。

【長期療養シリーズ】HIV陽性者へのインタビューやアンケートをまとめた冊子（共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社）
・『239人のHIV陽性者が体験した検査と告知』
・『長期療養時代の治療を考える』
・『長期療養生活のヒント』

●マスメディアへの協力

今年度もテレビ･ラジオ番組、新聞や雑誌など各種メディアからの取材依頼がありました。新聞やゲイ雑誌の取材などにも協力・寄稿し、情報発信をサポートしました。また、研究成果や相談対応に基づく情報提供、可能な範囲でのHIV陽性者の紹介を行いました。事前に企画書を提出していただき、内容の妥当性や取材協力者のプライバシーへの配慮などを確認しています。

・8bitnews「知ってください～HIVの現状について～」(6/6掲載)
・Webマガジン　ママテナ「10代のHIV最新事情～ウィルスに感染しやすい行為とは？」(6/13掲載)
・Webマガジン　ママテナ「中国や台湾で10代のHIV患者が増加してるってホント？」(6/17掲載)
・Webマガジン　ママテナ「もう怖くない！HIV・感染しても出産できる？」(6/21掲載)
・日本評論社　こころの科学189号「LGBTとHIV」(8月発行)
・NHK Eテレ　事前取材協力(8/17)
・NHK報道局　事前取材協力(9/8)
・国立感染症研究所　病原微生物検出情報Vol.37, No.9（No.439）特集HIV/AIDS 2015年「ぷれいす東京の活動について」(9月発行)
・TBSテレビ 事前取材協力(10/14)
・ダイヤモンド・オンライン「DOL特別リポート　HIV陽性者の8割が職場で告白できない。“誤解と差別”の現実」(11/30掲載)
・エフエムおのみち　2016年世界エイズデー特番に協力(12/1放送)
・インターネットテレビAbema TV「AbemaPrime」(12/1出演)
・J-WAVE「JK RADIO TOKYO UNITED」(12/2出演)
・読売新聞 すこやかカフェ九州・山口発「エイズの30年」(12/11掲載)
・毎日新聞「HIV：共に生きる感染者の思い　夫夫で治療に向き合い」(12/18掲載)
・Webサイト Letibee Life「教えて！HIV/エイズの最新情報第1回　服薬の最新情報とウイルス検出限界以下とは？」(1/5掲載)
・Webサイト Letibee Life「教えて！HIV/エイズの最新情報第2回　ウイルス検出限界以下は感染源にはなりえない」(1/11掲載)
・Webサイト Letibee Life「教えて！HIV/エイズの最新情報第3回　曝露前予防(PrEP・プレップ)の日本での可能性とは？」(2/1掲載)
・読売新聞「性と心　相談先見つけて」(1/31掲載)
・ゲイ雑誌「サムソン」に寄稿　2016年6月号(2016/4発売)～2017年5月号(2017/3発売)に連載中

（掲載、放送の記載がないものは、取材協力日）

●協働プロジェクトの窓口・調整など

2016年度も、他団体との協働プロジェクトなどに引き続き参画しました。

2006年より日本エイズ学会学術集会・総会の開催にあわせて実施している「HIV陽性者参加支援スカラシップ」では全国のHIV陽性者16名の学会参加を支援したプログラムの運営に関わりました。なお、この事業は、社会福祉法人はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの協働運営から、2015年8月に「一般社団法人HIV陽性者支援協会」に継承されましたが、一般社団法人HIV陽性者支援協会によるスカラシップ事業は、2016年度の第30回日本エイズ学会での実施を最後に終了することになりました。詳しくは、一般社団法人HIV陽性者支援協会のWebサイト（http://hiv-ppaa.jp/）をご覧ください。

また、「Living Together計画」として、HIVのリアリティを伝えるプロジェクトを、特定非営利活動法人aktaと特定非営利活動法人ぷれいす東京が窓口になって行っています。

昨年に引き続き開催したTOKYO AIDS WEEKS 2016では、今回も国立国際医療研究センターにてゲイ・コーラスのミニコンサートを行いました。出演者は36名、当日会場には200人を超える聴衆にご来場いただきました。リーディングゲストには中村キースヘリング美術館Art&Fashionディレクターの HIRAKU さんをお迎えしました。3日間という短い練習期間でしたが6曲を演奏し、来場者からは様々な声が寄せられました。「ツイートされていたコーラスを聞かせていただきました。歌や朗読を聴きながら、自分も日陰者じゃなくていいんだって思えたら、ちょっと泣いちゃいました（笑）。 参加された皆さんにも、ぜひありがとうございますとお伝えください。」「大空と誕生を聞いていて、色々感極まって泣いてしまいました。生きてて良かったと感じました。」「素晴らしい企画と合唱に涙が溢れてしまいました。昨年もやっていらっしゃったなんて。知らず…。まだまだ知らない方が多いと思いますが、広まって日本でも意識が少しずつでも変わって行けば良いなぁと思いました」。指揮のなおきさん、ピアノ伴奏のぶっちさん、遠く札幌から参加してくださったとっちさん、ありがとうございました。開催にあたって、国立国際医療研究センターエイズ治療・研究開発センターの皆様には、会場提供、運営に多大なご協力をいただきました。また、ヴィーブヘルスケア株式

会社に協賛をいただきました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

秋には、日本 NPO センターと電通とのコラボレーションによる「ソーシャル・ポスター展」に参加しました。ぷれいす東京がつくっていただいたポスター（デザイン：加藤 好郎、コピー：尾花 真由美　ともに株式会社電通）のメインコピーは、「うつらないよ　ちゃんと治療しているから。」。このポスターは、2017 年 5 月 24 日（水）～ 5 月 30 日（火）に開催される「ソーシャル・ポスター展示会」でも展示されます。

●認定NPO法人申請の経過報告と今後について

2015 年から進めてきた認定 NPO 法人になるための協力依頼にあたっては、多くの方々にご支援いただき、誠にありがとうございました。

当初の私たちの計画では、2016 年度内に認定 NPO 法人の申請をすることを目指しておりました。しかし、申請の準備を進めていくうちに、NPO 法改正で窓口が国税庁から東京都に変更になり、新たな認定制度による審査が非常に厳しく、さらに様々な準備が必要なことがわかりました。実際、実績のある複数の NPO で、認定の取り消しなどが起きています。そこで、わたしたちはこの事態を踏まえ、計画を 2018 年度内の申請に延期しました。みなさまへの協力依頼にあたって、私たちの準備や見積りが甘かったことを深くお詫びいたします。

認定 NPO 法人になると寄付者は金額に応じ、所得税と地方税をあわせて、寄付金額の最大 50％の税額控除を受けられる可能性があります。団体としては、寄付が集めやすくなり、財政基盤の強化につながります。

ご支援いただいたみなさまの期待に応えるべく、専門家のアドバイスを受けながら、認定 NPO 法人化に向けて準備を続けています。

認定 NPO 法人の申請には、引き続き、毎年 100 人以上のサポーターにご支援いただいている実績が必要です。どうぞ今後もご支援いただけますようお願いいたします。

認定NPOサポーターを募集しています

財政基盤強化のために、認定NPO法人になることを目指しています。そのためには、毎年100人以上のサポーター（寄付者）が必要です。条件は下記2つです。

① 1年に3,000円以上の寄付
② 東京都に提出する非公開の名簿への掲載
（氏名・住所）

・郵便振替の場合

氏名、自宅住所のほかに、通信欄に、「ぷれいす東京への寄付」「認定NPOサポーター希望」と明記

・銀行振込・ゆうちょ送金の場合

メールで下記を office@ptokyo.org　までお知らせください。

件名：認定NPOサポーター希望

本文：特定非営利活動法人ぷれいす東京　あて

1）振込情報（振込日／振込先銀行／振込名／金額）
2）寄付者情報（氏名／自宅住所）
3）ぷれいす東京への寄付

・クレジット決済の場合

金額を入力して、備考欄に、「ぷれいす東京への寄付、認定NPO計画サポーター希望」と書いて送信。
決済情報のページに氏名、自宅住所を入力

詳しくは、Webサイトの「認定NPOになることを応援する（http://ptokyo.org/support/authorizednpo）」をご覧ください。

○ご寄付をいただける場合には、下記の口座宛にお振込をお願いいたします。会員の方が会費を納入いただく場合も、同じ口座宛にお振込ください。クレジットカードによる寄付（１回ごと/毎月の定額）もできます。また、不要になった本やDVD、CD、ゲームなどを「BOOK募金」に送ることで、ぷれいす東京に寄付をすることもできます。

お振込先

・ゆうちょ銀行振替口座　00160-3-574075
「特定非営利活動法人ぷれいす東京」
※ご送金いただく際に、通信欄に寄付か会費納入かご一筆ください。専用の振替用紙もあります。

・三井住友銀行　高田馬場支店
普通預金　2041174
「特定非営利活動法人ぷれいす東京」
※銀行からお振込いただいた場合は、お手数ですがその旨をご連絡いただければ幸いです。

※クレジットカード決済による寄付とBOOK募金の詳細は、ぷれいす東京Webサイトの案内「寄付・応援する」をご覧ください。

部門報告（ホットライン）

1. 活動のあらまし

HIV/エイズに関して、不安や疑問がある人が相談や情報提供を受ける場として、

＊「ぷれいす東京 HIV/エイズ電話相談」

＊「東京都 HIV/エイズ電話相談（夜間 / 休日）」（東京都委託事業）

を運営。そのための各ミーティングの開催・諸機関との連絡等を行っている。

2. スタッフの構成（2016年3月現在）

・コーディネーター　1名
・世話人　5名
・スタッフ　25名（実働）

3. 活動内容

○「ぷれいす東京HIV/エイズ電話相談」

電話番号：03（3361）8909［1回線］
実施日：日曜日　13：00 ～ 17：00

○「東京都HIV/エイズ電話相談（夜間／休日）」（東京都委託事業）

電話番号：03（3292）9090［2回線］
実施日：金曜日　18：00 ～ 21：00
（但し、祝日の場合は、14：00 ～ 17：00）
土／日曜日　14：00 ～ 17：00

○スタッフミーティング

毎月1回、第3日曜日 11：15 ～ 13：15
合わせて、ケースカンファレンスや学習会を行っている。

○世話人会

部門内の調整・企画の場として有志により構成。ホットライン部門研修に携わっている。

毎月1回、第3日曜日　10：00 ～ 11：00にミーティングを開催。

○東京都HIV/エイズ電話相談連絡会

東京都エイズ対策係と共同委託先のHIVと人権・情報センターの三者による定例会議。

毎月第2金曜日に都庁にて開催している。

○東京都HIV/エイズ電話相談連絡会全体会

東京都エイズ対策係と共同委託先のHIVと人権・情報センターに係るスタッフで構成され、2012年度から始まった。年1回開催。

4. 2016年度の相談状況

1)「ぷれいす東京HIV/エイズ電話相談」

●相談実績報告（2016年4月1日～ 2017年3月31日）

年間活動日数	51日間
総相談時間数	204時間
年間相談数	439件 （男性384件 女性53件 不明2件 うち陽性者8件　確認検査待ち 6件　陽性者周囲2件　確認検査待ち周囲1件）
活動スタッフ数	延べ61名

●相談件数〈ぷれいす東京〉

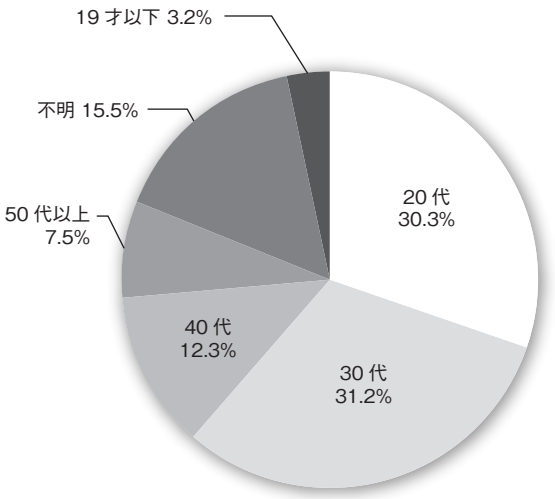
今年度の相談件数は、439件（昨年度：508件）だった。月平均/36.6件、1日平均/8.6件で、昨年と比べると月に5.7件の減少だった。過去5年間の推移は、490件、501件、479件、508件、439件で、この5年間で1番低い数字だった。

●クライアントの内訳〈ぷれいす東京〉〔グラフ1〕

クライアントの内訳のうち、男女は「男性」が384件（87.5%）、「女性」53件（12.1%）、「不明」2件（0.4%）だった。男女の割合は5年間同様の傾向を示した。

年代は「30代」が31.2%、「20代」が30.3%とほぼ並んだ。「40代」が12.3%、「50代以上」が7.5%、「19才以下」が3.2%の順で、「30代」が7.0%伸ばし、「19才以下」「50代以上」が若干増加した。

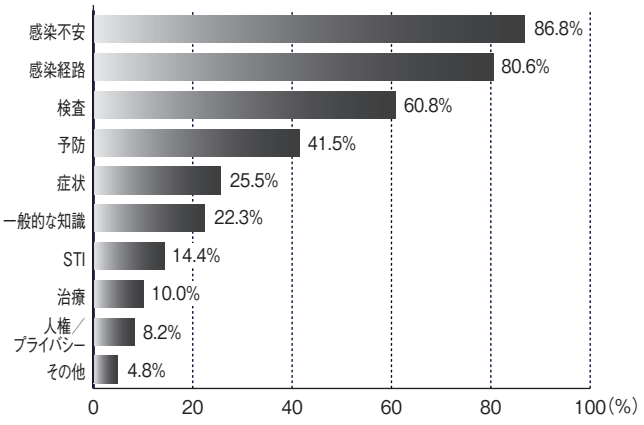
グラフ1　クライアントの内訳（ぷれいす東京）n=439
2016年4月～2017年3月



●相談内容（複数回答有）〈ぷれいす東京〉〔グラフ2〕

相談内容の内訳は「感染不安」が中心で全体の86.8%、次いで「感染経路」80.6%、「検査」が60.8%、「予防」41.5%、「症状」25.5%、「一般的な知識」22.3%までは順位に変動はなかった。以下は「他の性感染症」14.4%、「治療」10.0%、「人権・プライバシー」8.2%、「その他」4.8%となった。目立ったのは、「検査」16.3%増、「一般的な知識」10.7%増、「予防」8.6%増、「感染経路」7.8%増だった。

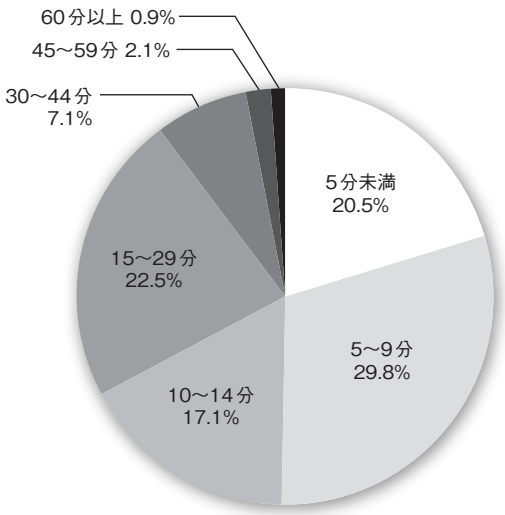
グラフ2　相談内容（ぷれいす東京）＊複数回答有
2016年4月～2017年3月



●相談時間〈ぷれいす東京〉〔グラフ3〕

今年度は全体的に長めの相談が増えた。「10分～14分」が昨年度の16.1%から17.1%に増加、「15分～29分」が18.7%から22.5%に3.8%の増加、「30分～44分」3.1%→7.1%、「45分～59分」0.6%→2.1%、「60分以上」0.5%→0.9%と、10分以上の相談が軒並み増加した。

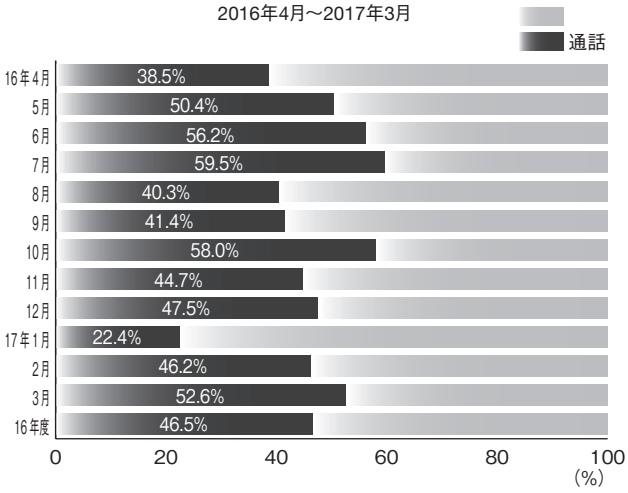
グラフ3　相談時間（ぷれいす東京）n=439
2016年4月～2017年3月



●回線占有率〈ぷれいす東京〉〔グラフ4〕　算出方法：総通話時間／総相談時間（超過は分母に加算）

回線占有率は、50%以上の月が昨年度の1ヶ月から5ヶ月と増加した。その結果、年度の回線占有率が46.5%（昨年度：41.8%）に上昇した。

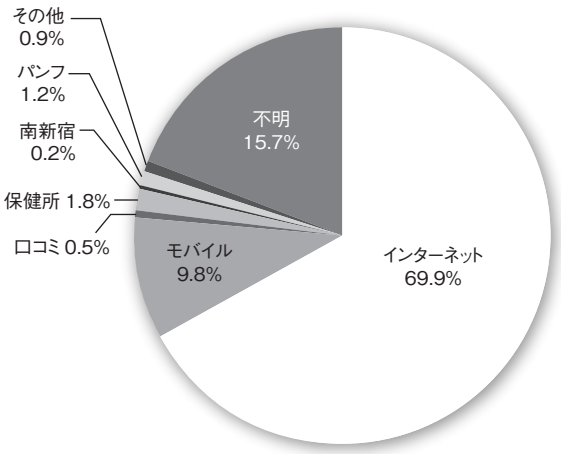
グラフ4　回線占有率（ぷれいす東京）
2016年4月～2017年3月



●情報源〈ぷれいす東京〉〔グラフ5〕

「情報源」は、「インターネット」が69.9%を占めた。「モバイル」が9.8%あるが、スマートフォンの普及により区別がつかなくなっている。両方合わせるとほぼ80%になるので、「インターネット」の内容を聞くようにした方が良いかもしれない。他は「保健所」1.8%、「パンフ」1.2%だった。

グラフ5　情報源（ぷれいす東京）n=439 ＊複数回答有
2016年4月～2017年3月



●他県の割合〈ぷれいす東京〉

東京都外からの相談は 284 件（64.7％）と、昨年度の 274 件（54.0％）から 10.7％上昇した。全国から相談があることを示している。

●陽性者及びその周囲への対応〈ぷれいす東京〉

HIV 陽性者からの相談は 8 件（昨年度：7 件）だった。確認検査待ち（スクリーニング検査が陽性 / 要確認 / 判定保留 / 擬陽性で、確認検査の結果が出ていない：以下、確認検査待ち）が 6 件（昨年度：3 件）に増加。今年度からぷれいす東京の Web に「判定保留 / 確認検査結果待ちの人へ」というページを作成したことの効果が出たのかもしれない。陽性者周囲の相談は 2 件（昨年度：3 件）だった。ぷれいす東京の相談における陽性者相談は、全体の 1.8％だった。

2)「東京都HIV/エイズ電話相談（夜間／休日）」（東京都委託事業）

この相談は東京都から委託を受け、「HIV と人権・情報センター東京」と分担して行なっている事業である。以下は「ぷれいす東京」が担当し、対応したものについて報告する。

■相談実績報告（2016年4月1日～ 2017年3月31日）

年間活動日数	154 日間
総相談時間数	462 時間（延べ 924 時間）
年間相談数	1,951 件 （男性 1,612 件　女性 330 件　不明 9 名 うち陽性者 30 件　確認検査待ち 11 件　陽性者周囲 12 件　確認検査待ち周囲 1 件）
活動スタッフ数	延べ 354 名

■月別相談件数〈東京都〉

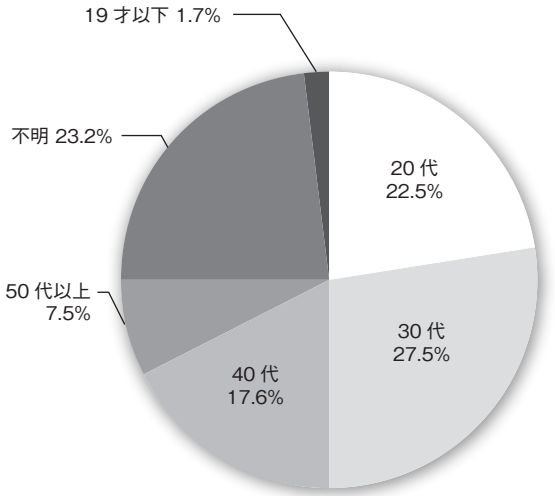
今年度の相談件数は 1,951 件（昨年度：2,244 件）で 293 件の減少だった。月平均が 162.6 件（昨年度：187 件）で、1 日の平均は 12.7 件（昨年度：14.6 件）だった。昨年度より 1 ヶ月あたり 24.4 件減少した。200 件を超える月は昨年度は 5 ヶ月はあったが、今年度は 1 ヶ月もなかった。

■クライアントの内訳〈東京都〉〔グラフ6〕

性別の内訳は、「男性」82.6％（昨年度：70.8％）、「女性」28.8％（昨年度：16.9％）、「不明」0.5％（昨年度：0.4％）だった。今年度は「男性」が 11.8％増えた。

年代は「30 代」27.5％（昨年度：21.8％）、「20 代」が 22.5％（同：20.1％）、「40 代」17.6％（同：15.4％）、「50 代以上」7.5％（同：10.5％）、「10 代」1.7％（同：1.3％）の順だった。

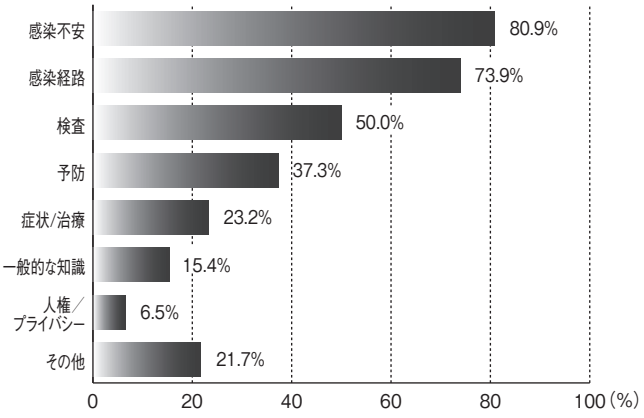
グラフ 6　クライアントの内訳（東京都）n=1951
2016年4月～2017年3月



■相談内容（複数回答有）〈東京都〉〔グラフ7〕

相談内容の内訳は、「感染不安」が 80.9％（昨年度：83.2％）で一番多かった。続いて「感染経路」が 73.9％（同：72.2％）、「検査」が 50.0％（同：39.2％）と続いた。「予防」37.3％（同：27.1％）、「症状 / 治療」23.2％（同：19.9％）、「その他」21.7％（同：18.6％）、「一般的な知識」15.4％（同：10.7％）、「人権 / プライバシー」6.5％（同：6.0％）で昨年との順位に変動はなかった。

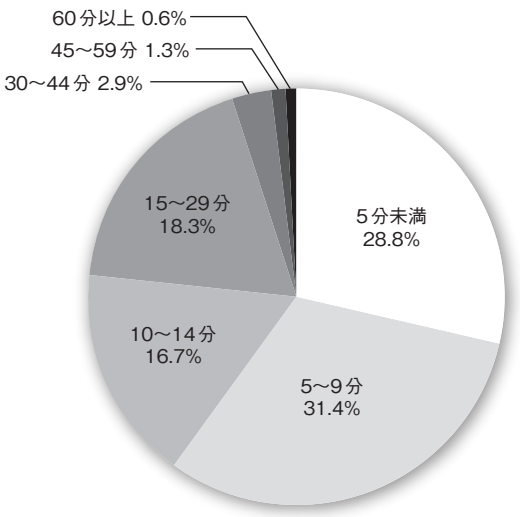
グラフ 7　相談内容（東京都）＊複数回答有
2016 年 4 月～2017 年 3 月



■相談時間〈東京都〉〔グラフ8〕

10分未満の相談は60.2%（昨年度：67.0%）と半数以上を占めました。全体の95.2%（同：95.0%）が30分以内に収まり、60分以上の相談は0.6%（同：0.4%）と少なかった。

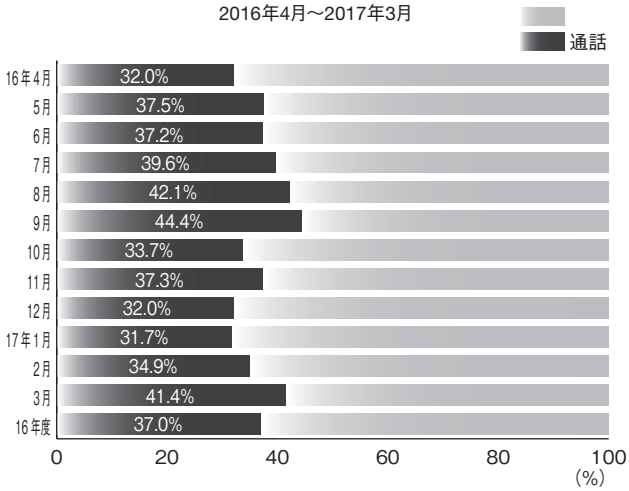
グラフ8　相談時間（東京都）n=1951
2016年4月〜2017年3月



■回線占有率〈東京都〉〔グラフ9〕　算出方法：総通話時間／総相談時間（超過は分母に加算）

今年度の回線占有率は、30%から40%台で推移した。昨年度と同様に50%以上の月が一度もなく、逆に40%を切った月は9ヶ月あった。

グラフ9　回線占有率（東京都）
2016年4月〜2017年3月



■情報源〈東京都〉

この相談を知った「情報源」は、「インターネット」60.3%（昨年度：56.5%）、「モバイル」8.9%（同：4.0%）と傾向は昨年度と同様だった。他は「不明」が24.9%（同：31.6%）、「保健所」1.9%（同:2.0%）で、「パンフ」1.2%（同:2,6%）だった。

■他県割合〈東京都〉

東京都外からの相談は960件（昨年度：1,092件）で、全体の50.2%（同：45.4%）を占めた。「東京都」の電話相談だが、全国のニーズに対応していることがわかる。

■陽性者及びその周囲への対応〈東京都〉

HIV陽性者からの相談は30件（昨年度：19件）で、11件の増加だった。確認検査待ちは、11件（同：13件）、陽性者周囲からは14件（同：8件）だった。東京都の相談における陽性者相談率は、1.5%（同：0.8%）だった。

3）相談全体のまとめ（ぷれいす東京／東京都）

①相談件数の落ち込み

東京都の5年間の数字は、2,251件、2,062件、2,433件、2,244件、1,951件と減少傾向だった。

ぷれいす東京は、490件、501件、479件、508件、439件という推移を見せている。今年度の数字が大きく下がったので、広報の強化が必要だと感じる。

②基本的知識の浸透不足

昨年と同様、HIV/エイズの基本的な知識が理解されていない、誤解しているなどの相談がある。

感染経路の知識で、日常接触で不安に感じる人や、同性間／風俗／肛門性交／外国人／不特定多数など、特定の環境でしか感染しないと思っている人が存在した。そういった差別・偏見に繋がるイメージしかない人たちの言動を耳にするたびに、HIV陽性者は周囲に伝えることができないと感じている。80年代のエイズ＝死のイメージ（エイズパニック）は、まだ残っている。電話相談の中でも、積極的に情報をアップデイトする必要があると思う。

③リピーターの相談

今年度もリピーターが存在したが、特徴は大きく二分される。一つ目はもう何年も、人によっては10年単位かけてきている長期的リピーターで、その多くは日常接触や接触をしていないことで不安になり、細かく何度も確認をしてくる。もう一つは、一定の期間だけかけてくるリピーターで、多くは性的接触などの具体的な心配事があり、検査を受けるまでの期間続く。陰性の確認が取れると相談を卒業していくことが多いが、その後も陰性のことが信じられなく、相談が続く場合もある。

どちらの相談者にも相談員が寄り添い、傾聴して、適切なアドバイスをしたり、時には励ましながら、サポートしている。同じことを話していても、じっくり話に耳を傾けていく必要がある。

④対応が難しい相談

電話相談では、スタッフの個性も大切だと思っている。HIV/エイズの電話相談では、微妙な表現をしなければいけないことが多いが、個々のスタッフの表現の仕方を比較したり、部分的に切り取られて追求されることが多くなった。「前回の相談で○○と言われた」「あなたと話して、不安が

増した」などと訴えたり、時には激しい怒りをぶつけられることもある。これからもケースカンファレンスを通して、より良い対応を考えたり、スタッフの心のケアをしていくことが重要だ。

⑤陽性者関係の相談

下記のように、とても難しい相談や専門的な相談が増えている。先ずは相談者の気持ちを受け止めるようにしているが、陽性者対応について、陽性者対応の相談員とも連携して、学習会などを積極的に企画する必要がある。主な相談内容を書き出してみたが、専門家のサポートや専門的な知識が必要な相談が含まれていて、難しくなっている。

□陽性者（38件）

1）感染後半年以内の陽性者（8件／21.1%）

口腔カンジタの症状に関する相談／他の病気の術前検査で判明の入院中の医療者の対応／感染判明直後の今後の不安／セカンドオピニオンのこと／これまでの相談のお礼／郵送検査で判明直後の今後のこと／周囲に陽性者がいないことでの孤立感／周囲への通知のタイミング／好きな人に通知して拒絶された　など

2）長期療養中の陽性者（30件／78.9%）

うつ。焦燥感、孤独感（2回）／病気がバレて解雇される可能性／HIVとパニック障害の付き合い方／陽性者相談の窓口を知りたい（2件）／転職について／服薬中断と自分の他の障害／メンタルクリニックの紹介／親の反対で精神科に通院できない思い／うつ、働きたい思い／B型肝炎との重複感染の情報／パーソナリティ障害と周囲への通知／SEXのこと／人間関係／薬物の経験／副作用／主治医への不満／SEX依存／人生相談／他の性感染症のこと　など

●全て男性／20代：1件、30代：22件、40代：9件、50代：1件、不明：3件／地域は全国

□確認検査待ちの相談（17件）

検査結果の判断について（可能性のある行為なし）／来日間もない外国人で今後のこと／判定保留の中で陽性の確率（ほぼ感染の可能性のない行為）／これからの流れについて／社会制度について／通知直後の混乱（2件）／陽性になったらどうなるか？／自身の陽性を確信して今後のことについて／陽性の確率について／婦人科検診で判明／不妊治療中／日常生活について／感染後の症状や結婚のこと　など

●男性：11件、女性：6件／20代：5件、30代：6件、40代：2件、不明：4件／地域は全国

□陽性者周囲の相談（14件）

彼女が陽性で自分の感染不安／結婚を考えている彼から通知され途方に暮れている／友人がHIVと難病がある／ゲイ。好きな人と性的関係を持ち、通知された／友人の歯の治療での救急対応先／ゲイバーのマスターと性的な関係を持った。HIVの薬が置いてあった。／元彼から通知があり、自分が別の男性との間で妊娠中。不安。／友人の外国人留学生の在留資格について／会社の同僚の陽性者が別の感染症になったことでの不安／陽性のパートナーとのキス／高齢の父親の認知症／陽性者相談の窓口を知りたい／結婚を考えている彼女が感染しているかも、薬と手帳を見つけた／一緒に検査を受けたパートナーが陽性。予防のない性行為があったので混乱。子供がいる。　など

●男性：9件、女性：5件／20代：3件、30代：4件、40代：4件、70代：1件、不明：2件／地域は全国

□確認検査待ち周囲の相談（2件）

元彼が風俗勤務で、陽性と言われた／外国人のご主人が判定保留

●女性：2件／30代：1件、40代：1件／地域は他県

5. 活動報告詳細（2016年4月1日～2017年3月31日）

1）活動実績

［シフト稼働状況］ *（16ページ参照）

2）新人スタッフ研修

他部門と共同の募集を実施。合同でのオリエンテーション・基礎学習を行なった後、ホットライン部門の専門研修を実施した。毎年のより良い研修になるように修正を加えている。

（1）合同研修事前オリエンテーション

ぷれいす東京の活動理念、各部門からの内容説明など。

（2）ぷれいす東京スタッフ合同研修

HIV活動へ参加する上での基礎的な学習内容を講義。全課程終了後、本人の活動意志を確認し、各部門への専門課程へと進む。

※（1）（2）の詳細については、事務・総務部門の報告を参照

（3）ホットライン部門研修のオリエンテーション

より具体的にホットライン部門の活動内容を説明して、「HIV/エイズの電話相談とは」「検査の基礎」を話し、また研修生へのアンケートも実施した。

〔内容〕

※部門研修オリエンテーション

10月1日（土）or 10月2日（日）：2時間30分

▼グラウンドルールの確認
▼HIV/エイズの電話相談とは？
▼検査の基礎
▼質疑応答/アンケート記入

〔担当スタッフ〕佐藤 郁夫/阿曽 義文

(4) ホットライン部門／部門研修

電話相談員に必要な基礎講義を学習後、各研修生とも相談電話例を用いてロールプレイング、更に実際の電話相談をモニタリング等の個別指導へ。全課程修了後、再度本人の活動意志を確認し、ホットラインスタッフに迎えた。研修の実施・指導はホットライン部門の世話人を中心に、現役スタッフが担当。今年度も丸2日の日程で行った。

〔内容〕

※部門別研修　◇1日目◇　10月9日(日)：5時間

▼グラウンドルールの確認
▼ピアカウンセリング　〔講師〕生島 嗣
▼HIV検査について　〔講師〕折茂 茂
▼相談デモンストレーション(1)及びグループワーク
▼リスクアセスメント
▼相談デモンストレーション(2)及びグループワーク

※部門別研修　◇2日目◇　10月16日(日)：5時間

▼グラウンドルールの確認
▼検査相談デモンストレーション
▼ロールプレイ実習(1)～(4)
▼振り返り/モニタリングに入るにあたっての事前説明

※部門別研修

◇1日目補講◇　10月10日(月・祝)：4時間

※部門別研修

◇2日目補講◇　10月30日（日)：5時間

〔担当スタッフ〕阿曽 義文/足立 惟子/折茂 茂/佐藤 郁夫/白幡 素子/染谷 太惠/高木 伸浩

※モニタリング　10月～各自調整、3時間 ×1回

現役スタッフの実際の相談をモニタリングして、具体的な対応について振り返りました。

また現状のニーズや多様な価値観・相談の意味合いなど、個別学習をしました。

※実地研修　モニタリング終了後、各自調整、3時間 ×3回

スーパーバイザーの指導のもと、実際に電話を取り、その後の振り返りで、知識の再確認・相談内容の検討、更に自分らしさを大切にしながら、相談スタイルを確立し、活動参加に繋げました。

6. スタッフの声

4人の相談員の感想や年間の振り返りを掲載します。

「電話相談を21年続けてきた思い」　足立惟子

1996年秋から電話相談をしています。始めた動機は、私が大きな病気をして「命の期限」に気づき、このまま死んだら何も残らない、何かできることはないかと思ったことです。当時の私は、HIVが病気だということくらいしかわかりませんでした。

21年間で一番変わったことは、治療の進歩です。始めた当時はHIV＝死という時代で、感染のことは誰にも言えず、

＊［ホットライン活動状況］

ミーティング等稼働状況	回数	のべ人数	
電話相談シフト	154回	413	
スタッフミーティング	10回	100	4/17，5/15，6/19，8/21，9/18，11/20，12/18，1/22，2/19，3/19
東京都電話相談全体会	1回	13	7/18
懇親会	1回	8	7/18
個別ミーティング	6回	12	7/29，9/10，12/26，3/7，3/10，3/16
世話人会	9回	46	4/17，5/15，8/21，9/18，11/20，12/18，1/22，2/19，3/19
HLオリエンテーション	2回	12	10/1，10/2
HL部門研修	4回	35	10/9，10/10，10/16，10/30
モニタリング	7回	13	
実地研修	20回	52	
新人修了ミーティング	5回	10	12/4，12/11，1/7，1/14，1/28
東京都電話相談連絡会	11回	33	4/15，5/13，6/10，8/19，9/9，10/14，11/11，12/9，1/13，2/10，3/10

ただただ隠して生きている時代でした。あんなに怖かった病気が、薬さえ飲めば共に生きていける慢性疾患のようになり、少しずつですが、HIV陽性をオープンにする方も増えてきています。20年前は、不安なったらすぐに電話相談という感じでしたが、インターネットの普及で、相談件数は減りました。ただ正しい情報も、そうでないものもあふれていて、いろいろ調べているうちに、混乱して、最後にたどり着くのが電話相談、そういう人が多くなりました。

それと検査体制も変わりました。保健所よりも郵送検査の件数が多いと聞き、気になります。相談の中で「手元に検査キットを持っているが、どのタイミングで使ったら良いか」とか、「ずっと郵送検査を受けていたが、陽性になった」などの相談がありました。自宅でこっそりできることがメリットですが、サポートの体制が確立していないので、電話相談を担保することで認可するような充実を図って欲しいと感じています。

良かった事はたくさんあります。ぷれいす東京が大好きです。それはみなさんの温かい眼差しと心があったこと。自分が素のままでいていいという空気。逆に言うと摩訶不思議な空気ですが、居場所があって良かった。ありがたく思っています。ぷれいす東京では人と人との関わりや話をすること、言葉の重さや大切さを教えてもらいました。そのことは家庭の中でも役立っています。

この間に辛かったのは、二度目の大病を患ってお休みしたことです。寂しかった。でもその時も仲間から「いつまでも待っているよ」と言われ、「元気になったらまた戻るんだ一」と意欲が出ました。これからは自分の体調に合わせて、長く続けられたらいいな、それだけです。みなさんの支えがあって、最年長になって、どこまでいけるのかはわかりませんが、続けられるだけ続けたいです。

「新人でもなく、ベテランでもなく…」　ぼん

2015年に新人ボランティア研修を受け、翌年の2月から電話を受けるようになりました。新人ボランティア研修を受けるまでは、HIVとAIDSの違いも知りませんでした。あたふたと過ごしているうちに、2016年の研修を終えた新人スタッフが入ってきて、僕は「2年生」になりました。

「2年生の記念」に（？）、2016年の10月から半年間シフト担当をさせて頂くことになりました。多分他の部門にはなくて、ホットライン部門だけにあるのが、チームワークのよさというか和気あいあいとした雰囲気だと思います。直前までシフトが埋まらない日があっても、直前で体調不良等でシフトキャンセルが出ても、必ずなんとかシフトが埋まります。誰かが助け舟を出してくれます。これはホットライン部門の強みだと思いますし、相談者の方々に安心して頂ける雰囲気を作り出している要素だとも思います。

日々の電話相談に関しては、「不安な気持ちを和らげる」ことと「過度な安心をさせない」ことのバランスが難しいと最近感じています。例えば、相談者の方から仰って頂いた行為は感染の確率が低いとか、HIVに感染しても今は「死」に繋がらないことを強調し過ぎると、「それでは検査も受けなくていいですか？」となってしまうことが多々あり、困ってしまいます。そのバランスに注意を払いながら、上手く応対できるようになることが今の僕の課題だと感じています。今もこれからも試行錯誤しながら、楽しくホットラインのボランティアを続けていきたいと思う今日この頃です。

「心地よい時間のはじまり」　ラビット

濃密な部門研修が終わり、モニタリング、実地研修が始まりました。部門研修は終了しましたが、実際にスーパーバイザー（以下：SV）の方々の相談内容をお聞きしますと、

一つとして同じ相談内容はなく、内容もよくわからず果たして自分に出来るのだろうかと、とても心配でした。

初めはSVの方々のサポートで、とても安心して研修を受けることが出来ました。終了後もとてもきめ細やかに、相談一つ一つに対して現場ならではのアドバイスや様々な情報を下さり、とても勉強になりました。

何もわからない状態でしたので、SVの方々には大変ご迷惑をお掛けしたと思いますが、SVの方々や他のボランティアの皆様のお話をお聞きする時間は、私にとってはとても心地よい時間でもありました。まだまだわからない事も多くありますので、皆様にお聞きしながら末永く続けていきたいと思います。 どうぞよろしくお願い致します。

「HLの活動で感じたこと」　楊井怜子

昨年12月からHLの活動に入るようになり早5ヵ月、これまで行った電話相談は11回となった。この活動を始める以前、私はHIV/エイズの当事者、さらにはLGBTの当事者だとカミングアウトしている人との関わりが全くない環境にいたが、それがどれほど不自然な状況であったかということを今感じている。「HIV/エイズの当事者ともLGBTの当事者とも全く接点のなかった私が、いきなり入ってきて電話相談をやってもいいのだろうか…」と今でも考えてしまうことがあるが、その一方で、私にとっては社会の多様な面と接する大切な場となっているとも感じている。

実際に電話相談を行う中で感じたことを、以下にいくつか書きたい。

まず、東京都以外からの相談が非常に多いことに驚いた。他県からかけてきた方の中には、「いろいろな機関に電話したが、ここ（東京都の電話相談）が一番信頼できる」とおっしゃる方もおり、全国的に需要があることを実感している。その一方で、本当に電話相談を必要としている人達のどれくらいが、このHLの存在を知っているのか不安に思うことがある。東京都の電話相談の件数が減り続けていること、また保健所などで実施されるHIV検査の利用件数が伸び悩んでいるらしいこと、その一方で日本国内での新規HIV感染者/エイズ患者数は楽観できるほどの減少傾向にはないことを知り、本当に相談が必要な人の多くには情報が届いていないのではないかと感じる。私にできることは目の前

の電話相談に一つ一つきちんと対応することだが、電話相談にまで辿り着けない人達がいるのではないかと思うと、もどかしさを感じる。

また、都内/日本国内での状況に加えて、UNAIDS、国際エイズ学会(IAS)…といった様々な組織があることもあらためて知った。さらに各国には各々公的/医療機関やNGO/NPOなどがあり、それらが複雑に関わり合いながら様々な政策が決められ各活動が行われていることを知り、そうした大きな動きの中に自分の小さな活動も含まれるのだろうかと考えることもある。実際の電話相談には直接関係ないかも知れないが、HIV/エイズに関する世界的な動きの中で、自分達の活動がどのように位置付けられるのか、客観的/体系的に考えることのできる機会があればと思う。

7. まとめ

新人の補強はできたものの、体調や転勤などで休むスタッフもいて、シフトの運営はギリギリの状態が続いた。シフト担当やスタッフ全員が協力して乗り切れたが、来年度はしっかりと補強をして、安定したシフト運営をしたい。相談内容はどんどん難しくなっている気がする。学習会などを重ねることで、全員のスキルを向上していきたいと思う。

［報告］佐藤 郁夫

今年度は、ぷれいす東京が参加するいくつかのイベントのスタッフとして活動した。また、2回目を迎えた、ぷれいす東京スタッフ交流会の企画・運営をおこなった。

SHP ミーティング
11月　4日（金）　ミーティング　出席：6人
1月 25日（水）　ミーティング　出席：5人

SHP 企画・運営
2月　8日（水）　ボランティアスタッフ交流会
企画・運営
参加：18人　SHP スタッフ：4人

SHP スタッフ参加イベント
4月29日、5月5日、5月15日
語り場「ぷれいすトーク」
5月7−8日
東京レインボープライド　ブース手伝い
8月31日（水）
ぷれいすトーク「国際エイズ会議 in 南アフリカ・ダーバン 参加報告会」
12月10日（土）
TOKYO AIDS WEEKS 2016　手伝い

まとめ、ボランティア交流会は大好評で、今後も継続のリクエストが多数よせられた。今後も、ぜひ継続していきたい。

ボランティア交流会感想

◆「結　縁」
部門：バディ　　ペンネーム　マツ（男性／60代）

ぷれいす東京には、様々な部門で活動されている方々が多数在籍されていることは承知していましたが、日頃会ってお話しする機会はほとんどありません。ニュースレターやホームページ等で各部門の活動状況を知る程度です。

私は現在バディで活動させて頂いております。今回のような交流会で各部門のスタッフに接することにより、それぞれの活動のイメージがより具体的に理解でき、そして身近に感じることができました。参加者みんなでやったゲームは、遠い学生時代を思い出し楽しかったです。 個人的なことですが、ボランティア活動するまでは、自分がゲイにもかかわらずLGBTやその協力者の方々に接する機会がほとんどありませんでした。クローゼット状態が長く続いておりました。

しかしこのような会に参加できたことで、ずっと硬直していた筋肉がしだいに軟化していく感じがして、こんなに心地よい開放された気分になるとは思っていませんでした。この会でめぐり会ったご縁を大切に、活動を末長く続けていけたらと思っています。ありがとうございました。次回もぜひ参加したいと思います。

◆「幽霊部員でも快く迎えてもらいました（笑）」
部門：ホットライン、バディ
ペンネーム：まるのすけ（ゲイ・40代）

先日、ボランティア交流会に参加してきました。

交流会のお知らせメールが届き、興味はあったものの、ボランティア、といっても、活動休止してから早何年…もう4、5年活動していない自分が顔を出してよいものやら、と思い、ひとまず生島さんに連絡してみたところ、「お待ちしているわ！！」と即レスをもらったので、何年ぶりかにお邪魔してみたのでした。

案の定、スタッフ以外は全員初対面。新しいボランティアさんメインでしたが、いろんなゲームを通じてみなさんと和気藹々、楽しむことができ、幽霊部員（？）の自分でもとっても居心地のいい時間と空間でした。ボランティアは活動休止中のくせに、交流会はまたあったらぜひとも参加したい（交流会優先（笑））！と思わせてくれるくらい、ステキな会でした。企画や準備、当日の進行などをしていただいたスタッフの方々、ありがとうございました。

かく言う自分は現在、仕事が多忙のため、ボランティアは休ませていただいているのですが、落ち着いた暁には早く活動再開したい！と心を新たにしました。これも交流会に参加できたおかげです。早く仕事を軌道に乗せて、復活したいものです…その際はどうぞよろしくお願いいたします。

◆「また一つ、楽しみが増えた！」
部門：GAY Friends for AIDS
ペンネーム：タカヒロ（男性・ゲイ・40代）

昨年のボランティアスタッフ研修に参加し、迷った末にGフレ部門で活動をスタートすることができましたが、昨年から懸案の就活に頭を悩ませている最中に、交流会のお知らせを受け取りました。時間だけはたくさんあったので、即、参加を決めました。

「いい気分転換になるといいな〜」「でも、平日だとどれくらい集まるのかな？」と思いながら会場に向かいました。しかし、会場の入口付近があまりにも静まり返っていたので「ここで間違いないかな？」と思いながら開

催場所をメールで確認しているところに、もう一人交流会に参加する方が来てくれたので、お互いに開催会場を確認し、恐る恐る扉を開けて入りました(笑)。

案の定、一番乗りになりましたが、会場内にいた見慣れたスタッフの方々を見てやっと安心できました。そして、雑談しているうちに一人、また一人と参加者が集まり更に一安心。20人ほど集まったところで交流会がスタートしました。

冒頭の自己紹介ならぬ他己紹介では、ペアになった方とお互いに趣味が共通の分野であることが分かったり、レクリエーションでは伝言ゲームで意外と盛り上がったり、所属部門は違っても同じボランティアスタッフ同士、楽しく過ごすことができました。

次回の交流会もぜひ参加したいと思います！

◆「“声”のゲームと不思議な再会」

部門：事務・総務、ネスト・プログラム部門

コツチ（男性 30代後半）

僕は去年(2016年)秋口のボランティア研修を受けたばかりで、それ以来よく考えればボランティアらしい活動は何もしてないです。自分では大丈夫かなと心細いところもあるので、交流会に参加して先輩たちの経験を少しでも聞けばというのが参加動機でした。

水曜日夜の開催のためか、参加者は確か20名ぐらいでした。最初は2人一組で自己紹介ならず「他己紹介」で場を温め、その後2組に分けての伝言ゲーム、中間休憩、聖徳太子ゲーム、振り返りというメリハリが効く流れでした。

「伝言ゲーム」に対して外国語学習のゲームというイメージしかない僕は、主催者が敢えて母国語でやることに大変新鮮に思いました。隣の方が、「みんな、それぞれ自分の印象に残る言葉、そして自己流の解釈を入れてしまうから面白いですよ」と教えてくれました。なるほど、修飾語と短文が多い題の設定で、なおさら皆さんの「自分勝手」な想像を引き出しやすいですね。

そして、「聖徳太子ゲーム」もまた興味深いです、聖徳太子役は周りの人が一斉に発したキーワードをヒントに、特定の言葉を当てるというルール。まず､周りの声の「合奏」から意味になる声をキャッチしなければなりません。それから、キャッチしたキーワードとその特定の言葉のつながりが聖徳太子に伝わらない限り、当たるには至りません。

二つのゲームはどちらも実に興味深い遊びだなと後から気が付きました。ボランティアとして利用者に接する時、相手の声を正確で忠実に受け入れること、また自分の声を分かりやすく相手に伝えること、ないしいろんな声からブレないこと…

自分は今回の交流会を企画する方々の「声」・真意をどれぐらい汲み取れるか、自信ないが個人的に大事なことを考えさせる集いでした。また、偶然にも、2年前自分が一番落ち込んだ時期お世話になったボランティアの方に会えて、ボランティア同士としてお話しも出来て、本当に感無量でした。人生って、こんな不思議なことあるか、というような体験のきっかけを作ってくれる、楽しい交流会でした。

◆「2回目だけど不安と緊張」

部門：SHプロジェクト

ペンネーム：うえの（男性・40代）

第2回、終了しました！交流会に参加された皆さんに楽しんでもらえたようで、2時間があっという間に過ぎて行きましたね。前回のサブ司会者から本司会者になりまして、いやはや疲れましたね(笑)。

構成は前回と同じ前半と後半にチームゲームとしたのですが、チーム分け、やったことのないゲームの内容に加えて、オリジナリティも足さなくてはいけないし、ゲームのお題が宿題になったり、スタッフ同士の会話やチームワークなどを改めて考え直すことにアタマを悩ませていました。

当日、あまりの緊張に一人カラオケで3時間歌い続けてスイッチを切り替えるつもりでしたが…不安と緊張のなか、いざ開始です！ 何度もアタマが白くなり、気がつくと手にインクが移るくらいに汗をかきながら進行していた僕でしたが、みんながゲームに苦戦していたり、思いがけず優秀だったりと、進行しながらも面白い面白いとなんだかニヤニヤしていました。ボランティアスタッフとしての関わり期間や所属部門で顔や名前を知らない人同士でも「ボランティアスタッフ交流会で一緒だったよね！」なんて、次に会えた時に話題に出てきたら嬉しいですね。

今回は平日夜の開催でした。最後に頂いた感想でもありましたが、開催曜日や時間をずらしたり、回数を増やしてほしいという言葉もあったので、次回は多くの皆さんに参加してもらい、その時は緊張ユルめのパワーアップをして皆さんにお目にかかりたいと思います！

参加者の皆さん、SH プロジェクト、事務所スタッフの皆さんありがとうございました。

『語り場・ぷれいすトーク “話してできる心のデトックス”』報告

当初は 3 ヶ月ごとの実施を計画していたが、短期間で連続開催し、様々な課題を、幅広くいろいろな人に、関連性をもって知ってもらえればと考え、4 月～ 5 月の 2 ヶ月の短期間で 3 回実施することになった。

■第1回　子どもやパートナーと性の健康について話してみる?

「性の健康ってナニ？　性のこと家族となんか話せない？性なんて恥ずかしくて口にできない？でも、だれもが性の健康リスクをもっているし、話すキッカケはじつはたくさんある。そんなチャンスをつかまえて話してみませんか？」

日時：　4 月 29 日（金・祝）14 時～ 16 時
司会：　生島 嗣
ファシリテーター：池上 千寿子
スピーカー：　シングルマザー、20 代のゲイ男性　各 1 名
参加者計18名：　来場者10名、運営者8名（うちボランティア2名、スタッフ6名）

＜アンケート結果（抜粋） n=10＞
・年代　20 代：2　　30 代：4　　40 代：3　　不明：1
・感想　とてもよかった：8　　まぁよかった：2

話しにくいテーマであったためか、残念ながら参加者は少なかったのだが、ゲストスピーカーのお二人が興味深い話を、オープンにしてくれた。シングルマザーのお母さんは子どもとの性の話しづらさについて、20 代のゲイ男性は家族へのカミングアウトやこれまでの恋愛などを話してくれた。グループワークでは、お母さんからゲイ男性まで多様な参加者があったのだが、それぞれの経験を話してくれ、性に対する様々な考え方、在り方をお互いに共有できた印象だった。最後に参加者全員での振り返りを行ったところ、参加者から色々な方の話を聞けてよかった、との感想をいただいた。

課題は、参加者の少なさであり、参加しやすい切り口での広報の必要性を感じた回となった。

■第2回　話しにくい何かを抱える気持ちをシェアする会

「心やからだ、経済状態、セクシュアリティ…。何に難しさを感じているかは人それぞれ。いろいろな立場の人と交流し、経験を共有してみませんか。」

日時：　5 月 5 日（木・祝）14 時～ 16 時
司会：　生島 嗣
ファシリテーター：大槻 知子
スピーカー：　企業の障害者枠で働く HIV 陽性者、トランスジェンダーの HIV 陽性者　各 1 名
参加者計33名：　来場者23名、運営者10名（うちボランティア5名、スタッフ5名）
★TOKYO Rainbow Week参加イベント

＜アンケート結果（抜粋） n=18 ＞
・年代　20 代：1　　30 代：9　　40 代：5　　60 代：3
・感想　とてもよかった：12　　まぁよかった：3　　どちらともいえない：2　　不明 / 無回答：1

参加者が多く、また多様な方が集まった会となった。スピーカーはトランスジェンダーの HIV 陽性者、企業で働く HIV 陽性者の 2 名だった。トランスジェンダーの方からは、これまでの生活史から感染に至った経緯など、企業の方も自分のセクシュアリティや感染経緯など、両者ともに話しにくい何かを複数を持った経験を話してくれた。今回は東京レインボーウィークの参加イベントにもなっており、参加者のなかに、多様なセクシュアリティの方の参加があり、ゲイ男性、FTM（female to male）の方、自分の性別に違和感を感じている方から、パートナーをエイズで亡くされた方、精神疾患をもつ方の支援者、外国人の方など、多様な方が集まり、グループワークが活発になった印象であった。参加者からは、自分も当事者として話したかった、自分の気づいてなかった色々な難しさに気づける機会になった、それぞれの気持ちをグループでシェアできたのがよかったという感想があった。ただ、参加者それぞれの話が興味深くワークの時間が短かった、それぞれ話し出すまでに時間がかかるため時間が短かった、という意見があり反省点であった。

■第3回　HIV陽性者と話そう！～Living Togetherを体験するワークショップ～

「陽性者ってどこにいるの？ 仕事やプライベートでも、あったこともないけど、話してみたいという方。陽性者の現状データの紹介やワークショップで楽しく交流しましょう。

日時：　5月15日（日）15時～17時
スピーカー兼ファシリテーター：りきや、いく
情報提供：　生島 嗣
参加者計28名：　来場者18名、
運営者10名（うちボランティア5名、スタッフ5名）

＜アンケート結果（抜粋）n=17＞
・年代　10代：3　20代：4　30代：4　40代：3
50代：2　60代：1
・評価　とてもよかった：12　まぁよかった：3
不明 / 無回答：2

スピーカー兼ファシリテーターを2名のHIV陽性者が務めた。2人からは陽性とわかった経緯、人間関係、セックス、就労など、プライベートなことも含めて色々な話をしていただいた。参加者は、保健師、妻をエイズで亡くした方、看護学生、HIV陽性者など、また多様な顔ぶれになった。参加者からは、こうして実際に話を聞ける機会を増やして欲しい、社会の差別偏見を感じた、会うことでイメージが変わったなどの感想があった。今回も、最後に参加者全員で一言ずつの短い振り返りを行い、それぞれの感想を共有することができた。

当日の模様

▼ 3回を振り返っての評価、反省点、今後の展望

今回、初めて参加型のワークショップを主体としたイベントを開催した。開催にあたっては、参加者の安全を守るために、グラウンドルールを作る、ファシリテーターを置くなどの準備をして臨んだ。話しにくいテーマが多いなかで、参加者にとって、安心して話せる環境、安全な場の確保は概ねできたのではないかと思う。

参加者の数は、広報期間が短くなってしまったため、行き届かないところもあり、当初の予定より少なくなったのが反省点である。ただ、こちらの想像よりも多様な参加者があり、参加者からもこうして自分のことを話せる場がもっと欲しい、という声が聞かれ、今後もいろいろなテーマで継続して実施する必要性を感じた。また、こちらがいままで気づけていなかった課題に触れ、団体としても新たな地域のニーズに気づく機会を得られた。

今後は、今回の参加者から得られた声を生かしつつ、HIVや性の健康に関わる様々な人が話せる場として、またそうした声を社会や市民に身近に届ける機会として、より多様な人を巻き込みながら、定期的に開催していければと考える。多くの人を巻き込むことで、HIV陽性者が顔の見えないモンスターではなく顔のある同じ人間であること、HIVが決して他人事ではないことを、多くの人に知ってもらえる機会になれればと思う。また、人がそれぞれで何らかの生きる難しさをもつなかで、HIVもその中の1つとして認識されるような社会づくりに貢献できればとも考える。もちろん、草の根的な小さな活動ではあるため、浸透していくには時間がかかると思うが、今後もぷれいすトークを地道に継続して開催し、HIV陽性者の声を中心として、多様な当事者の声を社会に届けていきたいと考える。

最後に、試行的なイベントにもかかわらず、ボディショップニッポン基金を助成し、ぷれいすトークを開催する機会をくださった、ボディショップの皆様に深く御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

■国際エイズ会議 in 南アフリカ・ダーバン 参加報告会

国際エイズ会議 in 南アフリカ・ダーバン 参加報告会が開催されました。

2016年7月18日（月）～22日（金）に、南アフリカのダーバンで開催された、第21回国際エイズ会議の参加者の報告会を開催しました。国内でHIV陽性者を対象にした数多くの調査に携わってこられた井上洋士さん、当団体の研究スタッフの大槻知子からの報告がありました。

井上さんからは、全体としては90-90-90、Treat All、PrEPを中心とした発表・議論が中心的になされていたのがもっとも大きな特徴である一方で、世界で4千万人のHIV陽性者がいるということから、当然出てくる「多様性への対応」あるいは「対応の多様性」が、そのまま各セッションのテーマとして位置づけられ構成されてたという。切り口としては、資金の問題、スティグマを付与された側向けプログラム、HIV陽性者でのがん罹患、災害や戦争時の治療の問題、HIVのメディア報道、ゲイ出会い系アプリとの連携などの報告がありました。また、大槻さんからは現地のプログラムを見学した際の感想や、女性の視点から見えてきたことなどを報告いただきました。

【報告者】
井上 洋士（放送大学）
大槻 知子（特定非営利活動法人ぷれいす東京）
［司会］生島 嗣（特定非営利活動法人ぷれいす東京）

以下、参加者の感想文です。

◆「エイズ対策は誰のためのものか？」

Zona　30代／男／ゲイ

主にゲイ・バイセクシュアル男性を対象としたHIV予防啓発活動に携わっています。

いま現在、国際の場面ではどういったことが議論されているのか。

そしてそれが、今後の日本のエイズ対策にどのような影響を及ぼすのかを自分なりに考えたいと思い参加しました。

WHOの掲げた『90-90-90』という目標。
それに翻弄される国々と、そこに生きる人々。
目標は、早くも一人歩きを始めたような印象があります。

エイズ対策とは、一体誰のためのものなのだろう？と考えました。

膨らみ続ける医療費を抑えたい政府のため？
パンクしそうな患者を抱えた医療者のため？
自分の名を揚げたい研究者のため？
行政予算に依存し続けるNGOのため？

それぞれの立場から、それぞれの主張があるのだろうと思います。

その複雑なやりとりの裏で、今この瞬間もHIV感染は拡がっています。

けれど増え続けているはずのHIV陽性者の姿は、いつまでも見えません。

報告の中にあった『PrEP＝人権』という言葉は、ひとつの真実だろうと思います。

多様性への対応、あるいは対応の多様性。日本も例外ではありません。

変わりゆくエイズ対策のその先に、誰もが暮らしやすい社会があるようにと願います。

◆「臨場感あふれる報告会」

本多美里　30代/女性

この度は貴重なお話をありがとうございました。お二人の臨場感あふれるお話から、学会の様子やダーバンという土地の状況などに思いを巡らせ、大変興味深く拝聴しました。印象的だったのは、クライシス時のHIV治療と予防です。海外では紛争や内戦により、医療にアクセスできない事態が問題になり、それにともなう心のケアなども課題としていました。日本でも大規模災害時への備えについては、各自治体や施設で行われていることでありますが、このようは報告を参考に検討できることもあるのではないかと感じました。また、井上先生も仰っていた通り、今回の開催国が南アフリカということもあると思いますが、90-90-90が目標とされている中で、Treat Allと資金援助に関する演題が非常に盛り上がっていたということも興味深い内容でした。

日頃は抗HIV薬の有効性・安全性といった演題に目を向ける機会が多いのですが、お二人の講演でご紹介いただいた演題について改めて勉強したいと思います。ありがとうございました。

また、エイズ予防財団のホームページにも報告文が掲載されている。

大槻 知子　特定非営利活動法人ぷれいす東京
http://api-net.jfap.or.jp/library/societyInfo/world_aids_2016/world_aids_2016.html

1. Gay Friends for AIDS電話相談

●2016年度活動記録

(1)実施日

毎週土曜日　19時～21時

(2)年間相談活動日数

51日（2015年度：51日）

(3)電話相談活動時間数

102時間（2015年度：102時間）

(4)相談体制

相談員 5名 + シフト担当1名

(5)年間相談件数

103件（うち陽性者等の相談：10件）

（2015年度：相談件数121件、うち陽性者等14件）

(6)ろう者ゲイ（聴覚障がい者）のメール相談

0件

●2016年度相談件数

(1) 全般

表1は月別の相談件数および1日あたりの平均件数を表している。

2016年度の年間相談件数は前年度と比べ、18件減少した。4月、5月、6月、1月を除く月で平均件数が減少した。

1日あたり0.39件の減少だった。

表1　月別の相談件数及び一日当たりの平均件数

		2016年度			（参考）2015年度		
年	月	相談件数（件）	実施日数（日）	平均件数（件）	相談件数（件）	実施日数（日）	平均件数（件）
2016年	4月	16	5	3.20	4	4	1.00
	5月	8	4	2.00	10	5	2.00
	6月	7	4	1.75	5	4	1.25
	7月	10	5	2.00	10	4	2.50
	8月	8	4	2.00	17	5	3.40
	9月	4	4	1.00	12	4	3.00
	10月	13	5	2.60	18	5	3.60
	11月	7	4	1.75	10	4	2.50
	12月	5	4	1.25	10	4	2.50
2017年	1月	8	4	2.00	6	4	1.50
	2月	7	4	1.75	8	4	2.00
	3月	10	4	2.50	11	4	2.75
	合計	103	51	1.98	121	51	2.37

(2) 相談時間

表2は相談時間を10分単位にまとめたものである。

2016年度は、10分未満で終わる相談が37.9％であった。なお、1件あたりの平均相談時間は16.6分で、前年度の16.5分と、ほぼ同じであった。

表2　相談時間

相談時間（分）	2016年度		2015年度	
	件数	割合	件数	割合
～9	39	37.9%	54	44.6%
10～19	27	26.2%	33	27.3%
20～29	21	20.4%	13	10.7%
30～39	9	8.7%	6	5.0%
40～49	4	3.9%	9	7.4%
50～59	3	2.9%	2	1.7%
60～	0	0.0%	4	3.3%
合　計	103	100.0%	121	100.0%

(3) 相談者の年代

表3は相談者の年代別の相談件数を表している。

2016年度は、全体的な年代の傾向は大きくは変わらなかった、20代、30代で毎年60～70%の割合を占める傾向は変わらない。

表3　年代別の相談件数

年代	2016年度		2015年度	
	件数	（割合）	件数	（割合）
10代	5	6.3%	4	4.5%
20代	35	44.3%	34	38.6%
30代	24	30.4%	26	29.5%
40代	11	13.9%	16	18.2%
50代	2	2.5%	5	5.7%
60代以上	2	2.5%	3	3.4%
不明	24		33	
合　計	103	100.0%	121	100.0%
有効データ	79		88	

有効＝（合計－不明）

(4) 相談電話の発信地域

表4は相談電話の発信地域を示している。

2016年度は前年度と大きくは変わらなかった、関東以外からの発信が5割以上を占めた。

(5) 相談電話の情報源

表5は相談電話を知った情報源を表している。

2016年度は、「インターネット」と「携帯電話・モバイル」の合計が増加し94.8%と多数を占めた。

一方で「検査機関・パンフレット」が0件だった。

表 4　相談電話の発信地域

地域	2016 年度		2015 年度	
	件数	（割合）	件数	（割合）
東京	17	21.3%	25	27.2%
東京以外の関東	20	25.0%	22	23.9%
関東以外	43	53.8%	45	48.9%
不明	23		29	
合　計	103	100.0%	121	100.0%
有効データ	80		92	

有効＝（合計－不明）

表 5　相談電話を知った情報源

情報源	2016 年度		2015 年度	
	件数	（割合）	件数	（割合）
ゲイ雑誌	1	1.3%	6	7.4%
検査機関・パンフレット	0	0.0%	2	2.5%
他の相談電話	0	0.0%	1	1.2%
インターネット	59	76.6%	63	77.8%
携帯電話・モバイル	14	18.2%	6	7.4%
口コミ	1	1.3%	3	3.7%
その他	2	2.6%	0	0.0%
不明	26		40	
合　計	103	100.0%	121	100.0%
有効データ	77		81	

有効＝（合計－不明）

(6) 相談者のセクシュアリティ

表 6 は相談者のセクシュアリティを表している。

「ゲイ」からの相談が若干減少したが7割近くを占めている、「既婚者・バイセクシュアル」と「男性に性的興味を持った」からの相談が前年度と比較して増加した。Gay Friends for AIDS 電話相談（以下、Gフレ電話相談）の対象外のセクシュアリティからの相談が1割以上あった。

表 6　相談者のセクシュアリティ

区分	2016 年度		2015 年度	
	件数	割合	件数	割合
ゲイ	63	67.0%	84	79.2%
ゲイ周囲	0	0.0%	0	0.0%
既婚者・バイセクシュアル	14	14.9%	9	8.5%
男性に性的興味を持った	7	7.4%	0	0.0%
レズビアン	0	0.0%	0	0.0%
トランスセクシュアル等	0	0.0%	4	3.8%
異性愛者（男）	7	7.4%	9	8.5%
異性愛者（女）	3	3.2%	0	0.0%
不明	9		15	
合　計	103	100.0%	121	100.0%
有効データ	94		106	

有効＝（合計－不明）

●相談内容について（複数回答あり）

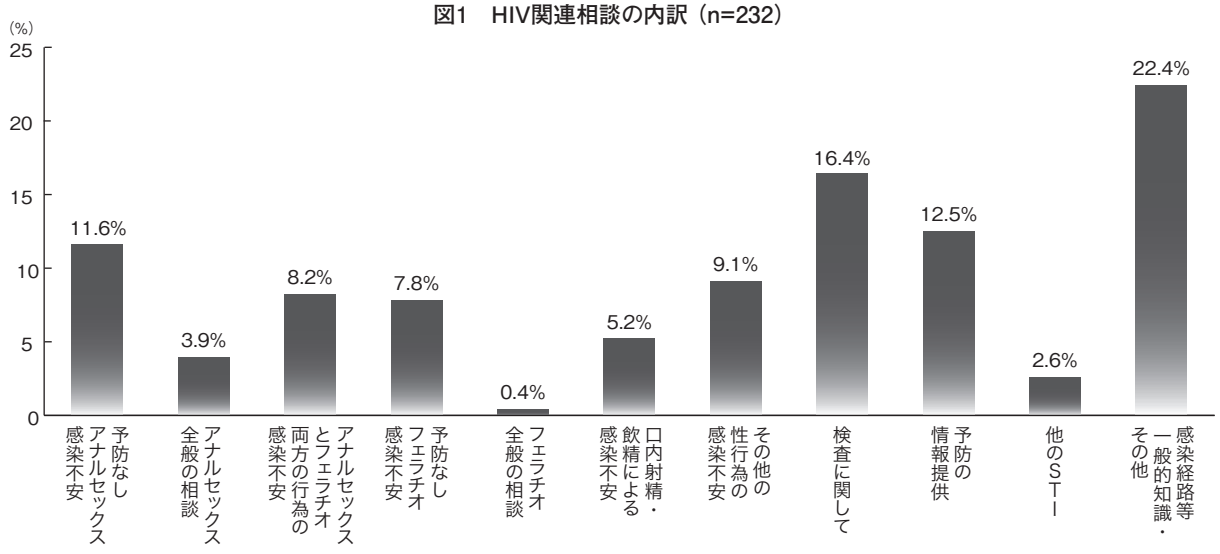
2016 年度は、103 件の相談のうち陽性者対応 10 件（後述）と異性間性行為（男・女）10 件とを除いた 83 件について検討し、HIV 関連相談と HIV 以外の相談に分類した。前年度と同様に 1 回の相談で複数の内容の相談が寄せられているケースも見受けられた。複数の相談を独立させて計上した結果、HIV に関連した相談が 232 ケース、HIV 以外の相談（非 HIV 関連）が 39 ケース、合計 271 ケースとなった。

また、ろう者ゲイ（聴覚障がい者）のメール相談は 0 件であった。

(7) HIVに関連した相談…232ケース(85.6%)

図 1 はHIV感染不安や検査あるいはHIV以外の性感染症（STI）などに関する相談（以下：「HIV関連相談」）の内訳である。

図1　HIV関連相談の内訳（n=232）



2016年度の相談特徴を前年度と比較してみると、「予防なしアナルセックス感染不安」が13.6%→11.6%、「アナルセックスとフェラチオ両方の行為の感染不安」が8.0%→8.2%、「他のSTI」が4.0%→2.6%、「予防なしフェラチオ感染不安」が8.4%→7.8%、「検査に関して」が16.8%→16.4%と、ほぼ前年度と変わらなかった。

リスクのある行為をして相談してくるケースは、前年度同様にリスクが有る事を分かっていながら、行為を止められないといったケースが複数あり、前年度から継続して相談して来ているケースもあった。その様な相談には今後の予防について共に考えると同時に検査により現状を知る事をアドバイスしている。フェラチオに関する相談は、毎年のことであるが、する側・される側ともに予防をしている者は、相談票の記載からは読み取れなかった。アナルセックスでは適切な予防をしながらもフェラチオをする事による感染リスクを知らず行為の後に不安になり相談してきたケースが複数あった。

「その他の性行為の感染不安」では、相手の正常な皮膚を舐めた等、感染の可能性の無い行為で心配になり相談してきたケースが目立った。

「予防の情報提供」に関しては、今年度も、どの様にセーファーセックスをしたら良いか迷っている相談者に相談員の経験を基に、適切なアドバイスを行っていたようだ。

(8) HIV以外の相談(非HIV関連相談)…39件(14.4%)

図2は、セクシュアリティ(性的指向)、ライフコース(ゲイとしての生き方)、そして人間関係などゲイとしてのアイデンティティに関わる「非HIV関連相談」の内訳である。

前年度と比較すると「ライフコース(ゲイとしての生き方)」が26.6%→17.9%、「メンタルヘルス等」が9.4%→7.7%と減少した。また「セクシュアリティ」が18.8%→20.5%、「恋愛・人間関係」が32.8%→38.5%、と増加した。

ライフコース(ゲイとしての生き方)」では、カミングアウトや発展場関係などの相談があった、「恋愛・人間関係」では、出会いの機会、結婚しているが男性と関係を持っていると言った相談などが寄せられた。

「セクシュアリティ」では、自分の性的指向への迷いに関する相談などが寄せられた。

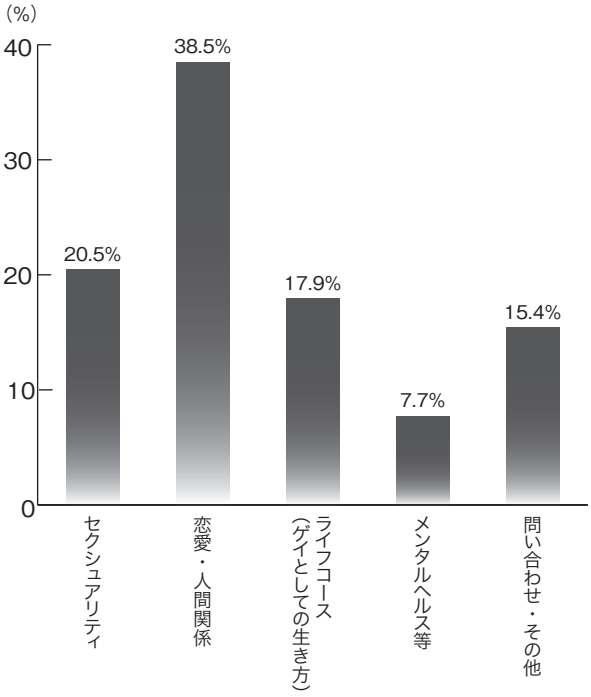
(9) 陽性者等の対応について…10件

2016年度の陽性者等の対応は、HIV陽性者からの相談が8件、パートナーや友人など陽性者本人以外からの相談が1件、検査での要確認の相談が1件で、全相談件数に対する陽性者等の割合は7.8%→10.8%→19.5%→11.6%→9.7%と推移している。

陽性者等の相談内容は、周囲への告知や黙っている事の悩み、発症による感染発覚後、どれ位、生きられるかといった相談や、日々の生活の中で襲ってくる漠然とした不安、他の陽性者と話がしたい、関係を持った相手への通知をどうしたらよいか、という相談などがあった。

その他、PrEPや郵送検査関係の相談が寄せられた。

図2　非HIV関連相談の内訳（n=39）



●今後の課題

A. 相談員の増員、学習等

今年度も仕事の関係などでシフトを変更する事が非常に多かった。その際にはシフト調整係が活躍した。

今後、仕事などの関係でシフトに入れなくなるスタッフが出る事も考えられるため、引き続き人員の育成を検討していく必要があるだろう。

今年度は、中学生からの相談もあり、若年層の性行動に関して理解と学習の必要性を感じた。

今後の課題としたい。

B. 相談日数・時間枠の検討と広報の必要性

今年度の相談件数は、前年度と比較すると減少したが、それ以前と比較すると平均的な件数だった。

今後、大幅に増加する様なら回線数や日数、時間枠の拡充も検討する必要があるかもしれないが、現状では現在の曜日、時間枠で行うことが妥当であると考えている。

広報では、今年度はインターネット及び携帯電話モバイルの合計で、Gフレ電話相談を知った相談者が94.8%に達した。

それが単純にライフスタイルの変化によるものなのか、それ以外の媒体への広報不足なのか現状では分からない

が、今後も注視して行きたい。

C. 陽性者等の対応に関して

今年度も 10%近くに達した。これは、土曜夜に開いている相談機関が限られていることも影響していると共に相談員がゲイである事による話しやすさも、あると思われる。相談員それぞれに HIV との関わり方に違いはあるが HIV を身近に感じているゲイとして、これからも陽性者等が孤立しないよう対応していきたい。

専門性の必要とされる情報に関しては、適切な相談機関を案内しているが、

G フレ電話相談実施時間に他の相談電話が実施されていない事を考えると、現在よりも陽性者の必要とする情報等について更に知識を深めて行く努力をして行きたい。

今年度は PrEP 他、陽性者とその周囲の人たちにとって大きなトピックスがあった、我々、相談員もそれらの情報に関して適切な情報提供が出来る様に例年以上に知識の向上に努力する必要があるだろう。

D. 非HIV関連相談に関して

今年度も様々な相談が寄せられた。非 HIV 関連の相談では、相談員ごとの価値観の違いにより、回答に違いが生じると思われるが、人それぞれ置かれた環境の違いから相談者自身でしか答えを出せない事、他の相談員の場合違う回答になる可能性を伝えた上で、自身の経験など参考になりそうな話をしている。

専門外ではあるが、セクシュアリティやゲイとして生きる事など相談機関相談者の今後の人生の選択に大きく影響する事も考えられるので、

今後もミーティングやケースカンファレンスで情報を共有し、様々な考えや指向など共有していきたい。

（電話相談報告：高木伸浩）

2. 各種イベントでの活動

●東京レインボープライドパレード＆フェスタ

5 月 7 日（土）及び 8 日（日）の二日間、代々木公園野外ステージ周辺で開催された「東京レインボープライドパレード＆フェスタ」では、ぷれいす東京と akta、また各地のコミュニティセンターからの応援スタッフも加わった合同ブースを出展した。大型テントをおおよそ半分ずつぷれいす東京と akta がわけあい、スタッフも双方から集まったメンバーに加えて仙台の ZEL、大阪の dista、福岡の haco からメンバーが参加、両日合わせて 20 名以上のスタッフが入る大型ブースとなった。

ブースのぷれいす東京ゾーンには大型看板も

近年、さまざまな企業でセクシュアリティに関する研修が行われるなど、セクシュアルマイノリティを取り巻く環境は大きく変化しつつある。今回の代々木公園のイベント会場にも多数の企業や各国の大使館などが出展、政治家による視察なども行われ、取材陣も例年以上に多く入っており、例年に比べて熱気の違いを感じることが多くあった。

一方で HIV に関する情報を聞きたいが一般の方が会場に多すぎて声に出して話をしにくい、という状況になってしまうことも考えられたので、ぷれいす東京側のスタッフは G フレのメンバーをコアメンバーに、取材の希望があった場合や日本語がわからない方への対応、当事者からの相談が出てきた場合など起こりうる状況をあらかじめ想定しながら準備を進めた。各部門から名乗りをあげてくださった他部門の方に協力をいただきつつ、研究班による新しい情報サイトである「LASH online」の広報カードなどの配布に加え、寄付つきの T シャツや缶バッジの販売を実施した。

配布した LASH onlineのカードと同じデザインの看板

7 日は、日本と台湾の HIV に関する状況についてステージ上でシンポジウムが開催される中、当時の自民党政調会長が視察に訪れた折にマスコミが大挙して訪れたため、

一部の取材者がカメラバッグで什器を倒すなどのトラブルがあった。しかし大事には至らず、多くの方にブースを訪れていただき、さまざまな資材を目にしたりお持ち帰りいただけた。

8日のパレードにおいては、MSM首都圏グループが「AIDS IS NOT OVER ～エイズは、まだ終わっていない WE' RE ALREADY LIVING TOGETHER」をテーマに掲げてフロートを出展、今年から渋谷駅のスクランブル交差点前もコースの一部となり、沿道からパレードをご覧になる方も多く（主催者発表で沿道と会場合わせ40000人を超える動員）、強いメッセージを発信する場となったと感じている。ブースも前日に引き続き運営し、パレードを歩かない留守番のスタッフも確保してパレード中に来場されるかたにも対応した。前日に引き続きイベントは盛況であり、スタッフは少々早めの日焼けをしてしまったが、ご協力くださったかたが多かったおかげで個々にイベントを楽しむこともできたようで、ブース運営としては良かったと感じている。

またパレードに当たっては､2015年に開催した「LGBT HEALTH TALK」で登壇していただいた国際医学生連盟のかたから、次期の代表を紹介したいというお話とともに、HIVのフロートで一緒に歩きたいというありがたいお申し出も頂き、パレードを一緒に歩くとともにブースにもお越しいただきお話をすることができた。大規模なイベントはこうしたつながりの場としても機能するのでこれからも大事にしていきたい。

●TOKYO AIDS WEEKS 2016

2015年は東京での日本エイズ学会学術集会・総会に合わせて開催された「TOKYO AIDS WEEKS」であるが、今年は学会の開催地が鹿児島ということで規模は小さくなった。

しかしながら、なかでも好評だったゲイコーラスのミニコンサートを今年も開催することとなり、Gフレをはじめとしたぷれいす東京のメンバーで当日のスタッフを務めることとなった。2015年の開催時や先述のパレード&フェスタと同様に、Gフレメンバーをコアメンバーとして他部門のメンバーを交えて体制を作って臨むこととなった。会場は昨年と同様、国立国際医療研究センターのアトリウムである。

クリスマスカラーでデザインされたフライヤー

当日は前年とは色違いの青いスタッフTシャツを着たメンバーで、病院の入口からの誘導、たまたまお見舞いなどで病院を訪れたかたなどへのイベントの説明、客席の誘導と点滴台などをお使いの方への安全配慮、資材の配布などを手分けして実施した。

今回もコーラス隊にはゲイコーラスサークルなどから多くの参加者があり、演奏曲目の中には札幌のHIV啓発イベントをきっかけに誕生した「大空」という楽曲があったが、制作されたユニット「ときどき通信」のとっちさんもコーラスに加わっていただいた。

昨年と異なり学会というイベントに合わせての開催ではなかったため来場者数はかなり心配していたが、今回は病院側で入院病棟などでも告知をしていただいていたとのことで、服装などからご入院されている方とそのご家族かと思われるグループも多く、客席は早々にいっぱいになり、建物の構造上吹き抜けになっているので上のフロアから下を覗き込むようにご覧になるかたも多かった。全体で約200名ほどの方にコンサートをお楽しみいただけた。

●最後に

イベント関連では2016年度はGフレ単独でのイベント開催はかなわなかったが、大規模イベントでGフレメンバーによる事前の準備・シミュレーションをしたうえで他部門のスタッフの方にも当日お手伝いいただくという運営方法は身についてきた感がある。こうしたイベントについては終了後のGフレのミーティングの場で各スタッフの視点からの反省点などをシェアし、次のイベントにつなげている。2017年度もよりブラッシュアップしたものにしていきたいと思う。

一方で、独自のイベント開催についても、メンバーの状況的に無理がない範囲で実施をしていきたいと考えている。本職を持つ社会人によるグループということで制約も多い現状だが、メンバーは様々な「伝えたいこと」を持っているので、それが活かせる部門にしていきたい所存である。

（イベント関連報告：桜井啓介）

2016年度も多くの個人・団体よりご協力、ご支援をいただきました。メンバー一同心より感謝申し上げます。引き続き2017年度もGay Friends for AIDSをよろしくお願い申し上げます。

Ⅰ． 活動概要

主な活動は、ネスト・プログラムの企画・運営、プログラムのための人材育成・研修である。

(A)ネスト・プログラム

HIV 陽性者やそのパートナー、家族が、安心して話し合ったり、学習や情報交換をしたり、交流したりすることを目的としている。多くのプログラムは HIV 陽性者を対象としているが、陽性者のパートナーや家族を対象としたものも開催している。プログラムに参加するには事前の利用登録が必要であるが、事務所にて専任相談員が当事者確認をし、守秘義務などのルールに同意を得た上で行っている。プログラムでは、相談員や司会進行役のスタッフのもと、毎回、最初にグラウンドルールを確認している。

ネスト・プログラムに関わるスタッフ、相談員などで会議を設け、企画運営をしている。また、毎月ネスト・ニュースレターを発行して、ネスト・プログラムの案内や報告などを掲載している。メール版（PC 版・携帯版）も配信し、Web 上に PDF 版を公開している。

(B)人材育成・研修

2012 年度より積極的に人材育成を行っている。ぷれいす東京のボランティア合同研修修了者を対象に、ネストスタッフ研修を行っている。また、プログラムのセクレタリー（受付業務）やファシリテーター（司会進行役）として活動するスタッフには、別途、オリエンテーションと実地研修を行っている。プログラム参加者の中から、スタッフとしても活動に参加する HIV 陽性者やパートナーも増加している。従来新陽性者 PGM にほぼ限定されていたピア・ファシリテーターによるミーティングの運用を、他のプログラムへと拡充していくことも促進している。

また、2013 年度に始まった「地域における当事者支援のための支援プログラム」では、全国各地での当事者支援のための支援をする団体やグループへのコンサルティングや相談対応を行っている。

地方の陽性者ピア・サポートの一つとして、新たに群馬サテライト・ミーティングを立ち上げ、現地へのアクセスが良い地元の当事者への支援をスタートした。

Ⅱ． 2016年度活動実績

(A)ネスト・プログラム

（2016年4月1日～2017年3月31日）

○スタッフ数（2017 年 3 月 31 日現在）	6 名
○ネストスタッフ数（2017 年 3 月 31 日現在）	44 名
○実利用者数	332 名
（うち新規利用者数	126 名）
○のべ利用者数	1,231 名
（うちピア・ファシリテーターなど積極的参加	104 名）
○プログラム開催数	128 回

プログラム内容は**表 1** を参照

○ネスト・ニュースレター　　月 1 回　年 12 回発行

その他に、ネスト・プログラム・スタッフ会議や、新陽性者 PGM ファシリテーターによる各回・各期の振り返りミーティング､その他各プログラム担当ファシリテーターやセクレタリーの振り返り、多目的室の整備など、ネスト・プログラムを運営していくために、陽性者が積極的に関わって多くの会議や活動が行われている。

(B)人材育成・研修

○ 2016 年度 ネストスタッフ研修修了者数　　4 名

Ⅲ． 2016年度活動報告

(A)ネスト・プログラム

ぷれいす東京 Web サイトの「ネスト・プログラム」には、ネスト・プログラムの報告や参加感想文が多数掲載されているので、あわせてお読みください。

(A)-(イ)グループ・ミーティング

(イ)- 1　新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)

新陽性者ピア・グループ・ミーティング（PGM）は、HIV 陽性と知ってから 6 ヶ月以内の陽性者 5 ～ 7 名が、2 時間のミーティングを 2 週間毎に計 4 回（1 期）参加し修了となるプログラムである。2001 年 4 月に第 1 期がスタートしてから、2017 年 3 月で丸 16 年が経過した。開催数は通算で

表1　ネスト・プログラムと参加状況

	プログラム名	実施回数	のべ参加者	ピア・ファシリテーターなど	スタッフ・ファシリテーターなど	セクレタリー	講師・ゲストなど
	(イ)グループ・ミーティング	**71 回**	**633名**	**83 名**	**55 名**	**62 名**	**0 名**
	1 新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)	17 回	110名	21 名	23 名	17 名	—
	2 新陽性者PGM同窓会	—	—	—	—	—	—
	3 ミドル・ミーティング(40才以上の男性陽性者)	11 回	201名	7 名	12 名	13 名	—
	4 U40ミーティング(10代,20代,30代男性陽性者)	11 回	117 名	24 名	—	6 名	—
	5 異性愛者のための交流ミーティング	12 回	121 名	20 名	1 名	11 名	—
	6 Women's Salon(女性陽性者のためのプログラム)	4 回	9 名	—	8 名	0 名	—
NEW	7 大人女子会(更年期女子会から名称変更)	1 回	4 名	—	1 名	0 名	
	8 ミックス・トーク10(MT10)	4 回	22 名	8 名	—	5 名	—
	9 陰性パートナー・サポートミーティング	6 回	31 名	1 名	5 名	6 名	—
	10 もめんの会(HIV/AIDSを支える母親の会)	4 回	13 名	—	4 名	4 名	—
NEW	11 群馬サテライト・ミーティング	1回	5 名	2 名	1 名	—	
	(ロ)学習会/ワークショップ/セミナー	**18 回**	**187 名**	**5 名**	**30 名**	**11 名**	**25 名**
	1 ストレス・マネジメント講座	6 回	42 名	—	6 名	—	6 名
	2 アサーティブ・コミュニケーション　自己表現のABC	4 回	33 名	—	5 名	3 名	5 名
	3 専門家と話そう	2 回	38 名	—	9 名	2 名	5 名
	4 ベーシック講座「知っとこ！社会福祉制度」	2 回	7 名	—	2 名	2 名	—
	5 ベーシック講座「HIVってどんな病気？」(うち1回はSpecial)	2 回	16 名	2 名	3 名	2 名	—
	6 就職支援セミナー	2 回	51 名	3 名	5 名	2 名	9 名
	(ハ)交流会	**39 回**	**307 名**	**16 名**	**45 名**	**26 名**	**3 名**
	1 就職活動サポートミーティング	12 回	30 名	—	12 名	9 名	—
	2 介護職として働く陽性者のための交流会	6 回	28 名	—	6 名	3 名	—
	3 看護師として働く陽性者のための交流会	6 回	58 名	—	6 名	3 名	—
	4 障害者枠で働く陽性者の交流会	4 回	31 名	—	4 名	—	—
	5 教師として働く陽性者のための交流会	4 回	14 名	—	4 名	2 名	—
	6 ピア+トーク	2 回	58 名	8 名	4 名	3 名	3 名
	7 カップル交流会(+/+or+/−カップル)	4 回	41 名	5 名	3 名	4 名	—
	8 年末パーティ	1 回	47 名	3 名	6 名	2 名	—
	プログラム参加者総数	**128 回**	**1127 名**	**104 名**	**130 名**	**99 名**	**28 名**

81 期（324 回）、参加者数はのべ 1,761 名（実人数：484 名）である。

感染告知を受けて心身共に不安定になりがちな最初の数ヶ月間を同じ立場の仲間と過ごすことで、問題の解決のヒントや、先の見通しを得てもらうことがこのプログラムの大きな目的である。また、このプログラムをきっかけとして今後も連絡を取り合う仲間を得たり、ぷれいす東京が提供する他のサービスに繋がるきっかけとなる場合もある。このプログラムへの参加を経験したいわゆる「卒業生」でスタッフとしても参加するピア・ファシリテーターは、2017 年 3 月現在 PGM に関わるピア・ファシリテーター全体の約半数で、循環型のプログラムとして順調に機能している。2017 年 3 月現在、PGM の運営に関わるスタッフは、ピア・ファシリテーター 9 名、スタッフ・ファシリテーター 8 名、医療情報スタッフ 2 名となっている。

2016 年度は、第 83 期 4 回目から第 88 期 4 回目までの 5 期にわたり 17 回が開催された（1 期欠番）。以下、今年度内に期を終了した第 83 期（2016.2.26 開始、4.1 終了）から第 88 期（2017.2.9 開始、3.23 終了）の 5 期分についての報告を行う。参加者はのべ 110 名、実人数は 36 名であった。1 期平均の参加人数は 7.2 名（昨年度 5.7 名）、出席率は 76.4%（同 89.7%）であった。

参加前アンケートによると、性別は男性 34 名、女性 2 名。過去女性参加者は非常に少ないが、昨年度の 1 名に続き今年度は 2 名の参加があった。年齢分布では 10 代、20 代と 50 代以上の割合が減り、30 代・40 代がほとんどを占めた。周囲に感染を通知した人数で「5 人以上」と答えた割合が全体の 19% である一方で、「0 人」と回答した割合が 28% あり、現在でもカミングアウトに難しさを感じている人がこのプログラムに参加していると推察される。

また参加後のアンケートより、参加者がこのプログラムをどう評価しているかが読み取れる。「期待していたものが得られたか」という質問に対して、全体の 56.7% が「とても得られた」、36.7% が「得られた」と回答している。具体的には「似た境遇の人と会えて安心できた気持ち」「自分以外の人の状況を知ることで得た視野の広がり」「他で話しにくいことが話せた時間」「孤独感の軽減」「なんとなく前向きになれた気持ち」を挙げる参加者が多かった。

新陽性者 PGM 参加者からの声については、39 ページをご参照いただきたい。

(イ)- 2　新陽性者PGM同窓会

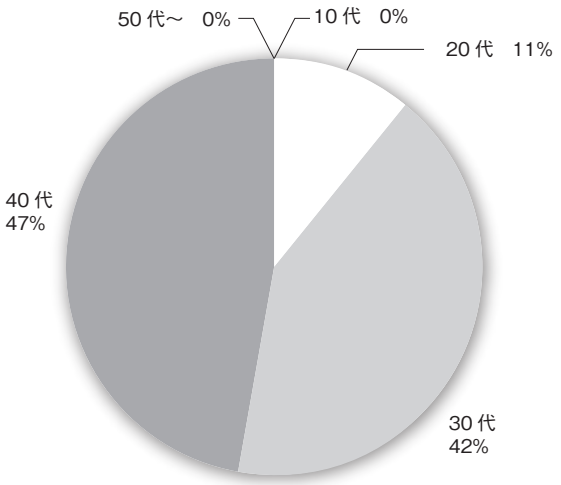
新陽性者 PGM 同窓会は、2015、2016 年度は実施しなかった。従来のミーティング形式のニーズは他のプログラムで満たされるようになってきたため、違った形式での開催を検討中である。

(イ)- 3　ミドル・ミーティング(40才以上の男性陽性者)

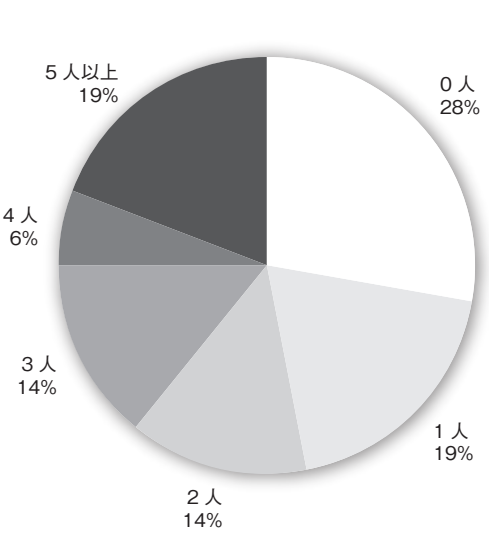
毎月第 2 土曜日に開催されているミドル・ミーティングは、基本的には 40 代以上の男性 HIV 陽性者のミーティングである。今年度は 11 回開催して、のべ 208 名（ピア・ファシリテーター 1 名のべ 7 名含む）の参加があった。半数以上の回で、その回が初参加という人が数名おり、参加者の幅は広がってきている。大人数でも 2 時間のミーティングがスムーズに進行できるように、自己紹介のタイムキープや、途中で 2 グループに分かれて、それぞれで話題を深めて、最後にお互いに報告し合うというような進行の工夫を行っている。また、会場のレイアウトについても、より大人数に対応できるよう、毎回、机や椅子の配置を変更するということも行っている。中には、遠距離から時間をかけて参加する方もいる。また、一人での参加が難しい方については、参加時と帰宅時にバディ・スタッフが付き添っている。参加者同士、定期的にお互いの顔を見て、近況を聞き合い

［参加前アンケート］

年代 (n=36)

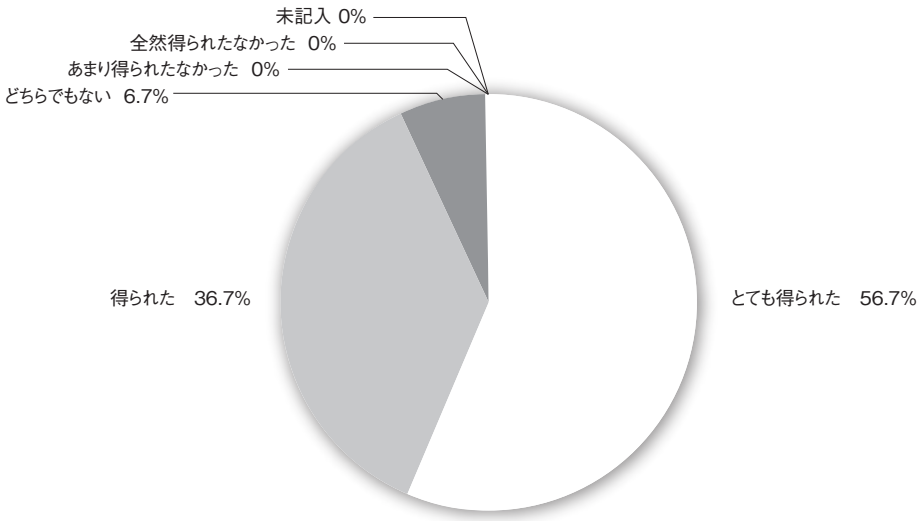


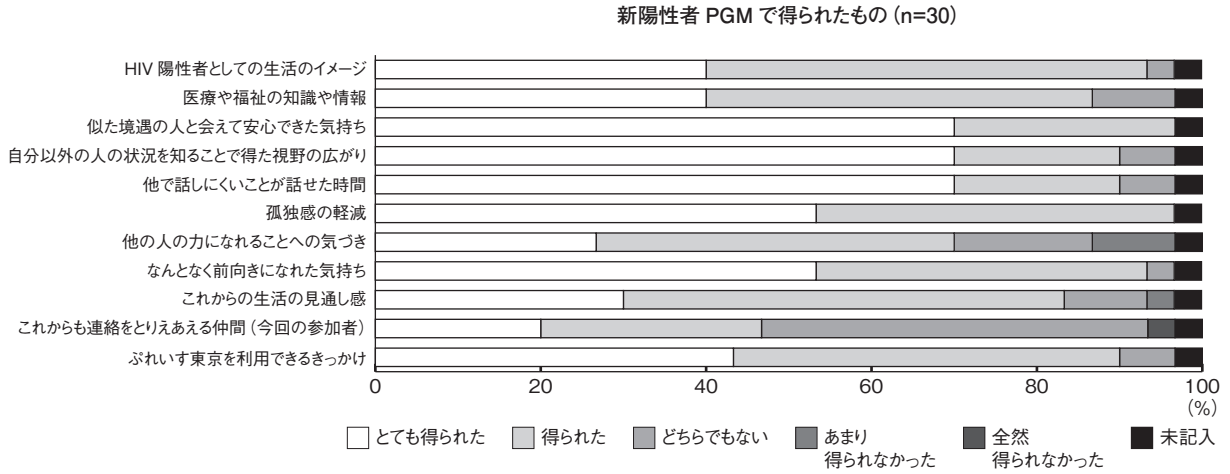
周囲への通知人数 (n=36)



［参加後アンケート］

期待していたものが得られたか (n=30)





ながらまた次回お会いしましょうねと散会する。この場が互いに励まし合う、定期的に挨拶をかわすサポート・ミーティングとなっている。

(イ)- 4　U40ミーティング(10代、20代、30代の男性陽性者)

U40 ミーティングは、10 代から 30 代までの男性 HIV 陽性者のためのプログラムである。今年度は 11 回のべ 141 名（ピア・ファシリテーター 5 名のべ 24 名含む）の参加があった。曜日や日にちを固定せずに開催しており、その時によって参加人数のばらつきはあるが、半数以上の回に初参加が数名おり、感染告知から長い参加者との間で積極的な交流が見られる。U40 が初参加のプログラムとなる参加者数は 13 名にのぼり、PGM 同様ネスト・プログラムへの入り口としての役割も果たしている。参加人数が多い回には、ミドル・ミーティングと同様にグループに分けて進行するといった工夫も行っている。また年に 2 回ほど、質問を紙に書いて箱に投函し、くじ形式で読み上げてみんなで答えるという方法を取っており、匿名性が保たれることで普段訊きづらいことが訊けると参加者に好評である。毎回その回が初参加となる方に優先的に話題提供をしてもらっているが、比較的感染から日が浅い参加者に対して先輩が経験などを語ることがある一方で、逆に感染から年数が経った参加者がフレッシュな意見を聴いて初心に返るという場面もある。進行はこれまでぷれいす東京の陽性者スタッフ 2 名で行っていたが、2017 年 2 月より研修を修了した若手のピア・ファシリテーターにバトンタッチした。複数名がチーム体制で進行を担当している。ミドル・ミーティングと並び、近況や悩みなどを共有するサポート・ミーティングとして機能している。

(イ)- 5　異性愛者のための交流ミーティング

男女各 1 名の呼びかけ人と相談員が話し合いを重ねて、2011 年 9 月に立ち上げたミーティングである。現在、原則として奇数月の第 4 土曜日と偶数月の第 3 金曜日に開催している。2013 年 5 月からは、ネスト・プログラムのファシリテーター研修を修了した、同じ立場の 3 名のピア・ファシリテーターが交替で司会進行を担当している。2016 年度は 12 回開催して、のべ 141 名（ピア・ファシリテーター 3 名のべ 20 名含む）が参加した。子づくり、男女の恋愛、結婚など、他のミーティングでは話しにくいテーマについて気兼ねなく話し合う事ができるミーティングとなっている。異性愛の陽性者が交流できる場は限られており、この場を通じて難しさを共有できる仲間づくりが広がって、活発なミーティングとなっている。

(イ)- 6　Women's Salon(女性陽性者のためのプログラム)

Women's Salon は女性陽性者のためのプログラムで、他の参加者と交流しながら、女性同士で安心して情報をわかち合う場である。進行については、女性ファシリテーター 3 名がチーム体制で担当している。2016 年度は 4 回開催し、のべ 9 名が参加した。近況報告から恋愛まで、話がつきることのない女子会となった。

(イ)- 7　大人女子会

「更年期女子会」として新たに立ち上がったプログラムである。名称を「大人女子会」に改め、今年度初開催となった。子供が成長して親元から旅立とうとしていたり、身体の変化に戸惑ったりなど、この年代ならではの悩みを話す場となっている。1 回開催、4 名参加。今後も年に数回のペースで開催を予定している。

(イ)- 8　ミックス・トーク 10(MT10)

年代や性別、セクシュアリティといった枠を越えて、さまざまな人と少人数でじっくり話したい…という要望を受けて立ち上げたプログラムである。参加は先着 10 名とし、定員となった場合にはキャンセル待ちとなる。進行は 3 名のピア・ファシリテーターがチーム体制で担当し、普段なかなか密に話す機会のない参加者同士が和やかにじっくりと話せる場となっている。途中で 2 グループに分かれてそれぞれでテーマ別に話題を深め、後にお互いに報告しあう

という進行上の工夫も行っている。今年度は4回開催、のべ30名参加（ピア・ファシリテーター3名のべ8名含む）。今後も年に数回のペースで開催を予定している。

(イ)-9　陰性パートナー・サポートミーティング

陰性パートナー・サポートミーティングは、奇数月の第1土曜日に開催されている。今年度は6回の開催で、のべ32名が参加した。男性だけでなく、女性のパートナーの参加もあり、セクシュアリティ、既婚の有無などを問わず多様な参加者が集っている。陽性者の周囲で生活する人たちにとっては、他ではなかなか話せないことを話すことができる場となっている。

(イ)-10　もめんの会（母親を中心とした親の会）

もめんの会は、年に3～4回開催されている。2016年度は4回のべ13名が参加した。子どもからその事実を知らされて10年以上経つ人もいれば、最近知らされてその事実を受け止めるのに苦労している方もいる。子どもの年齢も10代から50代までと非常に幅広い。もめんの会は、子どもには言いづらい親としての思いをお互いに聞き合う会となっている。

パートナーや母親などの家族が、他の場所でHIV陽性者とともに生活することに起因する様々な思いを吐き出す場はなかなか得られない。どんなに有能な専門家の言葉よりも、時には「私もそうだったの」という一言に勇気づけられることもある。ミーティングが成り立つためには、その場をあたためていてくれる同じ立場のメンバーたちがいてくれることが開催の必要条件となる。こうした、「私も大変だったときに他のメンバーに支えられたから、参加できる時にはきます」というお母さんたちの存在で、この貴重なサポートの場がたもたれている。

また、事前の連絡は必要であるが、父親の参加も可能となっている。

(イ)-11　群馬サテライト・ミーティング

ぷれいす東京では、各地域での陽性者ピア・グループ・ミーティングのサポートを行っている。移動したボランティア・スタッフからの申し出がきっかけとなり、北関東や東北など東京にくるよりもアクセスしやすい地域の陽性者に向けたサテライト・ミーティングを立ち上げた。初参加の方に対しては現地で利用登録ができるよう、ぷれいす東京のスタッフも参加している。また、グループの進行のサポートも行っている。初回は7名参加（ピア・ファシリテーター2名を含む）。今後も継続開催を予定しており、他の地域への拡大も検討していく予定である。

※参加者の感想文を39ページに掲載しています。

(ロ)学習会／ワークショップ／セミナー

HIVと長く付き合いながら、自分らしく生きていくために必要なスキルを身につけるためのワークショップや、専門家からの情報や、社会制度の基礎など、陽性者に役立つ情報を提供する学習会、企業の人事担当などを招いて行う「就職支援セミナー」などを開催している。

(ロ)-1　ストレス・マネジメント講座
～ストレスとうまくつきあうためのワーク～

HIV陽性者のためのストレス・マネジメント講座は、今年度、第26期と第27期、全2期の講座を開催した。平日の夜間開催で、のべ42名が参加した。

各期は全3回のプログラムからなり、ストレスに関するワークをしながらマネジメントスキルを身につけることをめざした。実施日と各回の参加者数は次のとおりである。

【第26期】

第1回　2016年6月28日（火）　5名
第2回　2016年7月19日（火）　4名
第3回　2016年8月　9日（火）　3名

【第27期】

第1回　2017年1月17日（火）　11名
第2回　2017年2月14日（火）　10名
第3回　2017年3月14日（火）　9名

各回の内容は参加者数や事前アンケートによる参加者のニーズによって調整を行うが、基本的には第1回で「ストレス反応」について学習し、第2回では「思考パターン」を知り、第3回に「ストレス対処法（コーピング）」の見直

しを行う。ストレスに伴う心身の状態に自覚的になることや、否定的で極端になりやすい思考や認知について学習することで、ストレスに対する自分の構えや傾向を知ることができる。また、より健康的な対処法を考えることで、ストレスに直面したときに、悪循環に陥らないように積極的な対処をすることができる。

参加者のストレス状態や生活状況はさまざまであるが、参加者同士で話し合うことで、自分の状態や傾向について新たな気づきを得ることができる。HIV にまつわる不安や恋愛や性に関する話題も出ることが多く、他の参加者と話し合うことで、安心感が得られたり、新たな対処法に気づいたりするようであった。

今後、参加者のニーズの多様性に合わせながら、有意義なグループワークとなるようにさらに改良しながら取り組んでいきたい。

次年度も継続的に開催する予定なので、多くの方の参加をお待ちしています。

（報告：野坂 祐子）

(ロ)- 2　アサーティブ・コミュニケーション　自己表現の ABC

相手も自分も大切にする自己表現＝アサーティブなコミュニケーションを身につける、2 回構成のワークショップ形式の講座である。ストレス・マネジメント講座を受講してから参加すると、より効果的なプログラムとなっている。

2013 年 1 月に新プログラムとして始まり、2016 年度は、7 月に第 8 期、1 月に第 9 期が行われた。講師は、パフスクールで「再出発のための自分史」を主宰し、NPO 法人アサーティブジャパン認定講師である沢部ひとみさんである。2 日間通しての参加が条件ということもあり、遠方からも参加しやすいように土日連続開催としている。HIV 陽性者を対象にしているので、関連した内容を盛り込んでいただいている。ロールプレイングでは、普段の人間関係のなかで抱えている課題をテーマとするなど、より実践的に役立つプログラムとなっている。

※参加者の感想文を 40 ページに掲載しています。

【第 8 期】
第 1 回　2016 年 7 月 2 日（土）8 名
第 2 回　2016 年 7 月 3 日（日）7 名

【第 9 期】
第 1 回　2017 年 1 月 21 日（土）10 名
第 2 回　2017 年 1 月 22 日（日）8 名

(ロ)- 3　専門家と話そう

2016 年度の「専門家と話そう」は、下記の通り 2 回開催した。

「歯科医と話そうⅢ」では、多くの HIV 陽性者が歯科診療の際に病名を伝えることに対して抱く不安などを踏まえ、開業の歯科医師や歯科衛生士をゲストに迎えて実際の対応例なども交えて話していただいた。

「生命保険のプロと話そうⅣ」では、総合代理店として幅広く生命保険を扱う 2 名の方をゲストを招き、最近の生命保険の動向や保険商品に関する情報について話していただいた。

いずれの回も、後半の質問コーナーではたくさんの質問に対してひとつひとつ丁寧に答えていただき、充実した学習会となった。

※参加者の感想文を 41 ページに掲載しています。

第 17 回「歯科医と話そうⅢ」
・日　時　2016 年 9 月 21 日（水）
・ゲスト　鈴木 治仁さん
（鈴木歯科クリニック院長／東京 HIV デンタルネットワーク代表）
・ゲスト　加賀谷 昇さん
（加賀谷歯科医院院長／東京 HIV デンタルネットワークメンバー）
・ゲスト　小林 美生さん
（加賀谷歯科医院主任歯科衛生士／東京 HIV デンタルネットワークメンバー）
・参加者　14 名

第 16 回「生命保険のプロと話そうⅣ」

・日　時　2017 年 3 月 29 日（水）
・ゲスト　菅 良一さん（生命保険コンサルタント）
・ゲスト　江川 守利さん（保険哲学外来）
・参加者　24 名

(ロ)- 4　ベーシック講座「知っとこ！社会福祉制度」

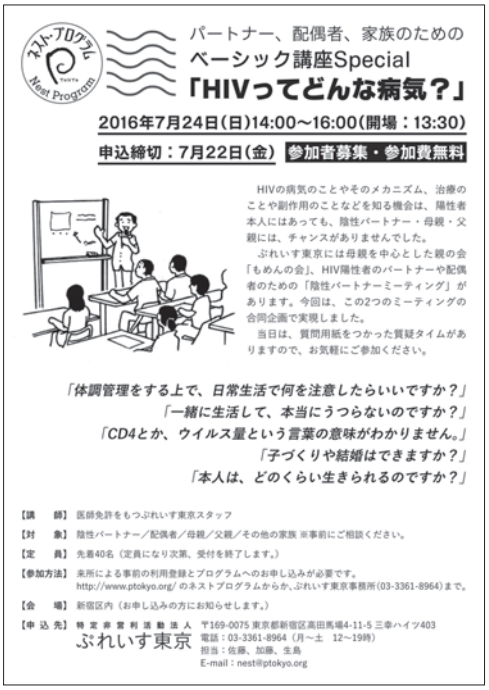
2011 年 1 月からスタートしたプログラム。今年で開催は丸 6 年となった。「基本のキ」をつかんでより良い制度利用ができるよう、わかりやすく解説している。「講義形式」というよりは、参加者が疑問に感じているところや興味を持っているところなどを中心に話を進行していく。講師は相談員が務めている。年に 2 回開催。

・日　時：6 月 13 日（月）、12 月 7 日（水）
・参加者：のべ　7 名

(ロ)- 5　ベーシック講座「HIV ってどんな病気？」

2014 年 6 月からスタートしたプログラム。新陽性者 PGM の中で行っている「医療情報セッション」の出前講座として、基本的な HIV ／エイズについてレクチャーを行う。講師は社会福祉制度と同様に相談員が務めている。年に 2 回開催。今年度そのうち 1 回については、今回初めて HIV 陽性者の、母親、父親、きょうだい、パートナーが参加できるように対象を広げて開催した。レクチャー後に質疑も活発にされた。両親から、講師の相談員、HIV 陽性のスタッフへの質問。それに会場にいたパートナーさんからのコメントがあるなど、HIV 陽性者を囲む多様な立場の人たちの語りが聞くことができた充実した会となった。

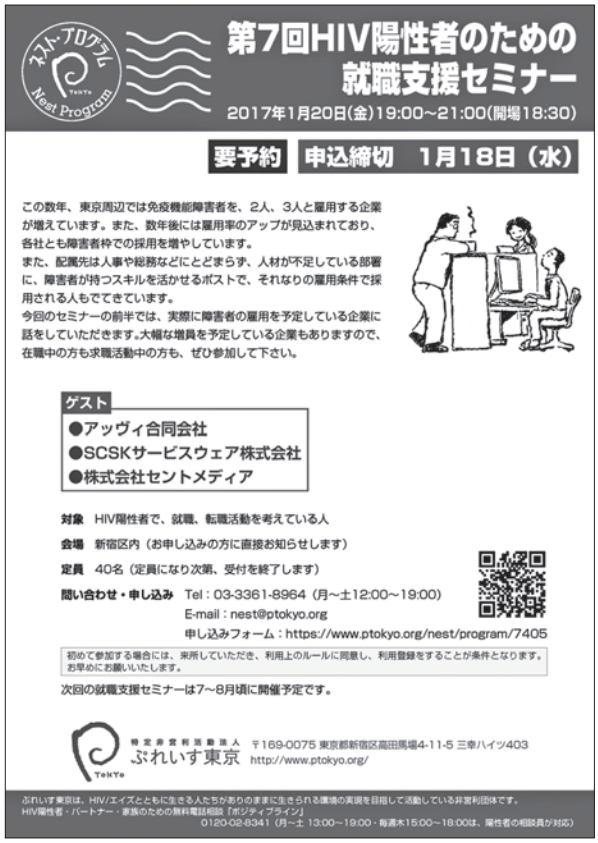
※参加者の感想文を 41 ページに掲載しています。



〈Special〉
・日　時：7 月 24 日（日）
・参加者：11 名
〈通常開催〉
・日　時：1 月 28 日（土）
・参加者：5 名

(ロ)- 6　就職支援セミナー

企業の人事担当者などを招き、企業はどのような目線で応募者を見ているのか、求人情報、社内の情報管理や配慮はどうなのかなどを話していただき、陽性者の就職・転職活動に役立ててもらうセミナーである。2016 年度は 8 月 26 日（金）に第 6 回を、1 月 20 日（金）に第 7 回を開催した。参加者はそれぞれ 28 名、23 名であった。いずれの回も、後半には活発な質疑応答が行われた。



(ハ)交流会

2011 年 1 月に「トークサロン」としてスタートしたプログラムは、昨年度より「交流会」と名称を変更した。境遇や立場がより近い陽性者同士で集まって、日ごろ疑問に思っていることや経験を可能な範囲で共有して、おしゃべりしながら考える場である。また、さまざまな経験をもつ HIV 陽性者を迎えて話を聞くというプログラム「ピア＋トーク」も開催している。その他、カップル交流会、年末パーティなどのイベント的なプログラムも行っている。

(ハ)- 1　「就職活動サポートミーティング」

一般枠で就職活動をしている人、障害者枠で就職活動をしている人など、就職活動といってもいろいろあるが、お互いの状況を聞き合いながら自分の方向性を考えるきっかけをつかんでもらう場である。毎月 1 回、水曜日と土曜日の交互開催となっている。

メンバーのなかから就職して卒業するという方が出てきて、その後、ミーティングに成功体験を共有するために報告にきてくれるなど、実践的な情報が得られる場となっている。メンバーは入れ替わりながらも、自分の就職活動の方向性を考えたり、不採用という結果を受け取りながらも、心が折れないように互いを励まし合う場となっている。

2016 年度　12 回　開催　　参加者　のべ　30 名

(ハ)- 2　「介護職として働く陽性者の交流会」

介護の仕事をしていると、利用者さんがケガしたり、ひっかいたり、つねったり、暴力行為をしたりなどする場合がある。この交流会は介護に従事している陽性者同士で、仕事の悩み、将来のことなどを話し合う場である。介護職ミーティングでは、働き方を変えること（キャリアチェンジ）を検討中の人たちからの参加も受け入れている。実際ミーティングに参加しながら、介護職員初任者研修に参加し、就職に至った人たちもいる。現在、2 ヶ月に一度、偶数月に開催している。

2016 年度　6 回　開催　　参加者　のべ　28 名

(ハ)- 3　「看護師として働く陽性者の交流会」

日ごろ HIV を持ちながら看護師として働くなかで、疑問に思っていたり不安に思っていることについて同じ立場の人同士で集まり、おしゃべりしながら考えてみる場である。介護職と同様に、同じ立場の陽性者と話してみたいという要望から生まれた会である。2013 年 1 月にスタートして、現在は、2 ヶ月に一度、奇数月に開催している。現在は看護師だけではなく、医療現場で働く有資格者の参加も受け入れている。

2016 年度　6 回　開催　　参加者　のべ　58 名

(ハ)- 4　「障害者枠で働く陽性者の交流会」

障害者枠で働いている方々の交流や情報交換の場として、2015 年 1 月のプレ開催を経て正式にプログラム化された。障害者枠ならではのメリットやデメリット、働き方に対する考え方などを共有することで、お互いの悩みの解決や今後の方向性を考えるきっかけとなる場である。

2016 年度　4 回　開催　　参加者　31 名

(ハ)- 5　「教師として働く陽性者の交流会」

教師として働く陽性者の交流の場として、2015 年 3 月のプレ開催を経て正式にプログラム化された。学校という環境のなかで働くことの悩みや困難などをわかち合い、同じ立場で考えたいという要望を受けて生まれたプログラムである。

2016 年度　4 回　開催　　参加者　14 名

(ハ)-6　ピア＋トーク

ピア＋トークは、様々な経験をもつHIV陽性者をゲストに迎えてお話を伺うプログラムである。

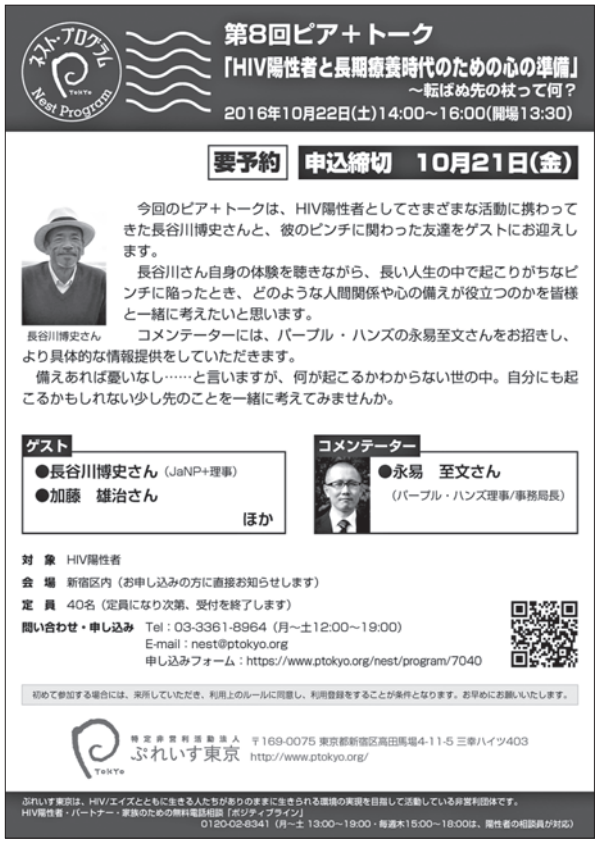
2016年度は下記の2つのテーマで開催した。

第8回ピア＋トーク「HIV陽性者と長期療養時代のための心の準備」～転ばぬ先の杖って何？

HIV陽性者としてさまざまな活動に携わってきたJaNP+理事の長谷川博史さんと、彼のピンチに関わった友達をゲストにお迎えし、長い人生の中で起こりがちなピンチに陥ったとき、どのような人間関係や心の準備が役立つのかを一緒に考える場となった。コメンテーターにはパープル・ハンズの永易至文さんをお招きし、より具体的な情報提供もしていただいた。

※参加者の感想文を41ページに掲載しています。

・日　時　2016年10月22日（土）
・参加者　28名



第9回ピア＋トーク「恋愛とカミングアウトⅡ」

2014年に開催して大変好評だった「恋愛とカミングアウト」を再びテーマに置いた。新たな出会い、パートナーとの人間関係の維持など、病気に関するカミングアウトをどのように実践したのかを5人のスピーカーに話していただいた。

※参加者の感想文を42ページに掲載しています。

・日　時　2017年3月18日（金）
・参加者　30名

(ハ)-7　カップル交流会（＋／＋or＋／ーカップル）

カップル交流会は、陰性パートナー・ミーティング参加者からの「カップルで参加できる場が欲しい」との声で開始した。陽性者と陰性者、陽性者同士のカップルで参加可能なイベントであり、カップルが持ち回りで世話人として企画・運営に主体的に関わっている。参加するカップルも、同性愛、異性愛、陽性者と陰性のパートナー、陽性者同士、英語で会話するカップルと、多様である。特に異性愛ミーティング参加者の参加が増えており、男女も多く参加するイベントになってきている。本年度は、6月と3月に開催した。

また、イベントだけではなくもっと気軽に参加できる場が欲しいという要望を受けて「カップル交流会カジュアル」が昨年にスタートした。過去のカップル交流会の参加者、陰性パートナー・ミーティング参加者はひとりでも参加が可能で、予約不要の情報交換の場として機能している。

・第24回カップル交流会「ブッフェのひとときをご一緒に」
　2016年6月26日（日）
　世話人1組と7組のカップル 計16名
・第25回カップル交流会「みんなで料理をしよう」
　2017年3月5日（日）
　世話人1組と5組のカップル 計12名
・カップル交流会カジュアル
　2回　計のべ20名

(ハ)-8　年末パーティ

12月23日（金・祝）に開催された年末パーティには、参加者、ネストスタッフ、事務所スタッフを含め、58名が参加した。合同研修からネスト・プログラムのネストスタッフ研修を経てボランティアとなったスタッフには、今年も当日の買い出しやセッティング、後片付けまで積極的に関わってもらった。全員に簡単な自己紹介をしてもらい、和やかかつ賑やかな会となった。また、昨年と同様に各ネスト・プログラムの説明や参加しての感想などを、実際にプログラムに参加している方から話していただいた。後半はビンゴ大会で大いに盛り上がった。しばらくぷれいす東京

から遠ざかっていた方から最近アクセスされた方まで、実に幅広い参加者の方々が集い、大変盛況であった。2時間半があっという間に過ぎ去り、楽しいひとときとなった。

※参加者の感想文を42ページに掲載しています。

(B)人材育成・研修

(Ⅰ)ネストスタッフ育成

ネスト部門の人材育成・研修は、2012年度に初めて行った。2011年1月より利用登録制がスタートし、利用者の安全性が大幅に向上した。これまでの利用登録者は923人（2017年3月末現在）となり、ネスト・プログラムの数や参加者が増えてきている。多目的室の入場時のチェックなど、ゲートキーパー的な役割を担うボランティアベースの人材（セクレタリー）の必要性が増大している。また、グループ・プログラムのファシリテーターなど、HIV陽性者を含む多様な人材がプログラム運営のなかでますます重要となってきている。

現在、「ボランティア合同研修」→「ネストスタッフ研修」から、プログラムのファシリテーターやセクレタリーへとつながる流れを継続しており、増加するプログラムや参加者への対応のなかで大きな役割を担っている。プログラムにも参加経験のある陽性者当事者が、研修を通じてスタッフとして活躍することも増えている。

2016年度も新人ボランティア合同研修修了者を対象に、ネスト部門のボランティア募集を行い、10月23日（日）に、ネスト部門を希望した8名（男性:5、女性:3）のうち4名と、ピア・プログラムの担当スタッフ2名が参加して、「ネストスタッフ研修」を行った。プログラムでは、ファシリテーションのスキルに関するもの、自己の参加動機を振り返るような参加型のワークショップを行った。

今後、セクレタリーやグループ・プログラムのファシリテーター候補者に、個別、またはグループでオリエンテーションを行う予定である。

2016年11月の日本エイズ学会学術集会において、ネスト・プログラム・コーディネーターの加藤力也が、「ぷれいす東京におけるHIV陽性者ボランティアの参加状況に関する考察」と題した発表を行った。そこでは、陽性者の安定的なボランティア参加があり、毎年サービス利用者から提供側に参画する陽性者がおり、利用者が支援者になるという道筋ができていると報告している。

(Ⅱ)地域における当事者支援のための支援プログラムの効果

2013年度にスタートした「地域における当事者支援のための支援プログラム」は、ぷれいす東京が20年に渡り積み上げてきたプログラム運営のノウハウを共有し、各地のHIV陽性者や周囲の人たちへの支援の実践に役立ててもらうことを目的としたプログラムであるが、今年度も昨年度同様に残念ながら中止となった。

地方の当事者を支援するプログラムとして、群馬サテライト・ミーティングの立ち上げを行った。プログラムの詳細は先述の通りだが、東京のみに止まらず、可能な範囲で必要な所に支援の幅を広げて行きたいと考えている。

Ⅳ. 最後に

ネスト・プログラムでは、利用者である当事者の声から、その要望に応える形で新規プログラムの企画を行ってきた。今年度は「大人女子会」と「群馬サテライト・ミーティング」が新たにスタートした。前者は利用者から、後者はボランティア・スタッフからの要望で立ち上がった。

また、研修修了者から次々と人材が育ち、いくつかのプログラムにおいて複数名のファシリテーターによるチーム担当制を行っている。ローテーションを組むことで担当スタッフの調整がしやすくなり、参加者にとってもさまざまな組み合わせの進行を経験することで、より多様なグループのあり方を体感してもらえることが期待される。この方式は、今後も押し進めて行く予定である。

また「ベーシック講座「HIVってどんな病気？」」を、陽性者の家族やパートナーを対象としてSpecial開催とした。HIVに関する情報は、当事者だけではなく本人を取り巻く人々にとっても大きな関心事である。正しい情報を得られる貴重な機会ということで、多くの参加者が集まった。

今年度は、新規利用登録の数は前年と比較してかなり増加した。新陽性者ピア・グループ・ミーティングの参加者が増えたこと、専門家と話そうやピア＋トークなどの参加者定員の多いプログラムへの新規参加者が多かったことがその要因と思われる。引き続き利用者のさまざまなニーズに応えるべく、プログラムの内容や進行の改善などを順次行っており、その中でますますボランティア・スタッフの力が必要となってきている。ぷれいす東京は、2003年よりボランティア希望者のための3日間に及ぶ合同研修を行っている。そこには、HIV陽性者や周囲の人たちも含まれている。そうした方々のなかから、HIV陽性者、周囲の人のためのネスト・プログラムに参加を希望する人たちが出てきた。一方で、グループ・プログラムにおける受付業

務、ピア・ファシリテーターを担う人材育成が急務になり、2012年度からネスト・プログラムの研修を開始した。これまでは、相談員と新陽性者PGMのコーディネーターが個別に声かけをして、ピア・ファシリテーターやスタッフ・ファシリテーターをリクルートしてきたが、この研修を立ち上げることで人材育成のステップが整理されることになった。そして、ピア・ファシリテーターは新陽性者PGMだけには止まらずに、他のグループ・プログラムにも関わる機会が増えている。

昨年のWebのリニューアルによってこれまで以上にネスト･プログラムへのアクセスが便利になった。Webのフォームから直接プログラム参加の申し込みが可能となり、参加者の感想文などの閲覧もしやすくなった。ぷれいす東京に関わるさまざまな方の声を直接反映する「ぷれいすVoice」や、ネスト・ニュースレターのPDF版置き場など、サイトを訪れた人が使いやすく便利だと感じられるような工夫を随時構築している。

謝辞

今年度も多くの個人のみなさまと団体からご寄付をお寄せいただきました。社会情勢が厳しくなっているなかでご支援いただいたことを深く感謝いたします。助成していただいた東京都福祉保健財団、ご寄付をお寄せいただいたヴィーブヘルスケア株式会社、MSD株式会社、オフィスTwo I（五十音順、敬称略）、そして多くの個人のみなさまに改めて御礼申し上げます。

ゲイ雑誌「サムソン」に、支援者の語りが毎月掲載されております。その執筆者の原稿料を活動収益金とさせていただいています。

（文責：佐藤 郁夫、加藤 力也、原田 玲子、生島 嗣）

Ⅴ．感想文

新陽性者PGM参加者のアンケートより（抜粋）

- もっと、こういうイベントを増やしてほしいです。又、検査をしていない人､HIVじゃない人にも、知ってもらい、もっとHIVの知識やイメージが良い意味で広がってほしいです。
- PGMプログラムの回数・内容が良く、結局は私達の不安な気持ちを打ち明ける場になってしまったのかもしれませんが、そんな中で、病気のこと、日常生活のこと、人とのつき合い方などを考えるきっかけになり、感謝しております。これから一生この病気とつきあっていく上で、冷静に、治療スタートができたと思います。
- これからも私たちのような陽性者を助けていってあげてください。とても良い取組だと思うので、協力できることはなんでもしていこうと思います。
- なかなか周囲にカミングアウトできない、しづらい病気であるため､PGMのような仲間と話せる機会があることはとてもありがたいことだと感じました。
- 素晴らしい活動をありがとうございました。救われました。たくさんの人が希望を持てたと思います。ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。
- PGM参加前はいろいろな気持ちを心の奥に無理矢理おしこめようとしていたのかなと思いました。病気とこれからどう向き合いつきあっていくか、明確な正解を持っていないけれど選択肢はたくさんもっている、そんな今の方がかえって自由になれたような気がします。
- 安心感が増しました。気持ちが少しずつ落ちつき、人生楽しまなきゃと思える様になった。感染を知った時は“死”のことが頭をよぎっていた。今後の生活について不安だらけでした。
- HIVに対する考え方が変化した。頑張らなくても良いし、自分らしく生きていく事が大切だと思った。
- 自己肯定する気持ちを得られなかった。世の中にはまだまだこの病気に対する偏見もあるけど、しっかり治療して、ちゃんと働いて、ちゃんと生きて、もっと幸せを感じていきたい。せめて自分はこの病気を他人にうつすことなく、自分の中に留めて（治療して）いけたら。そういう前向きな気持ちを得られました。
- なんも変わらず幸せをずっとかんじながらこれからも生きていきたいと思っています。

群馬サテライト・ミーティング参加者の感想文（「ぷれいす東京Webサイト」2017年4月掲載より）

■「地元でのミーティングに参加してみた」

ノブ（2016年感染告知／服薬：10ヶ月／初参加／40代）

今回、群馬でサテライトミーティングというミーティングが開催されるので参加してみた。

自分は、2016年2月に髄膜炎で緊急入院したことにより感染が判明した。それから髄膜炎の治療を優先し5月からART治療を開始しています。地元群馬の病院で4か月の入院をし退院後仕事に復帰していたときに痙攣発作が起き再入院になり治療の難しさに直面し落ち込んでいた時にトークイベントに参加してみたのがきっかけだった。人とふれあい素直に病気のことを話すことで目の前が明るくなったように感じられた。そんなときに地元でミーティングが開催されることになり参加することにしました。

はじめは地元ということもあり不安と怖さもあったが自分の考えや気持ちに変化を与えられたらいいかなと考え思い切って参加してみた。ちょうど4度目の入院の最中だったが主治医も気分転換にちょうど良いと外出を許可してくれ参加できた。

1回目ということで新規の参加者は少なかったが何人かベテランさんが遠征してくれて丁度良い感じだった。和やかな雰囲気で話ができ色々とアドバイスや情報などもい

ただくことができた。自分的には情報収集も目的なのだが、一番は同じ時間を共有し病気のことが話せるという家族や友人にも話せないことが話せるというそのことが心が落ち着き次のステップを踏み出す原動力になっている気がする。

東京のミーティングに参加するより時間的にも経済的にも負担が軽くありがたいし、地方ならではの問題や話題などもこれから出てくると面白くなると思うのでこれからも参加したいと思った。そしていろんな悩みや不安を共有しあい前向きになれればいいなと思った。

その後の入院生活も少し前向きに気分も軽くなれた気がしたし治療も頑張っています。

スタッフの皆さんは負担が大きいと思いますが続けて頂きたいのでよろしくお願いします。

■「知り合いたいけど、知られたくない」

ケージ（栃木県在住 /2008 年告知 /30 代後半）

服薬も習慣になり、普段の生活で病気の事もだいぶ意識しなくなりました。でもたまに同じ病気の人と会って話がしたくなる事があります。そんな時、地方在住だと都会まで出掛けて行く事になるので、手っ取り早く近所で知り合いたいと思います。一方で、近所の人にはあまり病気の事を知られたくないとも思います。

私は実家の事情で転職して故郷の街に戻って来ました。都会に比べて人が少ないうえ、仕事でも私生活でも幼馴染との付き合いが多く、おまけに噂話が盛んな土地柄です。こんな環境でもし私が病気だとわかったら、その事で差別されるかも知れません。だから病気の事は隠しています。病気の事を悟られない様に自己防衛しながら、万が一わかってしまった時もそれまでと同じく接してもらえる様に、普段付き合っている仲間達との信頼関係を保っています。

ミーティング中に群馬県在住の方が、どんな人が来るのかわからないのでここに来るまで不安だった、といった内容を話していて、確かにそうだなって思いました。もし栃木県内で開催されたとしたら、私は申込むのを躊躇したでしょう。参加者が本当に患者かどうかわかりませんし、病気の事を隠していない患者も来るかも知れません。ミーティング内で見聞きした内容をうっかり第三者に吹聴されてしまい、それが知人の耳に入ったらどうしよう、といった不安を抱えたと思います。

実際に参加してみてわかったのですが、今回はぷれいす東京さんの方でご配慮頂いた様でした。相談員の方が事前に患者かどうか確認した上で参加する形をとっていた事と、開始時に参加者全員で、守秘義務を守る等のルールを確認した事です。煩わしいと感じる人もいるかも知れませんが、参加者が不安を解消する一助にもなるのではないでしょうか。

もしかしたら私が知らないだけで、栃木県内でも患者同士の交流会が開催されているかも知れませんが、今後このミーティングが定期的に開催されるとしたら、地元に集える場所がある群馬の患者さん達がちょっと羨ましいですね。

アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC 第8期参加者の感想文（「ネスト・ニュースレター」2017年1月号掲載より）

■「他人に誠実である前に自分に対して誠実であれ」

シンタロウ（感染告知年 / 平成 14 年 / 初参加 /30 代）

人によく思われたい、だから相手の言うことを聞こう。事を荒立てたくない、だから余計なことは言わないでおこう。主張しない、相手に合わせる、断らない etc…、外面だけ良く見せようとずっと仮面を被って生きてきました。結果、うわべだけの人間関係しか築くことができず、そんな生き方を改善したいと思い参加しました。

講義のなかで強く印象に残った言葉「他人に誠実である前に自分に対して誠実であれ」。人の目ばかり気にしてきた私は、他人によく思われようと取り繕うことに必死で、自分の気持ちに対してはとことん不誠実であることに気づかさせられました。

2日目のロールプレイングでは実際にあった私のケースを取り上げていただきました。内容は父親に対して仕事を辞めたことをアサーティブに伝えること。仕事を辞めたことを父に切り出すことができず、数ヶ月の間、毎朝会社に行くフリをしていました。最初は皆の前で適当に演技でもすればいいだろうと思いましたが、先生やメンバーの的確なアドバイスにより、最後はまるで本当に父親に対して誠実に気持ちを伝えているような心境になっていました。今回学んだことを今後の様々な場面で活かしていきたいと思えた2日間でした。

アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC 第9期参加者の感想文（「ぷれいす東京Webサイト」2017年4月掲載より）

■「自らの感情と向き合うこと」

おおちゃん（服薬歴：9 年 / 初参加 /40 代）

コミュニケーションのイロハを教えてくれたらラッキーくらいの軽い気持ちで、今回参加することにしました。ところが！もっと深いことを教わることになったのです。当然、この場合は必ず「○○」と言えばいい、なんて単語帳みたいなものは無いわけですよね。

もっとも自分に響いたのは、『自らの感情と向き合うこと』。とても当たり前のことなのに、自分にとってはとても難しかった。

例えば『怒り』。では何故怒るほど頭にきたのか。悲しかったのか？寂しさを感じていたのか？

表に現れた感情の裏側＝本当の気持ちを自分で解っていない・そんなものがあるとも思っていなかったことに気付かされた時、ハッとする思いでした。

とても感傷的に解釈するならば、自分がセクマイだと気付いてから、その事実を隠すために嘘をつき、その嘘を正

当化するためにまた嘘をついて、それを「正しいこと」と思って繰り返してきた結果、自分の本当の感情すら見失ってしまっていたのかもしれない。

コミュニケーションのセミナーだと思っていたら、最後は自分を見つめることになりました。

気付きを与えられた2日間。とても有意義な時間でした。

専門家と話そう 第17回「歯科医と話そうⅢ」参加者の感想文(「ぷれいす東京Webサイト」2017年3月掲載より)

■「あたりまえのこと」

おうすけ(49歳/参加:初めて/告知:平成28年7月/服薬:1ヶ月)

受講した感想は「良かった」が 率直な気持ちです。

私はどちらかというと、じっとしてるのが苦手で、人の話をろくに聞かない性格なんですが、正直、今回のプログラムでは、必要な情報は得たいが、2時間は苦痛かなあと思ってました。ところがいざ始まると、話に聞き入ってしまい、あっと言う間に終わってしまった。そんな2時間だったのです。

今回は、歯科医師2名、歯科衛生士1名の計3名の方が講義してくれたのだけど、かたぐるしい話は一切なく、テンポ良く、わかりやすく、要点を捉えて、プレゼンして頂けました。 HIVに取り組む歯科医師の現状、問題点がよく理解できる内容。そしてこの病を抱えて生きていく私たちに、何故歯科治療が必要なのかを納得できる内容でした。担当の先生方は、今日までの大変な道のりを歩くために、多大な時間と労力を費やしているだろうと推察出来ましたが、それを苦にせず、高い志と情熱をもって当たっている素敵な方々でした。本物でした。本物の歯科医師、歯科衛生士が果たして今の日本に何人いるのだろうか?と考えさせられました。

「あたりまえのこと」と笑顔で話す3人の顔は、充実感で満ち溢れていて、困難な現状で日々の生活に不安を感じている私に、勇気と安心感を与えてくれました。患者受け入れのための医師、歯科衛生士としての高い見識をもって、我々のよき理解者たらんとしてくれている。と同時に我々を友人として迎え入れてくれているやさしさ溢れる姿勢には、偽善も嘘もないように感じました。

他の参加者方達も話にのめり込んでいるようでした。有意義な時間をありがとうございました。これからも是非、このような機会を作っていただけたら幸いです。

左より、小林さん、加賀谷先生、鈴木先生、生島

専門家と話そう 第18回「生命保険のプロと話そうⅣ」参加者の感想文(「ぷれいす東京Webサイト」2017年4月掲載より)

■「生命保険は感染者だと入れないという誤認情報」

りす(初参加/30代)

感染者だと生命保険に加入できないか、または非常に条件の悪いものにしか加入できないと読んだことがあったので、(最近でも生命保険協会に連絡したとき、感染者が加入できる保険はないと言われました)今回参加して感染者の保険加入に長年携わっているプロの方々からそんなことは全くないという事実を知り、大変驚きました。

感染者からの多くの質問の時間もあり、保険加入にあたっての非常に細かいプライバシーや心配事の点への解答も聞くことができて、大変参考になりました。非常に有益で重要な情報を得ることができて参加して本当に良かったと思います。

このような機会を設けてくださり、とても感謝しております。これからも積極的に参加させていただきたいと思います。

ベーシック講座「HIVってどんな病気?」Special(「ぷれいす東京Webサイト」2016年10月掲載より)

■「これからの暮らし」

タカ(父親)

HIVのベーシック講座に参加して良かったと思っています。講座の最後に行なわれた、参加者の質問への受け答えを聴いたこと、再度資料を読み返して、今まで知らなかった幾多の事も理解でき、今後の治療への希望も湧いてきました。

妻が、この講座に参加後に、息子と会う約束をしていたので久し振りに三人で夕食を取った。息子はHIV発症後6年程経過しており、東京での暮らしについて聴いてみたかったが、切り出せなかった。先立って行く親としては、どの様な形であれ、本人の意に沿った暮らしができる様に、協力してゆきたいと考えていたが、あせらずに、本人が切り出すまでは云うまいと考え直した。

発症し、入院をした時は、親に対し、ひたすら申し訳ないと思う息子に、とにかく生きて欲しいと願った。そして、これからの人生を自分らしく、前向きに生きて欲しいと伝えた。この事を決して忘れずに、向き合って行こうと思う。ハンデを負った息子の暮らしぶりを、遠くで見守りながら年老いてゆく私たちだが、それなりに生きて行こう。肩の力を抜いて…。

第8回ピア+トーク「HIV陽性者と長期療養時代のための心の準備」~転ばぬ先の杖って何?(「ネスト・ニュースレター」2017年3月号掲載より)

■「ココロの記念日」

しんしん(感染告知年:2013年/服薬歴:3年)

僕がもし感染告知されず服薬せずに過ごしてたら、長谷川さんのお話を聞く機会はあっただろうか。当日の長谷川

さんのお話が深く胸に響いただろうかって、ふと考えました…。僕は感染告知され服薬し、病の当事者になってようやく病と本気で向き合いました。それからの人生は遅まきながらも、向き合った病についていろんな人にも出会いました。いろんな所にも出かけました。

そうした時分に長谷川さんの存在を知りました。けれどもどういう人なのか知りませんでした。けれども知りたかったどういう人なのか。

長谷川さんのお話で印象的だったのが、（公助・互助・自助）というコトバとそのひとつひとつのコトバに込められた（人の輪に救われた）というお話。それに引越のこと。鬱のこと。ちょうど僕自身も鬱で通院をはじめたばかりでしたから、引越もしたばかりでしたから。

それと当日は僕の 49 歳の誕生日でもあったのですが、長谷川さんのお話はなによりの誕生日のココロの記念日になりました。深く胸に響いた長谷川さんのお話にあらためて思いました。生きててよかった。GAY でよかった。そう思いました。

第9回ピア＋トーク「恋愛とカミングアウトⅡ」（「ネスト・ニュースレター」2017年3月号掲載より）

■「告白のタイミング。」

にじ（感染告知：2016 年 / 服薬：2017 年 3 月から / 初参加）

昨年 12 月に陽性とわかって最初の 2 ヶ月がとても辛かった。ウイルスの事よりも付き合っている人との関係が真っ暗になってしまったから。

今回 PGM 以外でのプログラムに参加したのも付き合っている人との関係はどうなんだろと思って。どうやって関係を築きあっていけたのか、どうやって話したのか、話すタイミングは？、否定された時どうやって心を立て直したのか、告白する時吹聴される怖さはなかったのか。

今回 5 人の方がそれぞれの立場でその時の事を話してくれました。聞いて共通していたのは病気の知識を持つ、調べる、押し付けない、急かさない、ベストな告白のタイミングは…ない。という事。皆さんの話はどれもハッピーエンド。聞いていて嬉しい気持ちにとてもなったけど…、自分の場合がハッピーエンドとは言えないので反対の話もあると良かったな。もちろん考えさせられる事も参考になった事も沢山ありました。他の人の話が聞ける事は自分を冷静に見つめ直す大事な機会なんだなと思いました。こういった機会をつくってくれているぷれいす東京さんに感謝です。またプログラムに参加したいと思います。

年末パーティ参加者の感想文（「ぷれいす東京 Web サイト」2017年4月掲載より）

■「ぷれいす登録初年度＆年末パーティ」

ヒロ（初参加）

感染が判明後、同時に投薬を開始し、8 年間誰にも話さず、ある意味、殻に閉じこもった生活をして来ました。一歩前に進もうと思いぷれいすのミーティングに今年の中旬から定期的に参加させて頂いています。そして、年末パーティが開催される事を知り参加させて頂きました。パーティではいつも私が参加しているミーティングと異なるミーティングに参加されている方々が沢山いました。

パーティでは、食事 / ケーキ / 楽しいイベントで華やかなパーティでした。このようなイベント内容の創作から開催までして頂いたスタッフの皆さんに感謝です。パーティではグループ毎に簡単な自己紹介がありました。他の参加者の方の、この疾病による経験を聞けたことも貴重な経験となりました。また来年開催して頂けるなら、是非参加させてください。ありがとうございました。

1. スタッフ研修

バディ・スタッフとして活動するには、基礎研修を受けた上で部門の研修を修了することを条件としている。基礎研修は、HIV/AIDSに関する知識を身につけるとともに、自己のHIV/AIDSのイメージを認識すること、そして部門研修はバディとしての関わり方をどのようにもつか、自分自身でイメージしてもらうことを目的としている。基礎研修は、年に1度の各部門合同での「合同研修」にて、部門研修は「バディ・ワークショップ」にて行っている。

(1)基礎トレーニング

●合同研修

今年度は2016年9月18日、22日、25日の3日間で行なわれた。この研修は各部門合同であり、研修項目も共通したものとなっているが、バディ部門のみならず、ぷれいす東京の全体の活動とHIV感染症の関連領域も学び、幅広い視点と知識を得てもらうことを目的としている。（詳細は5ページを参照）

（実　績）

2016年度の研修の終了時点での活動希望者は9名となった。

(2)一日ワークショップ(8時間)

バディとして活動を始めようとする自分自身を見つめ直すこと、またクライエントがどのような状態にあるのか理解を深め、その上でバディの役割とは何か、クライエントとの関係性について、自分がバディとして何ができるか、等を考えてもらうことがこのワークショップの目的となっている。また、ワークショップの中では、実際の利用者に協力いただき、利用者の生活についてお話していただくなどしている。

（内　容）

・アイスブレーキング
・自分の最初の喪失について
・自分がバディだったら(仮想体験)
・HIV陽性者と語る
・喪失を体験するワークショップ
・分かち合いの時

（実　績）

2016年11月6日(日)に開催。8名が参加、修了してバディの登録を行なった。

2. スタッフ・ミーティング/交流会

●バディ活動スタッフのためのミーティング

活動中のスタッフを対象として、バディ・ミーティングを行っている。午前ミーティングは、奇数月/第1土曜日/11:00～、偶数月/第1木曜日/11:00～に開催、夜間ミーティングは第3木曜日の19:00～で開催した。なお木曜日の午前ミーティングについては参加者が少ないため、参加がある場合にのみの開催とした。

参加者は2～8名程度で、それぞれが担当しているクライエントとの関わりについて、担当者同士やコーディネーターと相談できたり、お互いにアドバイスしあえる場となっている。また、必要に応じて、個別にクライエントに関わる個別ミーティングやスーパーバイズも実施している。

また、不定期ではあるが、バディ同士の交流を目的とした交流会も開催している。

（実　績）

バディ・ミーティング	2016年度は19回（中止 5回）開催し、のべ71名が参加
個別ミーティング	2016年度は16回実施

3. 登録バディのフォローアップ・トレーニング

●フォローアップ研修

基礎トレーニングを終了したスタッフを対象とした研修となっており、待機中のバディに陽性者との関わりについてイメージする機会や、関係の深い問題について知識を得て、考える機会を提供している。

また、既にバディ活動を行っているスタッフが、自分とクライエントとの関係について、バディの役割について、客観的にとらえる機会になることを目的としている。

4. スタッフの構成(2017年4月末現在)

(1)性別

男　性	37人
女　性	24人
合　計	61人

(2)年齢

20歳代	4名
30歳代	9名
40歳代	32名
50歳代	11名
60歳代	3名
70歳代	2名

5. 2016年度バディ活動実績

(1) 派遣依頼

・前年度より活動を継続	17名
・活動休止中	6名
・新規依頼	4名
・再依頼	2名
合　計	29名

・バディ派遣終了		7名
派遣終了理由	死亡	2名
	ニーズの消失	5名

※2017年3月末現在の派遣状況

・活動休止中	7名
・派遣継続中	15名
合　計	22名

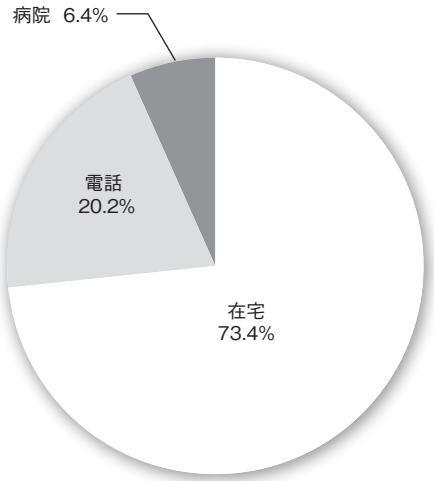
(2) 活動バディ・スタッフ

派遣依頼23名（休止中6名を除く）に対し52名のスタッフを派遣した。（利用者1名に対する実人数でカウント）

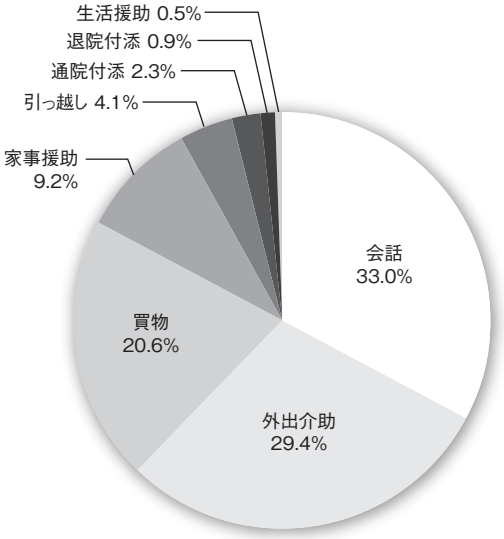
(3) 活動内容

今年度のバディ派遣件数は、スタッフの報告をまとめたところ218件であった。そのうち、在宅訪問は160件(73.4%)、病院への訪問は14件(6.4%)、電話によるコミュニケーション（訪問連絡等の電話は件数に含まず）は44件(20.2%)であり、今年度の総活動時間は約473時間となった。

主な活動先（n=218）



全体の内容別活動のまとめ（n=218）

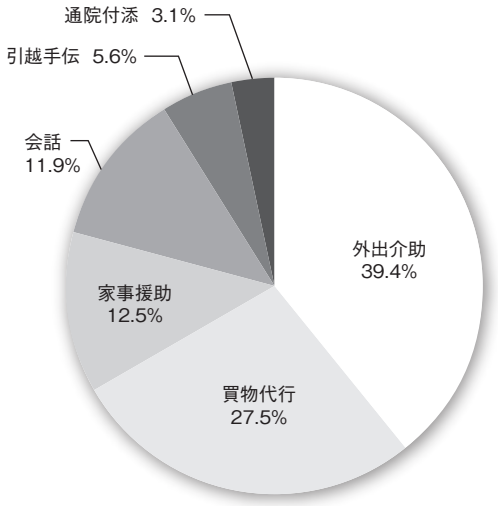


(4) 訪問先とサービス内容

●在宅訪問

在宅訪問での主な活動内容について、合計で160件の活動があった。内容別では、外出介助が一番多く63件(39.4%)であった。次いで買物代行が44件(27.5%)、家事援助が20件(12.5%)、会話が19件(11.9%)、引っ越し等の手伝いが9件(5.6%)、通院付添いが5件(3.1%)となった。外出介助は、車椅子利用者の買い物や外食、趣味での外出の同行や、視覚に障害がある方の通院や外出時の同行であった。買物代行は、自分で外出が困難な車椅子利用者からの依頼がほとんどであった。外出介助や買物代行、どちらの活動においても会話をしながら活動しているケースがほとんどであった。家事援助では、家の整理や清掃などの手伝いがあり、引越しでは、過去に利用があった方から、引越し前後の荷物の整理等での依頼があった。

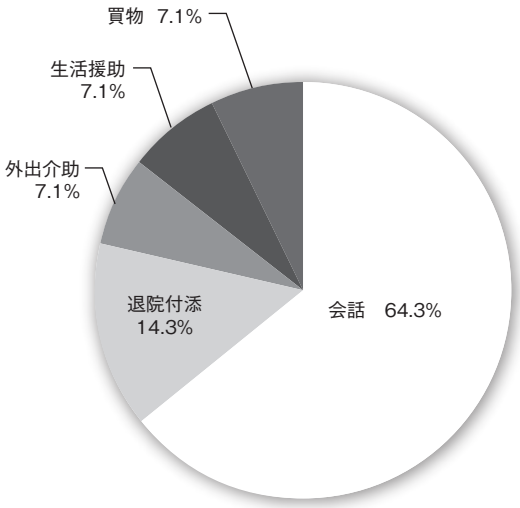
在宅での活動内容（n=160）



●入院先訪問

入院先訪問は、昨年度より減少し、合計で14件のみの活動となった。活動内容は、会話が9件(64.3%)、退院付添い2件(14.3%)、その他は外出介助、生活援助、買い物となった。生活援助は、入院中に部屋の荷物を取りに行くなどの活動となっていた。

病院での活動内容（n=14）



6. まとめ

●新規依頼と終了したケースの内容と傾向

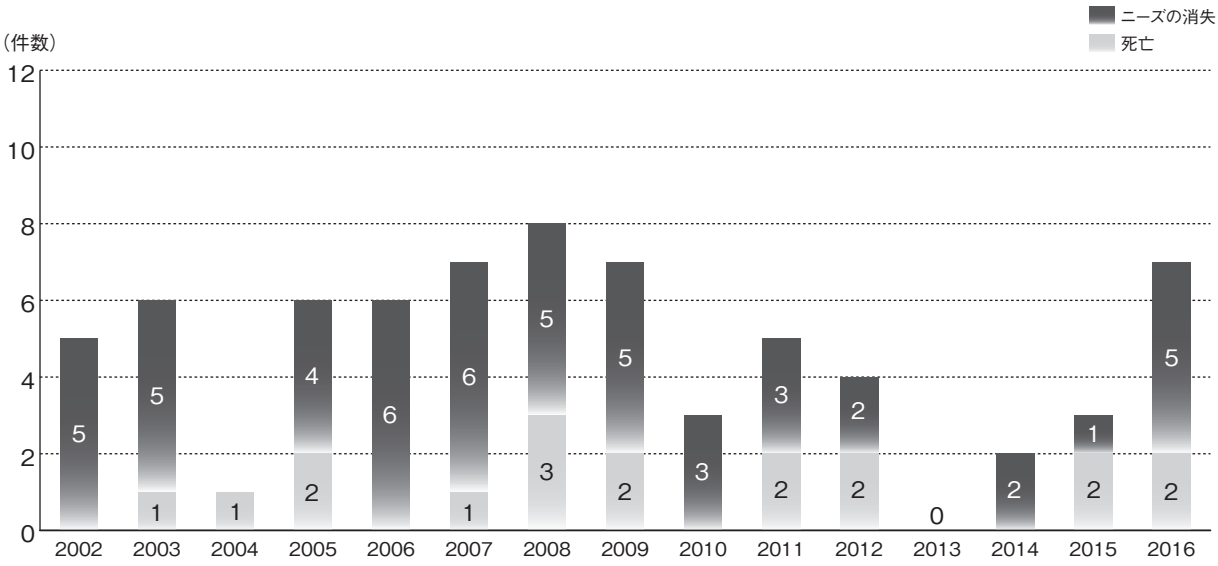
新規に依頼を受けた方は4名、以前利用したことのある方の再依頼は2名であった。新規の派遣内容は、家の片付け/引っ越しの準備等が2件、入院中の買い物や話し相手での支援が2件だった。再依頼は、服薬中断で入院になった方の話し相手が1件、家の片付け/引っ越しの準備等の家事援助が1件だった。今年度に新規依頼のあった4名については､単発での活動になり継続とはなっていない。

今年度は活動が終了となるケースが7件で、2件はクライエントの死亡による終了、5件はニーズの消失による終了であった。死亡されたケースについて、1件は、2001年より15年以上にわたり在宅での支援に関わったケースで、発症により半身に麻痺が残った方で、杖歩行のリハビリから車椅子での外出、寝たきりになっての買物代行まで、長年に渡って関わったケースであった。もう1件は、脳幹梗塞により麻痺が残った方で、自宅訪問からリハビリ入院中も継続して話し相手での活動をした方であった。なお、死亡された2件は、いずれもHIVの関連症状とは別の疾患で亡くなられていた。

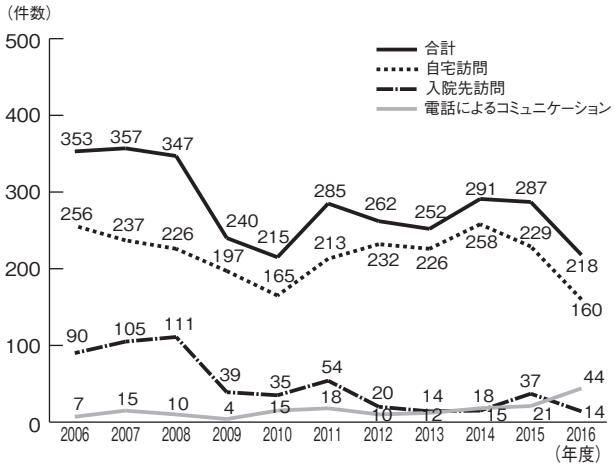
●派遣件数は減少、内容は変わらず

派遣件数は、昨年度より減少があった。減少の要因としては、身体に障害があり在宅生活している方の定期訪問が昨年度に続き今年度も終了したことが挙げられる。病院の訪問もリハビリでの長期入院の方がおらず、怪我による入院の方は、数回の訪問でまた在宅に戻られ在宅訪問に変更となった。今年度は、電話によるサポートが増えているが、これは発症により脳の機能に障害が残った方や、視覚に障害のある方が精神的に不安定になった時期に定期的な会話によるサポートを行ったことと、訪

活動の終了理由



年次活動件数の推移



問が休止している方に電話で近況を伺うなどのサポートを行ったためである。

●クライエントの傾向と関わり

クライエントの傾向は、身体に何らかの障害をもちつつ在宅で生活をしている方で、単身の中高年の男性が占める割合が変わらず高い傾向がみられる。ちなみに、継続派遣の 15 名中 13 名が男性の単身世帯である。また身体や精神に何らかの障がいのある方で、半身麻痺等による車椅子使用や杖歩行などの歩行困難が 10 名、視覚障害が 2 名、精神障害が 3 名となっている。

クライエントとの関わりは、長期的な派遣が多く、7 年以上の関わりを持っているケースは 14 名であった。うち 10 名は 10 年以上の関わりを持ち続けている。ちなみに、現在最長で訪問している方は 19 年目の活動になっている。

クライエントとの関わり期間

関わった期間	件数	うち継続
7年以上	14	12
5年以上7年未満	2	2
1年以上5年未満	9	8
1年未満	4	0
合計	29	22

7. 今後の活動にむけて

●外部サービスへの作用や連携

今年度も、行政機関からの紹介で利用につながるケースがあった。また、それ以外でも外来の看護師やカウンセラーからの相談が複数あった。実際に利用に至らなかったのだが、今後も医療機関やサービス機関と連携をとり、地域の支援の一助として活動を継続していきたいと考える。

●活動の継続性と体制づくり

活動の継続にあたって、現在の利用者のほとんどが、身体や精神になんらかの障害を持つ方になっており、活動において介護技術が求められるケースが多くなっている。また、今後も利用者の高齢化等などの様々な理由で機能低下も考えられる。バディはあくまでもボランティアとしての関わりであるが、利用者の安全と、関わるバディの安全を考えて、基礎的な介助の知識や技術を身につける機会も持つようにしたい。また、公的なサービスを利用している方で、公的なサービスで補えない部分を、今後もできる範囲で補い、利用者の生活支援、生活の質の向上につがなる活動を継続することができればと考える。

派遣するコーディネーターの立場として、活動時間が長くなる依頼も多いため、バディにとって負担を軽減できるような体制づくり、環境づくりをと考えるが、なかなかうまくいかないところもあり、そのたびにバディのその場の臨機応変な対応で助けられているところが多々ある。

継続課題として、スタッフの数が潤沢な状態ではなく、曜日や時間によっては利用者のニーズに十分に対応できない場合もあり、特に平日の日中の活動はなかなか難しい状況が続いている。様々なニーズに対応できるよう、今後もスタッフの確保にも励んでいきたい。

最後に、日頃から活動を続けていただいているバディ・スタッフの皆様、今年度も活動にご協力いただき、本当にありがとうございました。今年度も予期せぬことが多かったのですが、バディのみなさんに助けられ、活動を継続することができました。本当にありがとうございました。

バディ活動は、協力いただけるボランティアスタッフあっての活動です。コーディネーターとして、いつまでたっても力不足で申し訳ないのですが、今後もみなさんの力を借り、協力をいただきながら、バディ派遣の運営に努めていきたいと思います。今後ともご協力いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

（文責　バディ・コーディネーター　牧原 / 九岡）

部門報告（HIV 陽性者と周囲の人 / 確認検査待ちの人への相談サービス）

(1) ぷれいす東京　相談サービス報告

ぷれいす東京では、HIV 陽性者とその周囲の人へ、電話や対面、E-mail/fax などによる相談サービスを提供している。電話・対面による相談については、2009 年 4 月以降、厚生労働省の委託事業として、HIV 陽性者とそのパートナー、家族のための専用の相談電話「ポジティブライン」0120-02-8341（月～土 :13:00 ～ 19:00）と、プライバシーに配慮した個室で行う「対面相談サービス」（月～土 :12:00 ～ 19:00）を提供している。なお相談は原則匿名で行っている。

対応は、HIV に関する電話相談や直接的なケアを担当してきた相談員（社会福祉士 / 医師）、3 人が担当した。

今年度の 6 月から、ポジティブラインで陽性の相談員が対応する時間帯を新たに設けた。毎週木曜日 15:00 ～ 18:00 に、2 名の相談員が交替で担当している。この 2 名は、既に他の電話相談でも対応経験があり、昨年度からの研修を経た上で実務にあたっている。

また、ぷれいす東京の web サイトに「判定保留 / 確認検査待ちの人」に向けたページを作成し、5 月から情報発信を開始した。内容としては、「誰にも話せないどうしよう」「これからどうなるの」「結果が出るまでの過ごし方のコツ」などの不安や疑問に対し、検査の情報提供や、ぷれいすのサービスの案内、他の相談窓口の紹介などを行っている。ぜひ一度ご覧いただきたい。

＜相談員 J ＞

陽性者相談を始めた昨年 6 月以来、これまでに 50 名ほどの方と電話でお話をしてきました。まだ陽性者相談の時間帯が十分に周知されていないため、陽性者が相談に応じていることを告げると一瞬驚かれる方もいますが、初めて他の陽性者と話をすることができたと喜んでくださる方も多くいます。特に地方に住んでいる方にとって、他の陽性者と交流することはかなり難しいのが現状であると実感しています。相談にあたっては、その方が必要としている情報を正しく伝えることも大切だと考えていますが、陽性者としての自分の言葉で相手に語りかけ、相談者と会話を通じて繋がりを築くことが重要であると感じています。これからも力まずに相談者に寄り添えるコミュニケーションをとっていきたいと思っています。

＜陽性者として陽性者の相談を受けて / 相談員 S ＞

感染不安の電話相談を 15 年続けてきた経験を陽性者と家族のための相談に活かせることはとても嬉しいことです。基本的には相談者の言葉に耳を傾けるわけですが、感染がわかって間もない方や孤立している方の相談は言葉を選ぶことが難しいことがあります。HIV 陽性という同じ立場ですが、人それぞれ。考え方や感じ方は様々です。僕自身はゲイですが、時々そのことを突っ込まれることもあり、どこまで話そうかと思案します。そういう意味では面と向かって話しているより、気を遣います。けれどあまりにも距離を置きすぎると同じ立場の人間が受けている意味がないようにも思います。「陽性者の人と話ができて良かった」と言われると、相談をしている甲斐があります。少しでも力になれるよう精進します。

「判定保留 / 確認検査待ちの人へ」
http://ptokyo.org/consult/pending_results

■相談／連絡期間

2016 年 4 月 1 日～ 2017 年 3 月 31 日

■相談／連絡件数

	陽性者相談員対応
電話による相談	1441 件（うち 107 件）
対面による相談	644 件
書簡による相談	15 件
合計	2100 件

■相談者の背景

▼電話相談と対面相談の合計（書簡は除く）
のべ合計 2085 件（男：1881 、女：204）

HIV 陽性者	1782 件（1737:45）
パートナー / 配偶者	71 件（38:33）
家族	66 件（15:51）
専門家	84 件（46:38）
その他	40 件（17:23）
確認検査待ち/判定保留	42 件（28:14）

「家族」の内訳（66）

母親（35）、きょうだい（18）、父親（8）、家族（3）、子供（1）、養父（1）

「専門家」の内訳（84）

医療機関（23）、HIV 関連地域団体（15）、保健所（9）、
就労関連（8）、福祉関連（5）、
その他（24：弁護士〈17〉、ダルク職員〈3〉、教会関係〈2〉、検事〈1〉、他 NPO〈1〉）

「その他」の内訳（40）

友人 / 知人（13）、判定保留者の〈母親（5）、
パートナー / 配偶者 / きょうだい（4）〉、
判定保留で後に陰性（3）、性的関係のあった人（1）、
元パートナー（1）、同居人（1）、バーのママ（1）、
感染不安とおぼしき方（10）、不明（1）

■相談者の年代　（n=2085）

10 代	3 件
20 代	88 件
30 代	401 件
40 代	646 件
50 代	317 件
60 代	257 件
70 代以上	6 件
不明	367 件

■ 新規相談（電話・対面）のまとめ（n=339）

属性		
HIV 陽性者	214	(204: 10)
パートナー / 配偶者	30	(19: 11)
家族	20	(9: 11)
専門家	23	(9: 14)
その他 / 不明	22	(11: 11)
確認検査待ち / 判定保留	30	(21: 9)

当該年度における新規相談は昨年度（264 件）より増加がみられた。今年度も HIV 陽性者からの相談が多く、全体の 6 割ほどを占めていた。パートナー / 配偶者では、同性のパートナーからの相談が多かった。家族は、きょうだい（7）、母親（6）、父親（7）から相談があった。専門家の背景は、医療機関（9）、就労関連（4）、弁護士（4）、福祉関連（3）、教会関係（1）、他 NPO（1）、地域団体（1）であった。具体的には、医療機関は MSW からの相談や連絡が多く、就労関連は企業の人事担当者から、弁護士は薬物で留置された方の代理連絡、福祉関連では福祉事務所のケースワーカーの相談などがみられた。その他は、友人 / 知人（10）、確認検査待ちの親 / 配偶者 / パートナー（5）、性的関係があった人（1）、同居人（1）、バーのママ（1）、感染不安とおぼしき方（4）であった。

確認検査待ち / 判定保留に関して、web での広報もあり、昨年度より 10 件ほどの増加がみられた。相談者のセクシュアリティはゲイ男性が多いのだが、異性愛の男性からも相談があった。女性は、外国人の方、同性パートナーが陽性の方、セックスワークをしている方などから相談があった。相談者の多くは、陽性の結果を受け取る予測をしておらず、かなり混乱した様子で連絡してきていた。混乱の要因には、検査を受けた場所での情報提供不足、インターネットの調べ過ぎによる情報過多、という両面が拍車をかけているように感じられた。

居住地 / 発信地	
関東	254
近畿	25
九州 / 沖縄	17
東海	13
甲信越 / 北陸	10
中国 / 四国	10
北海道 / 東北	6
海外	4

相談者の居住地 / 発信地は、関東地方が多く全体の 76% ほどを占めているが、その他の地域からも相談がよせられていた。

情報提供者	
情報・ネットワーク（ネット・冊子等）	172
医療や行政などの専門家	67
人的ネットワーク（他陽性者・家族等）	34
地域のネットワーク（電話相談・団体）	23
その他	18
不明	25

相談をするきっかけとなった情報源としては、インターネットや冊子などをもとに、相談者が自ら情報を集め、連絡を取った方が半数を占めていた。一方、医療や行政の専門家から紹介を受けた者はほぼ2割で、他の陽性者や家族などの個人的なネットワークから勧められてきた方が続いた。

検査を受けた機関（n=147）	
病院（外来）	52
保健所 / 検査所	37
病院（入院）	36
献血	7
郵送検査	3
イベント検査	1
その他	6
不明	5

検査のきっかけ（n=147）	
自発的（症状あり）	40
自発的（症状なし）	29
HIV 関連の症状（医師の勧め）	29
その他の症状（医師の勧め）	20
献血	7
術前検査	5
性的接触があった人からの通知	3
その他	14

新規に相談があったHIV陽性者において、どのような経緯でHIV感染を知ったか、どこで検査を受けたかをまとめた。ただし、相談の中で聞き取れた範囲内でのことで、対象となるHIV陽性者214人中、147人の傾向である。

HIV検査が導入された状況は、医療機関の外来 / 入院など、医療機関での判明が88件でほぼ6割を占めていた。保健所 / 検査所での判明は2割強、その他に献血、郵送検査、イベント検査での判明もあった。

検査を受けたきっかけは、自発的な検査（症状のあり / なしを含む）によるものが69件､医師の勧めが49件であり、前者は少なくとも自らHIV感染の可能性を考えての検査であり、後者にはいわゆる「いきなりエイズ」が含まれていることになる。数は少ないが、献血、性的接触があった人の通知、術前検査での判明などもみられた。

■電話 / 対面相談によせられた内容項目

HIV陽性者からの相談について、相談記録をもとに内容を1～9の項目に分類し、詳細をまとめた。複数の項目に該当する相談内容であった場合は、それぞれの項目に含めて集計している。

周囲の人の相談、専門家からの相談や連携については、それぞれの属性で内容をまとめた。

1　検査や告知に関する相談……92
2　告知直後の漠然とした不安……136
3　対人関係に関する相談……386
4-1　生活に関する相談……787
4-2　制度に関する相談……324
5　心理や精神に関する相談……1079
6　病気や病態の変化や服薬……226
7　医療体制や受診に関する相談……179
8　医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス……34
9　連絡等のコミュニケーション……817

▼ 周囲の人からの相談……175
▼ 専門家（外部）からの相談や連携……133

1　検査や告知に関する相談：92

1　検査や告知に関する相談	
判定保留時の不安や対応	48
告知の状況	29
検査機関の対応	11
検査の信憑性	1
その他	3

今年度5月から、ぷれいす東京のホームページ上で判定保留 / 確認検査待ちの人へ向けた情報発信を開始したが、その効果も含めて相談件数の増加を認めた項目である。よって今回、その内容の分析をやや詳細に行った。

相談は検査結果を通知された直後が多く、判定保留（スクリーニング陽性）で確認検査待ちの状態、確定結果を受けての相談などがよせられた。医療行為としての検査は、手術や検査に伴う術前検査、体調不良時の原因究明、梅毒やB/C型肝炎、肺炎などの関連疾患があり医師から提案された検査、妊婦健診などがあった。また、自主的に検査を受けたきっかけには、思いたる行為があって、パートナーの陽性判明、付き合う人ができて、たまたま郵送検査を手に入れて、などであった。

具体的な場面としては、以下のような状況があった。

「肛門にコンジローマがみつかり、HIV感染の可能性を指摘された。」「痔の手術前の検査で判明。」「梅毒と診断され、検査を受けたら陽性だった。」「開業医で気管支炎と言われ、一時的に回復したが再度肺炎になり、大病院に入院して陽性判明。」「急性B型肝炎だと診断され、同時にHIVも陽性

だった。」「精神科に入院中、統合失調症とHIV陽性であることが同時にわかった。」「胃カメラの術前検査で陽性がわかった。」「パートナーの妊娠健診で性感染症がみつかり、自分も検査を受けたらHIV感染がわかった。」「子宮筋腫の術前検査で判明した。」

告知の際に医師から、「ギ陽性です。HIV陽性の可能性があります。」と結果を伝えられても、その「ギ」が「疑」なのか「偽」なのかわからず、混乱した中で相談されてくる方が多かった。さらに、個人側の要因として、メンタルの不安定さ、妊活中、転職中で経済的に不安定など、様々な状況がより混乱を大きなものにしている印象があった。

「迅速検査でうっすら線がでています。女性の場合は確認したら陰性の可能性もありますけども、とりあえずは確認検査をします。」と告げられ、結果を待つまでの期間に、迅速検査の精度、診断方法、数値の見方などを相談する者もあれば、強いストレス負荷でメンタル状態のバランスを崩す人もあった。

相談員の対応としては、検査結果の意味を伝え、確認結果が出るまでと、出た後をどのように過ごしたらいいのかアドバイスしている。インターネットを閲覧する際には、ややネガティブな方向に全体のイメージが偏っている場合があることを伝えている。また、周囲への相談については慎重に、どのタイミングで伝えるのかを一緒に考えるスタンスをとっている。

判定保留の相談は、医療の場で導入された検査によるものが多いが、人間関係がもとになった相談もみられた。特定の相手との性行為による不安がよせられ、男性同士の相談が多いものの、男女間の相談に加えて、女性同士、トランスジェンダーを含む相談もあった。また、「人工授精で子作りをしている最中に自分の感染がわかった。」など妊活中に感染が判明した事例の相談や、一般の風俗の利用、ニューハーフの風俗の利用者などからも相談がよせられていた。また、医療従事者からの針刺事故後の相談などもよせられた。判定保留で結果が陰性であった人のなかには、「今回のことで、元々偏見はなかったが、HIV陽性の方々に対する考え方が変わりました。」と語る人もいた。

2　告知直後の漠然とした不安：136

2　告知直後の漠然とした不安	
漠然とした不安や混乱	61
身体状況に関する不安	35
生活のイメージ	19
プライバシー不安	9
他陽性者との交流	8
その他	4

当項目は、原則告知後3ケ月以内の方を対象にしている。相談のタイミングは、通院前、最初の検査結果を聞くまで、初回の検査数値が思ったより低かった場合など、治療が始まる前に漠然とした不安に襲われての相談が多くみられた。加えて、そうした情報を十分に判断できない時期に、ネット上の情報を見すぎて、最悪の状況になるのではないかと、より不安が強くなる方もみられた。相談者の中には、様々な理由で医療機関に通院できていない者、海外から留学中、地方在住で人間関係が狭いなどといった方がおり、個別の状況がより不安を強める要因になっている場合もあった。

3　対人関係に関する相談：386

3　対人関係に関する相談	
相手との関係性	174
トラブル	61
性に関する相談 （sex やセクシュアリティ、セイファーセックス）	46
HIV の通知	36
恋愛	24
結婚や離婚、子づくりなど	15
検査（受検勧奨等）	3
プライバシー	2
その他	25

相談の対象者	
パートナー / 配偶者	108
周囲	58
家族	47
友人 / 知人	30
会社	26
性的関係のあった人	23
元パートナー	15
他陽性者	11
行政	5
NGO スタッフ	2
その他	18

陽性判明直後にパートナー / 配偶者がいる場合には、相手への通知について、どのように伝えるのか、いつ伝えるのかを思いなやむ人が多い。カミングアウトする場合には、HIV陽性であることだけでなく、感染経路をどう伝えるかなど、その内容について一緒に考えたりする。また、予想される相手の反応とその対応についても検討し、相手が希望した場合の検査サービスなどを考えておくことも多い。特に、子作り（人工授精含む）、その他リスクのある性的コミュニケーションがあった場合には、相手の結果が出た後のフォロー体制などについても想定し話している。

人間関係を広げるための恋愛や結婚などの文脈では、HIV感染をどのようなタイミングで、どう伝えるのかという相談が多い。カミングアウトしていないセックスの相手から、生で挿入してくれ（させてくれ）と言ってきた場合の対処方法などについても、相談がよせられていた。当然のことながら、女性の中には結婚を目指して活動している

人たちもいる。女性が陽性であった場合、男性に沸き起こる感情（時に怒り）を聞き続けることもあった。また、子供がいる場合には、その成長に伴う影響なども一緒に考えたりしている。

男性同士のカップルからの相談が最も多いが、女性同士からの相談もよせられた。また、自分や相手がトランスジェンダーであったり、ゲイだと思っていた相手がバイセクシュアルで、女性とも付き合っていたなど、セクシュアリティも多様であった。

パートナー（自分）が薬物使用で逮捕された後のカップルの関係性についてや、パートナー間でのDVの存在、元彼からの恐喝まがいの行為など、二人だけでの解決は難しく、専門家の支援が必要な相談もよせられた。HIV陽性の外国人男性の相談で、日本人女性との結婚や離婚、ビザの取得などについての相談もよせられたが、必要に応じて専門家の紹介を行った。HIV陽性者がパートナーの介護をしていたり、発症状態のピンチをパートナーが支えてくれて絆が強くなったなど、介護に関する相談もよせられていた。

周囲の人間関係に関する相談もよせられ、ゲイバーやハッテン場、入所施設や自助グループのこと、職場や近隣での人間関係などの相談があった。

恋愛とカミングアウトについて、他の人はどうしているの？という相談が多いことから、ネストプログラムにて「恋愛とカミングアウト」をテーマにしたプログラムを行っている。

4-1 生活に関する相談：787

4-1　生活に関する相談	
就労 / 就学	380
住宅問題 / ホームレス（野宿生活）	114
外国人	84
経済的な問題	66
法律問題	57
海外渡航（留学）/ 海外からの帰国	27
生命保険	20
医療費	9
健康診断	8
その他	22

昨年は就労が全体の6割であったが、今年度は5割に低下していた。これは、障害者のための就労支援機関が急増したこと、民間のエージェントやハローワーク経由で入職する人が増えたことなどが影響しているかと思われる。ぷれいす東京では、この相談事業に加えて、ネストプロフラムにおけるグループ活動を通して、就職活動を続けるための意欲の維持、心理的な支援などを行っている。

相談者の中には、メンタル面の不安定さ、コミュニケーションの課題、発達障害的な傾向を持つ人たちがいる。そうした背景が影響してか、安定した雇用が得られない場合もあり、そうした事例では、アサーティブトレーニング、しごとセンターの適正診断、就労移行事業、就労継続支援事業などの社会資源の利用を勧めている。資格の取得や訓練などのスキルアップに関する相談や、2018年からの契約社員に関する法改定への不安の声がよせられていた。その他、職場の健康保険、健康診断などのプライバシー不安、長期ブランクから常用雇用にむけての就職活動、発症で判明後の復職の相談、職場復帰時の産業医との面談、通院のための有給取得の困難さ、障害者枠での就労など、多様な相談がよせられた。

住宅に関する相談では、生活保護世帯の劣悪な住環境、隣人トラブル、離婚などでの引越し、身体状況の変化に応じた福祉施設への入所などがあった。解雇され社宅を追われた等、住居を失った方からの相談もあった。なお、生活保護受給からの就労、自立に関する相談も多数よせられていた。法務省施設などからの出所者、触法系の相談者の住居に関する相談も複数よせられた。薬物使用者の回復施設からの退寮や、他地域への移住などについての相談もあった。

法律問題として、看護師が陽性という事実を把握した雇用側が、就労を制限、退職を促すなどした問題事例では、弁護士相談を提案した。看護学生、福祉職などからは、専門職として就労してもいいものかと言う相談が複数よせられている。

また、在日外国人からの相談では、感染が判明した後の滞在資格に関する相談があり、日本滞在の継続か、帰国するかの相談がよせられた。なかには、ゲイカップルで日本人パートナーと日本で生活したいが、ビザの問題から国外退去を命じられた方もあった。また、来日予定の外国人からは、来日後の治療の継続性、障害手帳の取得などに関する相談がメールなどでよせられたが、その件数はここには反映されていない。相談者の国籍は、アジア系が多く、他に南米、アフリカ、欧米など多様であった。

海外への転勤、駐在の可能性のある日本人からは、現地のビザの要件に制限があるかどうかの相談があった。また、海外から日本へ帰国するにあたっての相談もあった。

経済的な問題においては、借金問題の悪化や、給料の未払い、債務整理、自己破産など、必要に応じて弁護士の紹介を行った。

4-2 制度に関する相談：324

4-2　制度に関する相談	
障害者の制度利用 （手帳取得、自立支援、重度医療、障害者控除、施設入所）	126
生活保護	85
健康保険（高額療養、傷病手当、付加給付、後期高齢者医療）	29
障害者雇用	25
サービス利用時の対応	15
ビザ	14
障害年金	9
プライバシー	6
失業給付	1
その他	14

制度に関する相談は、昨年より若干の増加があったが、相談の内容としては、昨年と同様の傾向であった。

障害者の制度利用においては、手帳取得時や転職時のプライバシー不安、転居や転院時に何か手続きが必要かといった相談や、就労継続支援事業に関する相談があった。生活保護の相談では、受給中の転居や就労についてや、生活保護の申請についての相談があった。健康保険では、転職前後の健康保険の変更に伴うプライバシー不安の相談などがあった。サービス利用時の対応やプライバシー不安に関する相談は、地方の方から多くよせられていた。障害者雇用では、障害者枠での就労の状況、メリットやデメリットに関する相談があった。外国人の方からは、ビザや健康保険、障害者手帳の取得に関する相談があり、日本人からも海外渡航時のビザに関する相談があった。

5　心理や精神に関する相談：1079

5　心理や精神に関する相談	
精神疾患（抑うつ障害、適応障害、統合失調症、その他）に関する相談	653
薬物依存	180
精神的な不安定さ	58
精神科の受療に関する状況	57
人間関係の閉塞感	30
ストレス	29
その他の依存傾向（アルコール、セックス、ギャンブル、対人、その他）	27
HIV の受容	18
自殺念慮	11
セクシュアリティの受容	10
その他	6

相談内容の項目のうち、今年度も最多の相談件数となった。このうち「精神疾患」に関しては本人より申告があった場合のみを集計しており、抑うつ障害、適応障害、統合失調症などを持つ方から、治療を継続する中での疾患との付き合い方、バランスを取るための相談が定期的によせられていた。なかには、精神状態が悪くなると相談頻度が高くなる方もあり、件数が増える傾向があった。薬物依存の問題を持つ方からの相談も多く、定期的に対面相談を利用しつつ、就労や人間関係を相談する方もあれば、逮捕後に弁護士を通じて連絡がある方、服役中に書簡で出所後の相談をされる方もあった。HIV、精神疾患、薬物問題、セクシュアリティにおいて共通する問題点として、周囲への情報開示が難しく、一人で抱え込みやすいため、孤立しやすくなり、それが治療や精神状態に悪影響を及ぼすことがあげられる。そうした状況で、安心して自分の情報を開示でき、話せる場が存在すること、継続的な支援を受ける機会が得られることが、本人の相談サービス利用の動機につながり、精神的な安定やバランスの維持に役立っているのではないかと考える。

6　病気や病態の変化や服薬：226

6　病気や病態の変化や服薬	
その他の疾患	87
CD4 の変化	37
服薬の継続	27
HIV の関連症状	16
副作用	16
入院中の病態	11
投薬前の不安	6
その他	26

昨年度より 50 件ほど減少した項目となった。内容としては、「その他の疾患」に関する相談が多くみられた。具体的な疾患としては、本人の申告に基づくが、以下のようなものであった。

その他の疾患（順不同）～
骨折、アメーバ赤痢、B 型 /C 型肝炎、心筋梗塞、尖圭コンジローマ、アナフィラクトイド紫斑病、梅毒、椎間板狭窄 / ヘルニア、脳梗塞、皮膚疾患、肺気腫、花粉症などのアレルギー症状、膵癌、甲状線癌、更年期障害、口唇ヘルペス、突発性難聴、原因不明の体調不良、咽頭炎、その他

CD4 の変化では、発症で判明し回復が思うようにいかない方から、回復への焦燥感や先行きの不安感に関する相談があった。また、服薬の長期化による飲み疲れの相談もあったが、精神疾患を併せもつ方からが多い印象だった。

副作用に関する相談は、以前に比べると減ってきているのだが、服薬開始直後や薬の変更直後に起こった症状に対する不安や対処法についてや、長期内服による中性脂肪値の上昇などの相談があった。

HIV の関連症状としては、以下のものがみられた。

HIV の関連症状（順不同）～
サイトメガロ網膜症、ニューモシスチス肺炎、悪性リンパ腫と後遺症、進行性多発性白質脳症、結核

7　医療体制や受診に関する相談：179

7　医療体制や受診に関する相談	
医療・検査機関の選択	67
医療従事者とのコミュニケーション	49
他科受診	25
歯科受診	20
セカンドオピニオン	4
通院や服薬の中断・拒否	1
その他	13

医療・検査機関の選択では、告知直後の通院前に医療機関に関する情報が欲しい、通院中の病院で大丈夫かといった相談もあれば、医師との関係性が思わしくないため転院したい、他の疾病の兼ね合いで医療機関をまとめたい、仕事の休みがとりにくいので平日診察できる医療機関に転院したい、といったそれぞれの事情にあわせた医療機関の選択に関する相談があった。医療従事者とのコミュニケーションでは、告知後の経過などから医療に不信感を持つものからの相談や、主治医や看護師などの医療従事者との相性の問題、他科担当者の対応への不満などの相談がみられた。他科受診、歯科受診においては、かかりつけ以外の医療機関の受診時にHIVの通知をすべきか、医療機関を通じて紹介してもらうべきか、といった相談があり、陽性者が他科、他医療機関を受診する際の、病名通知の難しさや診療拒否への不安があるように思われた。

8　医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス：34

8　医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス	
地域の支援団体	7
ぷれいす東京のサービスの問い合わせ	6
他陽性者との交流	6
その他の機関・リソースの利用	5
外国の情報（ビザ、医療機関、医療状況）	3
その他	7

地域の支援団体について、地方在住の方から近隣に支援団体がないかといった相談、また、あわせて他の陽性者と交流できる機会がないか、といった相談が増えていた。ここ数年、ネットを通じた交流や、各地で陽性者交流会が立ち上がっているのだが、まだまだ地方で他陽性者と顔をあわせて交流できる場は限られている。ぷれいす東京のサービスの問い合わせでは、バディ派遣の相談や、そもそもどういった団体で何をしているのかといった質問などがあった。その他、多言語で相談ができる窓口の問い合わせや、外国の支援団体に関する相談もあり、情報提供を行った。

9　連絡等のコミュニケーション：817

9　連絡等のコミュニケーション	
近況報告	409
ネストプログラムの利用	124
利用登録	98
面談の調整	53
積極的な協力・参加	12
その他	121

今年度も件数が多い項目になっており、昨年度より180件程の増加があった。要因としては、直接HIVとは関係のない話題で頻回に連絡されてくる方が複数あったことと、ネストプログラムの利用に関する連絡や利用登録が増えていたことがあげられる。頻回な相談になる方の傾向としては、精神疾患や精神の不安定さを併せ持つ方が多く、なんらかのきっかけで状態が悪くなると相談回数が多くなる印象であった。また、それ以外にも、通院後など定期的に連絡をし、自分の状況を報告しつつ、通院で得られた情報を相談員と整理することを習慣化している方も存在している。

今年度も、ネストプログラムの多種多様なミーティングや勉強会に、多くの方が興味を示され、問い合わせや連絡をいただいた。また、プログラム参加前の利用登録の一部を電話で行う場合もあった。

▼ 周囲の人からの相談：366

- パートナー/配偶者　：67件
- 家族　：66件（母親(35)、きょうだい(18)、父親(8)、家族(3)、子供(1)、養父(1)）
- 友人/知人　：12件
- 元パートナー　：3件
- その他/不明　：26件

※その他はP48の相談者の属性の内訳を参照

(3) 対人関係に関する相談	125
(5) 心理や精神に関する相談	43
(4) -1 生活に関する相談	37
(2) 通知を受けた直後の漠然とした相談	36
(9) 連絡等のコミュニケーション	34
(6) 病気や病態の変化や服薬	25
(1) 検査や告知に関する相談	24
(4) -2 制度に関する相談	18
(7) 医療体制や受診に関する相談	17
(8) 支援機関・リソースへのアクセス	4
その他	3

まず、周囲の人からの相談は、地方から多くよせられる傾向にあり、陽性者を身近に感じていない分、陽性と知らされた後の混乱も大きいようだった。さらに、自分の感染の有無を調べるにも、周囲に話せる場がないため、本相談サービスを継続して利用する相談者もいる。

パートナー/配偶者からの相談は、男女の相談がほぼ同じ割合であった。そのうち男性同士のカップルのパートナーからの相談が最も多いが、男女カップルからの相談もかなりの数を占めた。また、今年度は女性同士のカップルからの相談もあった。パートナーから陽性だと告げられ、その事実を受け止めるための情報提供、感情の整理などをお手伝いしている。

夫との関係性、性的なコミュニケーションについての相談も多くよせられた。結婚の継続、離婚、子供がいる場合には子への影響について、また、夫の感染経路について思い悩むという相談があった。さらに、夫の感染が判明した後の共同生活のなかでも、夫の浮気、DV、夫が男性とセックスをしていたことがわかったなど、夫婦の関係性につい

ての相談がよせられた。

パートナーをエイズ発症で亡くした男女からも相談が複数よせられた。死の原因について語れる場がない様子であった。また、男性の陽性パートナーが原因不明で亡くなり、警察での検死の後、男性のパートナーのもとには遺体を戻せないと言われて、無念な思いをしたという事例もあった。

また、異性愛男性で、女性陽性者とつきあっている方からの相談も複数よせられた。パートナーから陽性だと告げられ、最初はびっくりしたけど、体調の方が心配だったという方や、子作りについての相談も聞かれた。

ゲイ男性からの相談では、以前、陽性者と付き合ったときにフェードアウトしたことがあって、今回はちゃんと向きあおうと思っているとか、パートナーが警察に薬物使用で逮捕され、そこではじめて陽性だと知った、パートナーが脳症で今も入院中だが病院の処遇に疑問がある、などの相談がよせられた。

家族からの相談では、HIV陽性の家族についての相談として、父親、母親、きょうだいからの相談がよせられた。母親からは、息子の体液の感染性についての相談や、息子が肺炎予防薬の副作用で苦しんでいるのをみるのが忍びないといった相談があった。また、きょうだいからの相談では、複数の方からPMLで入院中との相談があった。

さらに、HIV陽性の息子が薬物使用で逮捕された母親や姉からの相談が複数よせられた。

寝たきりの陽性の家族がいて、在宅サービスは目一杯つかっているのだが、他に民間のサポートはないだろうかという相談や、母親が心理的にまいっているといった介護の相談も聞かれた。息子の病気を家族でどこまで共有するべきかなど、地域のリソースがなかなか利用しづらい現状のなかでの相談もよせられた。

▼ 専門家（外部）からの相談や連携：133

専門家の属性	
医療機関	23
地域団体	15
保健所等	9
就労関連	7
福祉関連	6
その他	24

弁護士（17）、MSW（16）、NPO/NGO（11）、
ダルク・スタッフ等（7）、看護師（5）、保健師（5）、企業（4）、
行政/生活保護（3）、就労継続/移行支援（3）、シスター（3）、
医師（2）、カウンセラー（2）、県庁/都庁（2）、
行政/就労支援（1）、行政/障害福祉（1）、地方検察庁（1）、
更生保護施設（1）

(9) 連絡等のコミュニケーション	59
(4) -1 生活に関する相談	24
(3) 対人関係に関する相談	18
(4) -2 制度に関する相談	11
(8) 支援機関・リソースへのアクセス	10
(7) 医療体制や受診に関する相談	6
(5) 心理や精神に関する相談	4
(6) 病気や病態の変化や服薬	1

この1年に連携した機関や専門職は、薬物使用者の逮捕や社会復帰に関連した連携が最も多かった。その他、企業とのHIV陽性者の障害者雇用に関するもの、地域における介護領域での受け入れに関する相談などがあった。なお、専門家とのやり取りにはメールが多用されるため、ここには反映されていない。

■1年を振り返って

今年度は、昨年度より全体の件数は約100件の増加があり、対面相談は減少、電話相談は増加がみられた。対面相談の減少は、相談員が対応できる時間が限られていること、電話相談の増加は、昨年と比べて精神状態の悪化による頻回な相談者があったことがあげられる。

相談者の属性や相談内容について、属性は、HIV陽性者が8割強を占めており、その他では、専門家と判定保留/確認検査待ちの方からの相談の増加がみられた。相談のなかで触れられたセクシュアリティについては、ゲイ男性が多いなか、異性愛男女、レズビアン、トランスジェンダーなど多様さを認め、その割合も増加傾向にあるようだ。

専門家のなかでは、病院のソーシャルワーカーや弁護士の相談が多く、ソーシャルワーカーからは生命保険や外国人、退院後の支援などの相談があった。弁護士からは薬物問題を持つ方や、外国人の方で在留資格に問題を持つ方など、継続的な支援が必要なケースでの連携が増えていた。なかには、薬物使用経験のある相談者が再使用で逮捕され、弁護士を通じて面会や公判の支援に出かけるケース、在留資格の問題で入国管理局に同行するケースなどもあった。また、服役中の方との書簡を通じた情報提供、社会復帰に向けた支援など、これまでにない関わり方も増えており、チームを組んで対応できるように体制づくりをすすめている。

判定保留/確認検査待ちの方からの相談は、web等の広報の強化を受けて増加していると考えられるが、女性や異性愛の男性で、陽性の可能性を想定せずに医療機関で検査を受け、かなり混乱した様子で相談してきた方が少なくなかった。元々のHIVに関する情報の少なさ、イメージの悪さもあるが、それに加えて検査を受けた機関からの情報提供が不足しがちで、それを補うべくネットで情報検索をしたものの、ネガティブな情報に触れて余計に混乱したという状況が想像された。今後も、一般医療機関での検査、郵送検査（HIVチェックを含む）など、様々な検査機会が増え

るなか、確認検査の結果を待つ期間や、専門医療機関につながるまでの心理的な支援や情報提供など、その重要性は増す傾向にあり、より適切な対応が広がるように努力していきたい。

HIV陽性者の相談内容としては、さまざまな困難さを持つ方からの相談が多かったように思う。

精神疾患や薬物依存を持つ方の相談では、HIVは安定しているものの、精神状態に波があり、調子があまり良くない時に、就労継続の困難さや、経済的な問題が発生することもあった。対面相談・電話相談においては、精神状態の安定を図るために定期的に相談しバランスをとり就労を継続していこうとする方、薬物の再使用を避けようとする方、引きこもりがちの方が孤立しないよう、社会との関わりを継続する意味で相談を利用するなど、それぞれが自立して生活していこうと努力する姿勢が見えた気がする。

外国人からの相談として、日本に留学や就労で来日する前後での服薬継続、手帳の取得などの相談があり、医療機関やシェア＝国際保健協力市民の会、任意団体CRIATIVOS-projeto Saude（保健プロジェクト）やCHARMなどのNPO/NGOと連携しながら対応する事例もあった。また相談から派生したミーティングとして、中国語を話す陽性者のミーティングを立ち上げているところである。

今年度も、精神疾患/薬物問題を持つ方、判定保留/確認検査待ちの方、外国人の方など、さまざまな問題や困難さを持つ方からの相談があり、医療機関や行政、当事者団体など、多様な地域の支援者とつながり対応をしてきた。今後もこうしたつながりを通じて、地域にHIV陽性者の支援の輪が広がっていくことに貢献できればと考える。また、今年度の新たな活動として、陽性者相談員の電話対応を開始し、手紙のプロジェクトを立ち上げ、判定保留/確認検査待ちの方に向けた広報を充実させた。以前からの懸案事項に、少しずつではあるが対応してきている。今後も相談の中で生まれてくる様々なニーズに対して、自分たちにできることを考え、ぷれいす東京として支援していきたいと思う。

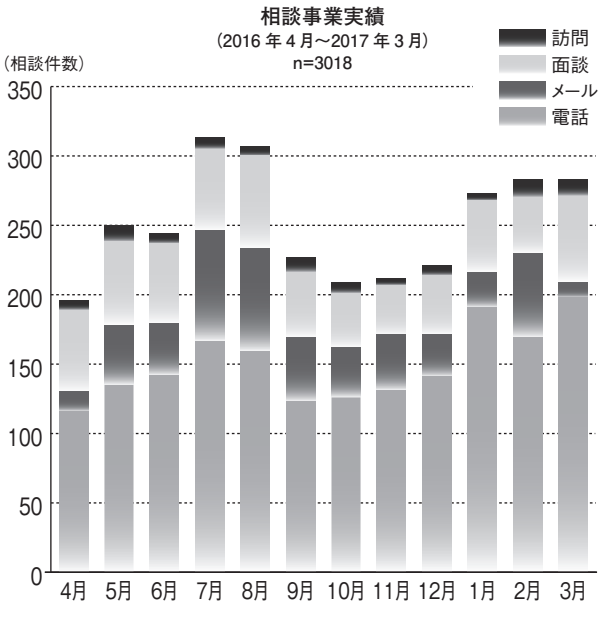
最後に、HIV陽性者の支援を通じて知り得た当事者の声を社会に届け、HIV陽性者が生きやすい環境作りを、陽性者の力も借りながら、ともに築いていくことができればと考える。

（文責：牧原/生島/福原）

(2) HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業

本事業は厚生労働省による事業受託として8年目に入った。今年度もSHARE（特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会）、任意団体CRIATIVOS-projeto Saude（保健プロジェクト）とぷれいす東京の3団体にて運営を行った。「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業（ピア・カウンセリング等による支援事業）」は、HIV陽性者（エイズ患者を含む）やパートナー、家族を対象にピア・カウンセリングや電話・対面による相談サービスを提供することを通して、その社会生活を支援し、生活の質を高めることを目的としている。

●3団体合計の月別相談件数の実績



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
訪問	7	12	7	8	7	11	8	5	7	5	13	12
面談	59	60	58	59	67	47	39	36	43	52	40	62
メール	14	43	37	80	74	46	36	40	30	25	61	11
電話	116	135	142	166	159	123	126	131	141	191	169	198

※メール相談には、ぷれいす東京のものは含まない。

Ⅰ　事業の概略

本事業は、以下の7つの柱からなっている。

① HIV陽性者参加型のピア・カウンセリングの実践とグループ・プログラムの開発と運営

② HIV陽性者を含むスタッフの研修及び育成

③ HIV陽性者の社会参加のためのサポート

※①～③に関しては、P29部門報告（ネスト）をご参照ください。

④フリーダイヤルによるHIV陽性者と周囲の人/確認検査待ちの人のための電話相談

⑤ピア・カウンセリングを支える対面相談

※④と⑤に関しては、P47の部門報告をご参照ください。

⑥「地域における当事者支援のためのスタディ・プログラム」

※希望者がいなかったため開催しなかったが、群馬サテライト・ミーティングを立ち上げた。

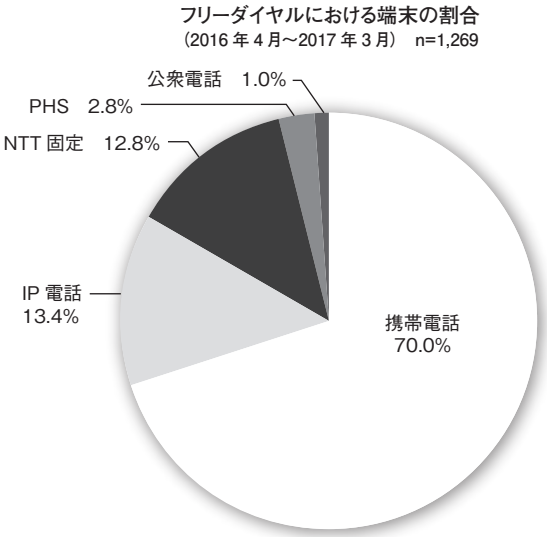
⑦在日外国人への相談サービスの提供

Ⅱ　事業の実績

④フリーダイヤルによるHIV陽性者と周囲の人/確認検査待ちの人のための電話相談

ここではフリーダイヤル（ぷれいす東京のみ電話相談で導入）の効果について考察する。

NTTカスタマーセンターの集計のため、無言電話や間違い電話も含む。通話総数は1,269件（2016年6月～2017年3月：4～5月は欠損）で、それ以外（通話中にて切断等）が4,288件あった。合計5,557件で、通話率は22.8%だった。時間帯によってはなかなか繋がらない場合もあったと想像される。



昨年と比較して、携帯電話からのアクセスが70.0%（昨年度：72.4%）、IP電話13.4%（17.4%）NTT固定12.8%（2.9%）PHSが2.8%（5.9%）公衆電話1.0%（1.4%）だった。件数は少ないが公衆電話からのアクセスもみられ、入院中に気持ちの整理や情報が少ない状況での相談ができる環境を確保していると思われた。HIVの専門でない医療機関で告知された場合、スマートフォンや携帯電話の検索で、この電話番号にたどりつき、相談に至ったケースもあった。

また地域別のデータで考察すると、東京都524件（41.3%）東京都以外の関東279件（22.0%）、中国・四国108件（8.5%）、近畿100件（7.9%）、北陸74件（5.8%）、九州70件（5.5%）であった。東京以外の県別では、神奈川160件、広島74件、大阪65件など、全国から相談がよせられていた。相談がなかったのは、青森、岩手、福島、和歌山、鳥取、佐賀の6県のみだった。

⑦在日外国人への相談サービスの提供

SHAREとCRIATIVOSの2団体の相談実績を合算して再集計している。

●相談者と対象者の属性

相談者はHIV陽性者がもっとも多く、のべで732件、次いで専門家201件、その他26件、パートナー/家族がそれぞれ7件だった。確認検査の結果を待っている間の相談も2件あった。言語によるコミュニケーション課題をもつ方が多く存在し、そうした方の心理的なケアに貢献していると思われる。

○外国語相談での相談者の属性（のべ件数）

（男：女：その他）

HIV陽性者	：	732（567：161：4）
パートナー	：	7（5：2：0）
家族	：	7（1：6：0）
専門家	：	201（61：140：0）
その他	：	26（13：13：0）

○外国語相談での対象者の属性（のべ件数）

（男：女：その他）

HIV陽性者	：	910（629：271：10）
確認検査待ち	：	2（1：1：0）
パートナー	：	2（2：0：0）
家族	：	4（1：3：0）
その他	：	55（33：17：5）

●国籍と言語

国籍/対応言語について、相談事業全体では、ブラジルの方からの相談が最も多く、次いでペルーの方の相談が多くよせられていた。またそれ以外のポルトガル/スペイン語圏の方からのアクセスもあった。ラテンアメリカ圏からの相談の多くはCRIATIVOSが対応している。SHAREには、タイ、フィリピン、中国などのアジア諸国からの移住労働者たちからの相談がよせられていた。また、数は少ないがその他の多様な言語によるコミュニケーションが求められており、多言語の支援ニーズが存在していた。

相談者の国籍／言語（のべ人数）n=973

ブラジル：386、ペルー：297、フィリピン：79、
コロンビア：37、タイ：34、メキシコ：34、
スペイン：31、日本：27、中国：9、
インドネシア：7、バングラデシュ：5、ネパール：4、
マレーシア：3、ギニア：2、アフリカ圏：2、
アジア圏：1、不明：15

●相談者の相談手段（のべ人数）n=717

相談や支援の手段はメールが最も多く、次いで電話、訪問／同行、来所面談と続く。各地の医療機関から対応の要望があるが、相談者の居住地は広域に及ぶため、メールや電話による対応を中心にしている現状がある。

○電話による相談（n=368）

（男：女：その他）

HIV陽性者　：216（155：61：0）
パートナー　：　6（4：2：0）
家族　　：　5（1：4：0）
専門家　　：123（41：82：0）
その他　　：　18（6：12：0）

○メールによる相談（n=497）

（男：女：その他）

HIV陽性者　：420（351：69：0）
パートナー　：　1（1：0：0）
家族　　：　2（0：2：0）
専門家　　：　68（18：50：0）
その他　　：　6（5：1：0）

○来所面談（n=6）

（男：女：その他）

HIV陽性者　：　6（2：0：4）

○訪問／同行（n=102）

（男：女：その他）

HIV陽性者　：　90（59：31：0）
専門家　　：　10（2：8：0）
その他　　：　2（2：0：0）

●外国語相談のサービス対象者の年代（n=973）

対象者の年代は、40代：473（48.6%）、30代：197（20.2%）、20代：117（12.0%）、60代以上：108（11.2%）、50代：54（5.5%）、～10代：24（2.5%）となった。

○外国語相談のサービス対象者の居住地域（n=973）

拠点ブロックが存在する各地域から相談がよせられており、最も多かったのが関東甲信越（東京以外）：587（60.3%）、東京：221（22.7%）、東海：93（9.6%）、近畿：23（2.4%）、海外：16（1.6%）だった。それ以外は数が少ないが、北海道、北陸、中四国、九州からも相談がよせられた。また、日本のみならず、海外からの相談もよせられており、母国との連携も相談ニーズとして同時に存在していることがわかった。

○外国語相談による相談対応時間（n=532／メールを除く）

相談時間は、30分以未満：357（67.1%）、30分～59分：21（3.9%）、60～119分：91（17.1%）、120分以上：63（11.8%）となった。

○外国語相談の相談内容（複数選択）

相談全体では、「医療体制・医療との関わり・連絡」が489件で最も多く、「通訳／翻訳」227件、「医療費や支払いについて」124件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」96件、「服薬・副作用に関する相談」93件、「社会資源活用の情報提供」92件、「在留資格や法律上の相談」86件、「通訳派遣及び調整」71件、「パートナーに関する相談」71件となった。その他に「HIVの情報提供」「母国情報の提供／帰国支援」「HIV検査や告知に関する相談」「心理や精神に関する相談」などの相談もあった。

電話相談では、「医療体制・医療との関わり・連絡」が106件で最も多く、「社会資源活用の情報提供」72件、「通訳／翻訳」59件、「通訳派遣及び調整」57件、「服薬・副作用に関する相談」42件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」41件、「在留資格や法律上の相談」39件、「医療費や支払いについて」33件、「HIVの情報提供」31件、「HIV検査や告知に関する相談」31件、「心理や精神に関する相談」29件、「パートナーに関する相談」26件、「生活上の具体的問題＆市民生活支援」24件、「母国情報の提供／帰国支援」23件となった。

メールの相談では、「医療体制・医療との関わり・連絡」が圧倒的に多く365件、「医療費や支払いについて」86件、「通訳／翻訳」67件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」52件、「在留資格や法律上の相談」46件、「服薬・副作用に関する相談」45件、「パートナーに関する相談」44件、「母国情報の提供／帰国支援」17件、「社会資源活用の情報提供」15件、「通訳派遣及び調整」14件、などとなった。

来所面談は、全体件数が6件だったので、内容は省略する。

訪問／同行では、「通訳／翻訳」での活動が多く101件、「医療体制・医療との関わり・連絡」18件となっていた。

各団体が提供したサービスの内容は以下のとおり。

■ CRIATIVOS（n=791）

電話相談（248）、メール相談（444）、来所面談（6）、訪問／同行（93）
相談者の国籍／使用言語は、ブラジル（378）、ペルー（297）、コロンビア（37）、メキシコ（34）、スペイン（31）等

■ SHARE（n=182）

電話相談（120）、メール相談（53）、対面相談（0）、
訪問 / 同行（9）
相談者の国籍／使用言語は、フィリピン（79）、
タイ（34）、中国（9）等

Ⅲ　事業の広報について

相談サービスの広報は、フリーダイヤルや外国語相談などの電話番号を掲載した印刷物の配布及びインターネットの活用により行なっている。またHIV陽性者本人やパートナー、家族にはもちろんのこと、行政や医療を含めた専門家／支援者への認知の向上にもつとめている。

パンフレット「HIV陽性者とその周囲の人のためのサービス」では、本事業を含めたHIV陽性者やその周囲の人へのサービス全般の広報をした。また「ぴぃちゃん」カードを作成して、フリーダイヤルの広報をした。（詳しくはP3を参照）

(2) のまとめ

SHAREとCRIATIVOS 2団体の外国語相談は、メールが最も多く、次いで電話が多かった。これは遠隔地からの相談が多くよせられていること、医療従事者などの専門家への言語サポートが存在していることが背景にある。専門家の外国語相談のニーズは、医療体制・医療との関わりなどHIV陽性者の対応に関する相談であり、それに伴う心理的な問題、パートナーに関する相談だけでなく、HIV陽性であることを知った医療機関や本人への心理的なケアも求められていた。また、通訳やビザに関する情報、母国の情報提供も多く求められていた。ちなみに、ぷれいす東京の電話や対面での相談サービスは、日本語対応が主であるが、英語を話す外国人の対応もできる範囲で行っている。

2020年にむけて、今後は、定住者にむけた相談だけでなく、旅行者などの対応も増えることが予想され、HIVを取り巻く環境において、他言語によるサービス提供のニーズがますます増えることが予想される。今後、本事業だけの対応では限界もあるため、自分たちの限界を踏まえた相談体制の見直しをしつつ、他の支援機関とも連携し、できることに取り組んでいきたいと考える。

（文責：佐藤 / 生島 / 牧原）

研究･研修部門では、当事者の視点を生かした独自の研究や、受託研究などのさまざまな調査研究、HIV/エイズやセクシュアリティ等の講師派遣や、研修の企画・運営などを行っています。

担当…生島、牧原、大槻

研 究

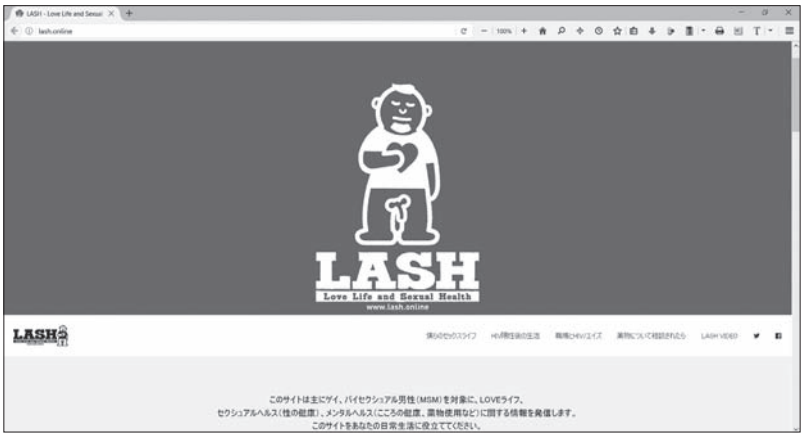
厚生労働科学研究費補助金

2015 年度に引き続き、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「地域において HIV 陽性者と薬物使用者を支援する研究」の調査研究を行いました。研究代表者として理事の樽井、研究分担者として代表の生島が関わったほか、ぷれいす東京のスタッフが協力しました。

くわしくは…

厚生労働科学研究班の制作物や報告書などは、下記の Web サイトに掲載しています。

「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」
地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究班
http://www.chiiki-shien.jp/



「Love Life and Sexual Health (LASH)」
地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究班
http://www.lash.online/

ぷれいす東京Webサイト「調査や活動から見えたこと」
http://www.ptokyo.org/know/insights

地域において HIV 陽性者と薬物使用者を支援する研究（3 か年計画の 2 年目）

研究代表者：樽井正義（特定非営利活動法人ぷれいす東京）

2015 年度（1 年目）

HIV 陰性の MSM 対象の薬物使用に関する面接調査
依存症クリニックにおける HIV 陽性・陰性者の診療録調査
地域の諸機関連携による HIV 陽性者・薬物使用者の支援事例の調査
薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査（通報義務と診療義務）

2016 年度（2 年目）

MSM 対象の薬物使用等に関する質問紙調査 ..... A

地域の諸機関連携による HIV 陽性者・薬物使用者の支援事例の調査 ..... B

依存症クリニックにおける HIV 陽性・陰性者の診療状況の調査 C

男性同性愛者が利用する商業施設経営者の面接調査 ..... D

薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査（薬物使用とその対応の現状）..... E

2017 年度（3 年目）

MSM 対象の薬物使用等に関する質問紙調査（分析と支援の検討）
依存症クリニック受診を促進した契機の調査
地域の医療機関・NGO 支援者から回復を促進した契機の調査
MSM（薬物使用者）が薬物使用・不使用の分岐点で不使用を促す資材の開発
地域の諸機関・支援者のための、薬物関連相談対応のための資材開発

成果物

HIV 陽性者・薬物使用者と周囲の人たちを支援するガイドブックと、
MSM（薬物使用者）の薬物の不使用・使用中止を促す資材の開発

A MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査 ～男性とセックスをする男性向けの出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査～

研究分担者：生島嗣（特定非営利活動法人ぷれいす東京）

MSM の出会いに関連した環境が個人の性行動や薬物使用行動に与える影響を把握することを目的に、多くの MSM が出会いや交流を目的に利用する国内最大のゲイ向けアプリ業者の協力を得て調査への協力を呼びかけ、その利用者にターゲットを絞った調査を行った。MSM 向けの出会い系アプリ利用者の特性を把握するのに役立つデータを収集することができた。

データ・クリーニング中の途中経過では、調査説明ページへアクセスしたのは 24,977 人であり、そのうち説明に同意し、回答を試みた者は 10,544 人であった。全問（97 問）に回答した者は 72%（7,587 人）であった。回答者にはトランスジェンダーも含まれるなど、セクシュアリティは多様であることが確認された。全問回答者のうち 25.1%が、薬物使用経験があると回答した。使用のきっかけは「自ら望んで使用」20.0%、「相手に誘われて」71.6%、「自分の同意のないまま摂取していた」8.3%であった。

B 地域の相談支援機関利用による薬物使用 HIV 陽性者の回復事例の調査

研究分担者：大木幸子（杏林大学）

MSM である HIV 陽性者の薬物使用、依存の形成、薬物使用からの回復といった分岐点で、継起している使用あるいは不使用に導く諸要因を明らかにすることを目的とした調査を行った。常用的な薬物使用経験をもつ HIV 陽性である MSM を調査参加者（8 名）に、薬物使用、依存形成、そして回復にいたる経験について半構成的面接を行った。さらに、それら 8 名に支援をした者に支援経過について半構成的面接を実施した。収集した 8 名のデータからは、薬物の習慣的使用開始・不使用の分岐点の要因として 5 つのカテゴリー、薬物使用継続の分岐点の要因として 6 カテゴリー、薬物依存からの回復の分岐点の要因として 7 カテゴリーが抽出された。

C 薬物使用者による依存症クリニック受診経緯の調査

研究分担者：肥田明日香（医療法人社団アパリ アパリクリニック）

MSMの薬物使用者への支援に有用な基礎資料を収集するため、薬物使用者に医療的支援を提供している依存症クリニックを受診中のMSMの受診に至る経緯について明らかにすることを調査の目的とした。

依存症回復プログラムを提供する医療施設へ来診した者のうちグループプログラムに参加経験のあるMSM 3名を対象に、半構造化個別インタビューを実施し、質的記述的に分析を行った。現在、本調査は継続中であるが、参加者は、「ゲイである自分が居心地のよい場所に通う」が、そこで「初めて薬物を使う」こととなった。その後「薬物を継続／断続的に使用する」うちに「使用薬物が覚せい剤に移行する」。そして「覚せい剤の使用がエスカレートする」ことで依存状態となり、その結果「“まずい”“もうダメだ”と自覚する」。これを機にそれぞれの径路をたどるが「逮捕を経験」したのち依存症回復プログラムを提供する医療施設への受診に至り、グループプログラムを通して「自身の薬物使用の背景にある問題に気付き取り組む」状態となっていた。

薬物使用のきっかけがセックスの相手との出会いや交流の場であったことは今回の参加者の特徴であったが、薬物使用がコントロール不能となり孤立していく過程はセクシュアリティを問わない依存症と同様だと考えられる。しかし薬物使用がエスカレートしていくなかでHIV 感染を含む感染症への合併が多く見られる一方、薬物使用に問題を感じていても通報されることへの恐怖、相談先が分からないなどにより相談できず、その結果薬物を使い続ける状況があることが分かったため、より早期に関係機関につながる支援体制を整える必要性が示された。

D 男性同性愛者が利用する施設の国際化に関する基礎調査

研究分担者：沢田貴志（神奈川県勤労者医療生活協同組合 港町診療所）

外国人男性同性愛者のHIV検査や医療アクセスを支援するための基礎資料とすることを目的に、都内の男性同性愛者を主要な顧客とする飲食店で調査を行った。対象は、外国人の顧客が比較的多い飲食店の経営者などであり、半構造化面接調査にて外国人顧客の動向・推定出身地・日本語会話力・健康情報へのアクセスに関する印象などの聞き取りを行った。

近年、アジアの近隣諸国を中心に外国人の顧客は増えてきており、短期間の滞在で行き来をする若い旅行者も増えている。こうした人々に対してHIV検査・医療のアクセスについての情報を多言語で提供する必要性は増していると考えられる。一方で、日本で生育した若者や就労のために若年で来日した外国人の若者の中には日本語・外国語双方の情報が得にくい立場にいる男性同性愛者が少なからず含まれており、HIVに関して非常にVulnerableな立場にある。

日本で報告されるHIV陽性外国人のうち多数を男性同性愛者が占めるなかで、重複する要因で社会的な支援を受けにくい人々に対して、その状況を十分把握した支援策の構築が必要であることが明らかとなった。

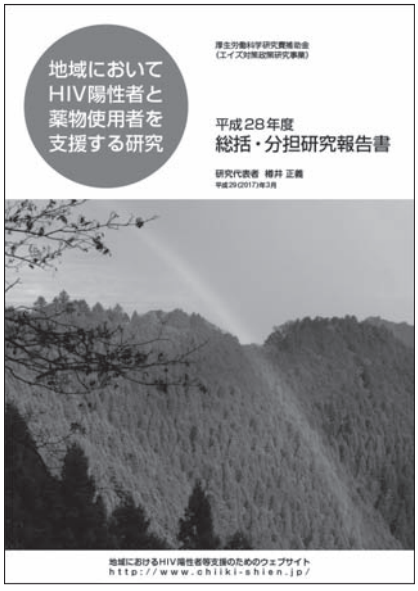
E 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査 ―日本における薬物使用の現状と対応―

研究分担者：樽井正義（特定非営利活動法人ぷれいす東京）

日本における薬物使用の現状と対応に関する情報を、つまり私たちの社会における薬物使用、刑事的対応、薬物取締法と刑罰、政策対応、地域社会での対応の現状に関する情報を、先行研究や関係省庁の白書等を調査して概括した。

日本における薬物使用は、諸外国と比べればかなり低い水準にあり、使用薬物では過去10年間に覚せい剤は減り、大麻が増えているが、いずれかの薬物の生涯使用経験率は0.1%で推移している。HIV陽性者の薬物使用は、全国住民調査よりかなり高い。薬物事犯検挙人員は2015年に13,542人、2000年頃は20,000人前後だったのが2006年には15,000人を下回り、以降微減ないし横ばいの傾向にある。その内、覚せい剤が8割、所持ないし使用も8割を占める。薬物取締関係法で定める個人使用に対する懲役刑は、覚せい剤で10年以下、大麻で3年以下、有機溶剤は1年以下とされている。覚せい剤の初犯は一般に懲役1年6ヶ月・執行猶予3年、再犯は懲役2年前後の実刑が課される。2016年から刑の一部執行猶予制度が導入されている。2013年の第四次薬物乱用防止五か年戦略は、啓発の強化、治療と支援、取締の徹底、国内流入阻止、国際連携の6つの目標を掲げているが、予算で見ると、国内流入阻止の92.7%に次いで治療と支援は2位だが4.1%に留まり、厚生労働省予算での増額が望まれる。地域社会において薬物依存症に対応している医療機関は少なく、回復プログラムを提供しているのは全体の5.1%に過ぎない。現実にプログラムを担っているのは、主として民間の自助グループであるNAやダルクである。

日本における薬物使用への対策は、使用を主として処罰されるべき犯罪と見なす傾向が強く、健康問題と捉え、依存症からの回復や社会生活への復帰を支援する努力はきわめて不足している。薬物使用者とその関係者を支援する公的機関と民間団体の活動の充実が求められる。



研究報告書もあわせてご覧ください。
http://www.chiiki-shien.jp/resource.html#a_H28hokoku

また、厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「効果的な献血推進および献血教育方針に関する研究」（研究代表者:白阪琢磨）には、研究分担者として生島が参加しました。

HIV 感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究

研究分担者：生島嗣（特定非営利活動法人ぷれいす東京）

安全な献血血液確保のための有効な情報伝達のあり方および普及啓発方法を検討し提示するため、わが国のエイズ発生動向調査で感染者・患者報告数の多くを占め、HIV 感染のハイリスク層の一つである MSM における献血についての意識や行動の実態を明らかにする調査を実施した。今年度は、自記式質問紙調査を計画し、生涯の献血教育に触れた機会、献血時の問診を受けた経験に関する質問に加え、これまでの MSM としての性行動、HIV 検査受検行動に関する質問を設けた。分析対象 2,026 件のうち、献血経験割合は 65.8%で、過去 1 年の献血経験割合は 21.8%であった。献血をする動機は社会貢献の意識が最も多く、次いで健康管理などが挙げられていた。集団献血の経験者は 46.0%で、そのうち学校が 47.8%、職場が 44.0% だった。献血の制限項目の認識は 81.2%が認知をしているものの、献血場所で知ったという人が 70.2%と最も多く、事前の情報提供に課題がのこされていた。

学会発表

・第 21 回国際エイズ会議（2016 年 7 月 18 日～7 月 22 日 於　南アフリカ・ダーバン）

「Resolved and unresolved issues among people living with HIV in Japan after 10 years of advancement in medical environment: results from nationwide multicenter surveys from 2003 to 2013」

・第 75 回日本公衆衛生学会大会（2016 年 10 月 26 日～10 月 28 日　於 大阪）

「HIV 陽性者のための学術集会参加支援プログラムについての考察」

・第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会（2016 年 11 月 24 日～ 11 月 26 日　於 鹿児島）

「社会的病としてのエイズとその対策―混沌から共存へ 35 年の歩み」

「エイズ対策における人権への配慮　その実績と課題」

「ぷれいす東京における HIV 陽性者ボランティアの参加状況に関する考察」

「身体に障害をもつ HIV 陽性者とバディの関わりの一例報告」

「MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査～薬物使用経験のある MSM を対象としたインタビュー調査から」

「薬物依存症クリニックを受診している MSM の受診までの経過―診療録調査から―」

「医療機関と NGO の連携による HIV 検査キット配布会における、対面相談希望者の相談内容に関する検討」

「医療機関と NGO の連携による、MSM を対象とした HIV 検査“HIVcheck”における啓発とキット配布体制に関する検討」

「医療機関と NGO の連携による郵送検査の手法を用いた HIV 検査の取り組み」 など

2016年度の研究活動を振り返って…

MSMが利用する「出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査」には非常に大きな反響があり、全国から多くの回答が寄せられた。現在データ・クリーニング中で、終了次第、分析・発表を行う予定だ。回答者は10～30代が7割を占め、次世代の若者が多く回答する調査となった。HIV検査の受検割合は6割と高めなのだが、コンドーム使用や精神の健康度には課題がある集団でもあった。詳細の報告をご期待ください。

by いくしま

講師派遣・研修

ぷれいす東京では、HIV/エイズの一般知識、HIV陽性者支援、性教育やセクシュアリティ、人権などをテーマに、学校や企業、専門家の集まりなどへ向けた講師派遣や研修の企画・運営を行っています。講師派遣では、HIV陽性者の支援経験が豊富な相談員やセクシュアリティの専門家、性教育の専門家などが出講しています。企業や教育機関、保健所を含む行政機関、医療機関、国際協力団体などの研修を受託し、独自の研修企画の立案も行っています。

くわしくは…

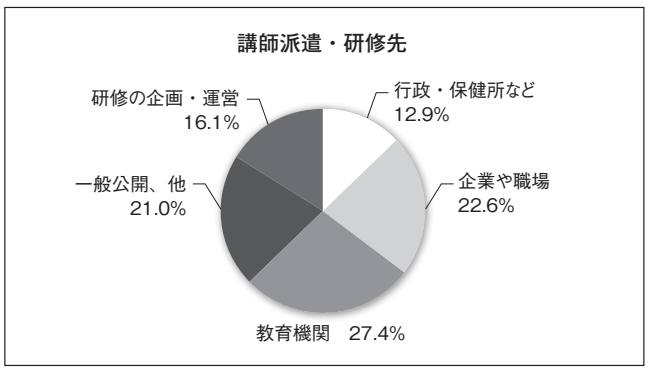
講師派遣や研修をご要望の場合は、ぷれいす東京Webサイト「講師派遣・研修の依頼」（http://www.ptokyo.org/know/lecturers）からご連絡ください。

2016年度の講師派遣・研修実績は以下の通りです。

月	日	内容	参加者数（人）				
			行政・保健所など	企業や職場	教育機関	一般公開、他	研修の企画・運営
4月	26日（火）	岡山県	26				
5月	7日（土）	日台HIVシンポジウム 「プライドパレードで、台湾と日本のHIVの現状と課題を考える」				200	
	21日（土）～ 22日（日）	青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修					4
6月	3日（金）	東京都職員共済組合		83			
	8日（水）	コンサルティング会社		12			
	9日（木）	早稲田大学本庄高等学院			352		
	21日（火）	楽天ソシオビジネス株式会社		3			
	23日（木）	大田区立六郷中学校			101		
	26日（日）	「NPO法人akta 2015年度活動報告会」				60	
7月	7日（木）	東京工業高等専門学校			208		
	12日（火）	人材派遣会社		12			
	13日（水）	東京都保健師研修会					18
	13日（水）	東京女子学院高等学校			100		
	15日（金）	千葉県研修会					12
	22日（金）	東京都立城東職業能力開発センター江戸川校			80		
8月	7日（日）	『AIDS文化フォーラムin横浜』				28	
	29日（月）	仙台研修会					18
	29日（月）	舞岡中学校ブロック4校研究協議会			100		
9月	11日（日）	「2016男女共同参画フォーラム 『男女共同参画 学ぶ・つながる・広がる・変わる』」				18	
	19日（祝・月）	青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修					1
10月	5日（水）	IT関連会社		15			
	10日（祝・月）	高松ダルク（香川ダルク）				25	
	13日（木）	「【第94回市民とNPOの交流サロン】共に生きる～HIVをもっている人も、そうじゃない人も一緒に生きている～」				7	
	17日（月）	東京障害者職業センター		15			
	28日（金）	dista学習会 「エイズをめぐる公衆衛生とLGBT当事者団体との連携」				34	
	31日（月）	内閣府「東南アジア青年の船」ディスカッションプログラム “Health Education（Measures against HIV/AIDS）”					36
11月	9日（水）	帝京平成大学			200		
	18日（金）	埼玉県					14
	18日（金）	台東区立浅草中学校			109		
	21日（月）	東京障害者職業センター		18			
	28日（月）	IT関連会社		20			

月	日	内容	参加者数（人）				
			行政・保健所など	企業や職場	教育機関	一般公開、他	研修の企画・運営
12月	1日（木）	大田区学校保健会 学術講演会			35		
	1日（木）	御徒町台東中学校			146		
	4日（日）	第4回北東北性教育研修セミナー 「HIV／AIDSに関する実践を基に考える―差別、偏見、スティグマ。生きづらさを生み出す社会の課題―」				40	
	12日（月）	野田健康福祉センター	20				
	12日（月）	東京女子大学			214		
	14日（水）	東京都エイズ予防月間講演会 「HIV/ エイズ ともに働くとき知っておきたいこと」				90	
	17日（土）	「#渋谷にかける虹」ミニプレゼン				24	
	20日（火）	東京都「アジア感染症対策プロジェクト 第8回共同調査研究会議」	40				
	20日（火）	鳥居薬品株式会社		35			
1月	9日（祝・月）	特別養護老人ホーム		12			
	9日（祝・月）	SHIP スタッフ研修		10			
	11日（水）	「#渋谷にかける虹」ミニプレゼン				24	
	16日（月）	上野学園中学校			37		
	16日（月）	東京都保健所職員等エイズ専門研修	79				
	18日（水）	上野学園高等学校			167		
	25日（水）	神奈川県	20				
	28日（土）	平成28年度第3回HIV/AIDS症例懇話会 「HIV陽性者の長期療養支援（基礎編）」	71				
	31日（火）	トランスジェンダーのためのHIV・性感染症勉強会					25
2月	9日（木）	武蔵野会		78			
	11日（祝・土）	HIVと性の教育セミナー「トランスな私たちと性の健康」					22
	19日（日）	HIV陽性者支援協会 「HIV陽性者による第30回日本エイズ学会参加報告会」				34	
	25日（土）	倉吉市「人権のために学ぶ同和教育講座」 病気にかかわる人の人権「HIVとともに生きるために」				8	
	25日（土）	武蔵野会群馬		17			
	25日（土）～ 26日（日）	青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修					6
3月	2日（木）	東京都立中央ろう学校			70		
	3日（金）	JICA九州平成28年度課題別研修 「HIV/ エイズ予防および対策～MDG6達成にむけて～」	11				
	6日（月）	茨城県エイズ対策委員会	22				
	7日（火）	台東区立駒形中学校			99		
	8日（水）	大田区立御園中学校			140		
	14日（火）	練馬区立旭丘中学校			46		
	23日（木）	日本オラクル株式会社		8			
参加者数合計（人）			289	338	2,204	592	156
実施回数合計（回）			8	14	17	13	10
実施1回あたり参加者数（人）			36.1	24.1	129.6	45.5	15.6

※このほかに、各部門で内部研修等を実施しています。



2016年度の講師派遣・研修活動を振り返って…

啓発研修は以前とは大きくニーズが変化している印象だ。過去にHIV陽性者を身体障害者（免疫機能障害）として受け入れた経験のない企業の人事、役員、産業医が集う意思決定の場に、情報提供者として招かれることが増え、一般の職員向けの研修は減少している。都内では、既に10～30人と多くのHIV陽性者を受け入れている企業も増えている。また、講師派遣は、職場にとどまらず、介護施設や福祉的就労の場を提供する事業者などからも依頼があるなど、ニーズが移り変わっているように感じる。

by いくしま

HIVと性の教育セミナー「トランスな私たちと性の健康」

2016年度は、以前から相談・支援の場で散見されていたトランスジェンダーの支援ニーズについて、厚生労働科学研究の一環でもデータが収集され、それらをもとに当事者コミュニティと連携して、トランスジェンダー向けの勉強会を開催する運びとなりました。調査研究と支援活動とがつながった新たな取り組みの一例となっています。

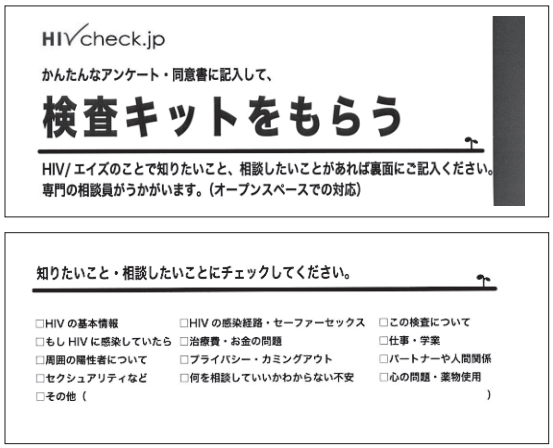
2017年度には、代表の生島が第31回日本エイズ学会学術集会・総会の会長を務めるほか、厚生労働科学研究費補助金による研究事業が3か年計画の最終年度を迎えます。地域に根差してHIV/エイズの相談・支援を行うぷれいす東京ならではの視点等を大切に、今後も研究・研修活動を進めていきたいと思います。

（文責：大槻）

相 談 員 派 遣

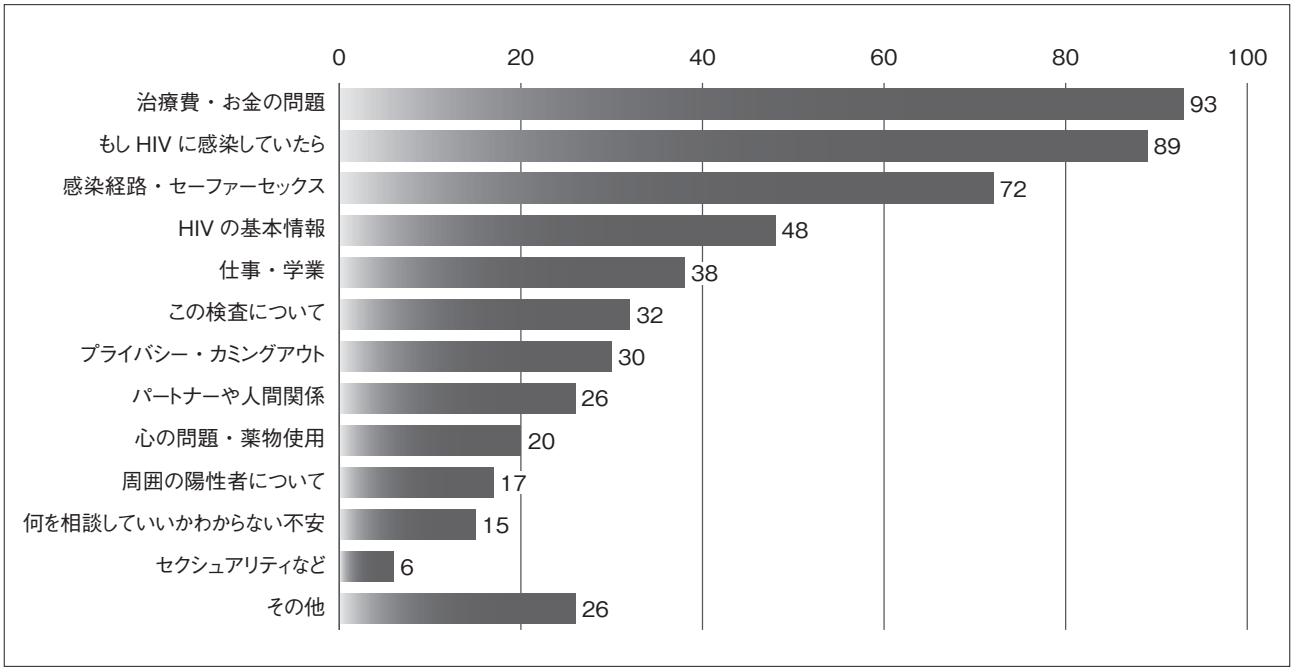
国際医療研究開発費 疾病研究分野「UNAIDS が掲げる臨床 評価指標 90-90-90 達成のための男性同性愛者に対する新しい HIV 検査システムの構築に関する研究」（26 指 122）への相談員派遣

昨年度に続き、国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター（ACC）の岡慎一氏が中心となり実施する研究に、NPO 法人 akta とともに協力した。この研究の目的は、MSM（男性とセックスをする男性）の HIV 予防啓発や陽性者支援を行っている NGO と、ACC が共同で、郵送を利用した HIV 検査システムを開発し、MSM を対象にした新たな HIV 検査の手段を提案することにある。今回の研究枠での検査はすべて無料匿名で実施された。検査の受付や結果返しの窓口となる Web サイトの構築、MSM 向け郵送検査の広報、検査キットの配布は akta が中心となり実施し、検査前後の相談支援については、ぷれいす東京が相談員の派遣や電話相談で協力した。その 76 回を集計した。



相談カード

［配布期間］　2015 年 8 月～ 2016 年 12 月の毎週木曜日 19 ～ 22 時　合計 76 回　@ akta
（うち 4 回は土・日@ akta、3 回は土曜日@上野 SHARE ＝国際保健協力市民の会）
［相談員派遣数］のべ 45 人
［相談数］　相談実施：232 件、相談希望：247 件、検査キット配布数：1,702 件
［相談率］　14.5%
［相談内容］　相談希望者が記入した、相談カードにチェックされた項目（複数選択あり）を集計した。



上位 3 位までの主な相談内容

■ 治療費・お金の問題

「金銭的に余裕がない、陽性とわかったら、大変なことになるのでは？」
「もし陽性だったらお金はどれだけ必要か？自己負担はいくらなのか？」
「障害者手帳の情報は知っていたが、具体的な治療費は知らなかった。」 など

■ もしも HIV に感染していたら

「普通に生活できるというのは本当？普通ってどの程度か？」
「恋愛・SEX ができなくなるか？」「家族、友人、会社に伝えないといけないか？」
「セクシュアリティがばれないか心配。」 など

■ 感染経路・セーファーセックス

「2 年前から MSM として行動を始めた。SEX の際にどこまで OK か？」
「仕事などでストレスがあると SEX を求めて行ってしまう。」
「ネットでオーラル SEX ではほぼ感染しないとあるが本当か？」
「パートナーが浮気をしていた。相手は 2 人。」 など

※陽性者が身近にいる相談者の内訳

陽性者が近くにいる相談者が 28 件あった。
彼・パートナー（6 件）、元彼（3 件）、
セックスフレンド・SEX 相手（4 件）、友人（14 件）、陽性者本人（1 件）で、相談者の 11.3%であった。MSM の周囲にいる陽性者の存在が見えてくる。

相談内容から見えてきたことのまとめ

■ より具体的な状況を想定した質問が寄せられた。

感染不安の電話相談では、感染リスクの確認や HIV 陰性を想定した相談が多いが、本相談では陽性を想定した質問が多く寄せられた。

■ 情報が十分に届いてない相談者も存在した。

「HIVの基本情報」を持たない相談が 43 件あった。

■ 受検者の 14.4% が相談を希望した。

ゲイ・バイセクシュアルを対象とした検査会で、開催場所も akta であることから、性行動やセクシュアリティを含む相談がしやすかったと考えられる。

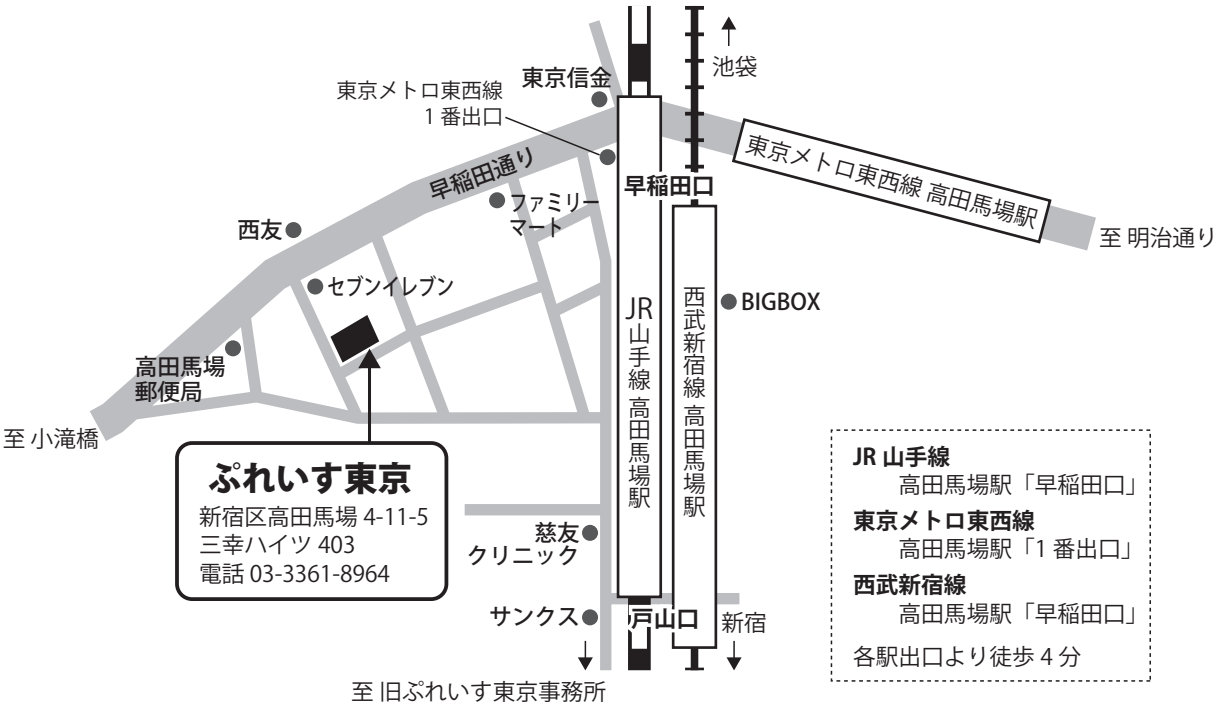
■ 相談希望カードを配置した。

何を相談したいかが目で見てわかるので、すぐに本題に入れたり、内容的にも深い話ができた。また相談時間の短縮にも繋がった。

その他の相談員派遣

・厚生労働科学研究費補助金【エイズ対策政策研究事業】
HIV検査受検勧奨に関する研究
上野検査相談会…のべ 2 人（1/21、1/22）
・草加保健所…1 人（8/7）

文責（生島、佐藤、福原）



ぷれいす東京　2016 年度年間活動報告書

2017 年 5 月 28 日発行

発行　特定非営利活動法人　ぷれいす東京
Positive Living And Community Empowerment TOKYO
〒 169-0075　東京都新宿区高田馬場 4-11-5　三幸ハイツ 403
TEL：03-3361-8964　FAX：03-3361-8835　E-mail：office@ptokyo.org
ゆうちょ銀行振替口座：00160-3-574075「特定非営利活動法人　ぷれいす東京」
URL：http://www.ptokyo.org/
Facebook：http://www.facebook.com/PLACETOKYO
Twitter：@placetokyo（http://twitter.com/placetokyo）
印刷　株式会社翔美